

学位請求論文

# モンゴルにおけるチベット仏教受容の一形態

—モンゴル語訳『菩提道次第大論』と

『正字法・賢者の源』を中心として—

国際文化専攻

ア Ril ディー ボルマー  
ARILDII BURMAA

## 目次

序論	3
第1章 『菩提道次第大論』のモンゴル語訳の種類、年代、訳者、流布の実態	7
第1節 書誌情報概観と先行研究	7
第2節 各モンゴル語訳『菩提道次第大論』の翻訳者、年代の確定	7
第3節 各訳の帰敬偈の対比	21
小結	35
第2章 モンゴル語訳『ツォンカパ全集』の二つの版	36
第1節 書誌情報概観と先行研究	36
第2節 北京版チベット大蔵経と『チャンキャ全集・ツォンカパ全集』	38
第3節 モンゴル語訳『ツォンカパ全集』の二つの版	40
第4節 モンゴル語北京版テンギユル収録の『ツォンカパ全集』の目録	40
第5節 モンゴル語訳『ツォンカパ全集』の目録の比較	42
小結	46
第3章 チャンキャ著『正字法・賢者の源』の特徴 —『二巻本訳語釈』との比較を通じて—	47
第1節 書誌情報概観と先行研究	47
第2節 『賢者の源』の成立事情	50
第3節 『賢者の源』の文献的背景	54
第4節 『賢者の源』における『二巻本訳語釈』と共通・不共通な翻訳規則	56
第5節 『賢者の源』の内容	69
小結	74
第4章 欽定蔵蒙訳語集『賢者の源』の訳語の有効性 —『菩提道次第大論』と『入菩薩行論』の訳語を中心として—	75
第1節 書誌情報概観と先行研究	77
第2節 テンギユル編集時の『入行論』における訂正	79
第3節 『賢者の源』の欽定訳語の有効性 —『入行論』の引用文を通して—	81
第4節 『賢者の源』の欽定訳語の有効性 —3種の『菩提道次第大論』を通して—	84
小結	93
結論	93
今後の課題	95
文献表	96

## 序論

本研究は、チベット仏教がモンゴルにどのように受容されたかを解明するために、その一例として、チベット仏教における最も有名な著作ツォンカパ著『菩提道次第大論』のモンゴル語訳の経緯および、チベット語仏典をモンゴル語に翻訳する際の原則と対照語彙を規定したチャンキヤ・ルルペードルジェ (Tib. lCang skya rol pa'i rdo rje, 1717-1786) の『正字法・賢者の源』(以下『賢者の源』と略称) の有効性を検討することを目的としている。

モンゴル人がチベット仏教に出会ったのは13世紀である。1246年にサキヤ・パンディタ・クンガゲルツェン (Tib. Sakya paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan, 1182-1251) がモンゴルを訪れ、仏教をもたらして以来、仏教は次第にモンゴル人のあいだで優勢な宗教として定着してきた。特に16世紀後半にダライラマ3世ソーナムギャムツォ (Tib. bSod nams rgya mtsho, 1543-1588) がモンゴル布教に成功した結果、ダライラマが属するゲルク派の教えが栄え、ゲルク派の創始者ツォンカパ (Tib. Tsong kha pa blo bzang grags pa, 1357-1419) の主著『菩提道次第大論 (Tib. Byang chub lam rim chen mo) 』も広くモンゴルに普及することとなった。その過程でモンゴル語訳は数回試みられ、17世紀以降、21世紀に至るまでの間に7種類のモンゴル語訳が作られている。現代になってからでも、ダライラマ14世が繰り返し『菩提道次第大論』に関する法を説くことにより、その講演内容をまとめた書物や、その内容を部分的に解説した書物が多く出版され、また完本訳 Булган Т. (2004, 2006, 2007) も出版されている。

日本や中国で「大蔵経」と呼ばれている仏教の聖典群は、チベット・モンゴルの仏教ではカンギュル・テンギュルと総称され、前者カンギュルは「釈尊の言葉 (Tib. bka') を翻訳したもの (Tib. 'gyur) 」の意味であり経典を集めており、後者テンギュルは、仏の言葉に対し後世のインドの聖者が著した「論書 (Tib. bstan) を翻訳したもの (Tib. 'gyur) 」を収録している。最初のカンギュル・テンギュルは、元朝第四代仁宗ボヤント・ハーン (Mong. Buyantu qayan, 漢: 普願篤汗、在位 1311-1320) の時代に建立された旧ナルタン (写本) である<sup>1</sup>。

最初の木版によるカンギュルは、明の永楽帝 (1340-1424 在位 1402-1424) により 1410 年に開版され、続いて明の万暦帝 (1563-1620 在位 1572-1620) によって 1605 年に開版された。1692 年には清の康熙帝 (1654-1722 在位 1661-1722) によってカンギュルが、1724 年に雍正帝 (1678-

---

<sup>1</sup> 御牧 (1987) p. 281.

1735 在位 1722-1735) によってテンギユルが開版された。これが現在伝わっている北京版チベット大蔵経である。

モンゴル大蔵経に関しては、カンギユルが 1602-1607 年に完成されたが、リグデン・ハーン (Mong. Ligden qaγan, 1592-1634 在位 1604-1634) の命令により仏典の翻訳が増書され、それが 1628-1629 年に金字化された<sup>2</sup>。モンゴル語訳の木版本は、北京版チベット大蔵経に基づき、康熙帝 (1654-1722 在位 1661-1722) がカンギユルを (1720 年)、乾隆帝 (1711-1799 在位 1735-1796) がテンギユル (1749 年) を開版した。これが北京版モンゴル大蔵経である。

チベット大蔵経には (一部の例外を除き<sup>3</sup>)、インド原典のチベット語訳しか収録されていないが、雍正帝の勅令によって成立した北京版チベット大蔵経 (1724) には、ツォンカパとチャンキヤ 2 世ガワンロサンチュエデン (Tib. Ngag dbang blo bzang chos ldan, 1642-1715) の全集が加えられた。『ツォンカパ全集』と『チャンキヤ全集』は、そのままモンゴル語訳テンギユルにも収録されている。このモンゴル語訳テンギユルとそこに含まれる『ツォンカパ全集』の成立は、モンゴルにおけるチベット仏教受容の大変大きな事件であった。その間の経緯について本論文でできる限り明らかにしたい。

さて、もう一つ、モンゴル語訳テンギユルの成立にかかわる重要な著作がある。乾隆帝のラマであり国師に任ぜられたチャンキヤ・ルルペードルジェの著した蔵蒙対照語彙集『賢者の源』である。

9 世紀古代チベット吐蕃王朝のティソン・デツェン王 (Khri srong lde btsan, 742-797) は、仏教をチベットの国教として定め、仏典翻訳を国家事業として遂行した。国家的事業としてサンスクリットの仏典をチベット語に翻訳した際に、仏典をいかに統一的な訳語や規則に則ってチベット語に翻訳するかが大きな問題となった。その問題を解決すべく編纂されたのが、チベット語翻訳語の統一を図る梵蔵対照語彙集『翻訳名義大集』 (*Mahāvīyūtpatti*) とその難語釈と言われる『二巻本訳語釈』 (*sGra sbyor bam po gnyis pa*, 814) である<sup>4</sup>。後者の序文には、仏典をサンスクリットからチベット語に訳するときの翻訳方針が説明されている。以後、仏典の翻訳は、『翻訳名義大集』の訳語と、『二巻本訳語釈』の翻訳規則に則り遂行され、それ以前に翻訳されていた経典も、原則的にそれらに基づいて校訂するよう指示されている。

<sup>2</sup> 御牧 (1987) pp.279-291, Мацукава (2017) pp. 152-155, Sečenbilig S. (2017) pp.116-127.

<sup>3</sup> 少数であるが、教法前伝期 (*bstan pa snga dar*) のチベット人の著作も含まれている。例えば、本論文でも言及する『二巻本訳語釈』や『翻訳名義大集』はチベット人の著作であるが、大蔵経に収録されている。

<sup>4</sup> 西沢 (2017) pp.108f., 129, 135.

チベット語訳仏典をモンゴル語に翻訳する際にも、古代チベットと同様の問題に直面した。それを解決すべく、古代チベット王国の故事に倣って、乾隆帝は国師であるチャンキヤに、（おそらくはチャンキヤからの進言に基づき）モンゴル語の訳語の統一を図る蔵蒙語彙集を編纂するよう命じた。それが『賢者の源』（1742）である<sup>5</sup>。この著作が『翻訳名義大集』や『二卷本訳語釈』のような影響力を持っていたのかどうか、その後のモンゴル語翻訳や校訂にどのような影響力を及ぼしたのかという問題も本論文の具体的な課題の一つである。

以下に本論文の各章の考察内容を簡単に紹介しておきたい。

第1章においては、ゲルク派の開祖ツォンカパの『菩提道次第大論』のモンゴル語訳は数回行われたが、これまでその実態は明らかではなかった。本章では、その翻訳の種類を、現在確認できる限りで調査し、奥書や歴史文献を元に、翻訳年代を確定あるいは推定した。また、奥書を持たないため翻訳者が確定できない写本や木版も含めて、すべての翻訳が揃う帰敬偈を対比し、翻訳の影響関係などを考察して、時間的な前後関係も考察した。

第2章においては、モンゴル語訳テンギユル附属の『ツォンカパ全集』と、その直前に編纂されたモンゴル語訳『ツォンカパ全集』、および北京版チベット大蔵経附属の『ツォンカパ全集』の関係について考察する。これらの相互関係についても、これまで全く取り上げられて来なかった。現在のところモンゴル語訳『ツォンカパ全集』はこの二つの版しか知られていない。また前者は一部が残存するのみで、刊本はテンギユル編纂以前に成立していたと思われる『ツォンカパ全集』のみである。一方で、目録に関しては、三種類が現存する。それらの異同も含めて、文献学的な調査を行った。

第3章は、北京版テンギユルおよび附属の『ツォンカパ全集』をモンゴル語訳していく際に、本訳語の統一のために作成されたチャンキヤ著『賢者の源』である。まずはこの著作の成立事情を検討し、またそのモデルとなった『二卷本訳語釈』との関係を明らかにする。この二書は似ている点と、大きく時代が異なるが故に異なっている部分がある。さらに『賢者の源』は他の著作との類似性も認められる。それらを通して『賢者の源』が伝統を継承している点と新たな特徴とを明らかにする。本書についての従来の研究は紹介程度のものであったので、本章の研究は本格的な文献学的研究として大きな成果をもたらすものと期待する。

---

<sup>5</sup> ボルマー（2020）p. 172.

第4章では、『賢者の源』の著作目的であるモンゴル語訳の統一という課題が、どの程度効果のあったものであるかを『菩提道次第大論』に最も多く引用されるシャーンティデーヴァの『入菩提行論』（以下、『入行論』と省略）の新旧訳語を、『菩提道次第大論』の引用も含めて比較検討する。同書は古く元朝時代にチョイジ・オドセル (Mong. Čosgi Odsir, Tib. Chos kyi 'od zer) 6 訳から知られている。この訳語が『賢者の源』の出現以降どのように変化したかを辿った。また、『賢者の源』の翻訳規則の特徴の一つに、ゲルク派の教学に基づく注意が含まれているが、これも同様に、『菩提道次第大論』の諸訳の中でどのように変化したかを見る。以上から、『賢者の源』の統一訳語指示書としての有効性の一端を示すことができる。

本研究を進めるに先立ち、筆者は三島財団・笹川財団の双方から2018年度補助金の支給を受け、『菩提道次第大論』のチベット語版とモンゴル語版を対照させた検索サイトを構築した。

『菩提道次第大論』の電子テキストとしては、Asian Classic Input Project (ACIP と略称) のシヨル版による入力テキストを利用した。モンゴル語に関しては、モンゴル語訳テンギェルに附属する『ツォンカパ全集』収録の『菩提道次第大論』を新たに入力し、一文毎チベット語テキストとモンゴル語訳テキストを対照させ、検索ができるようにした。これは現在、<https://fukuda.tibetan-studies.net/mongolian-tibetan-lamrim/> で公開している。モンゴル語、チベット語の両方から検索できる仏教用語の対照語彙集は、本サイトが世界で唯一のものである。本研究において、『菩提道次第大論』の語彙を調べるためには本サイトの利用が不可欠であった。

---

<sup>6</sup> チベット文字による「Chos kyi 'od zer」からカタカナで表記すると「チューキウーセル」に近い表現になるが、彼についてはモンゴルにおいて研究が盛んであり、モンゴル関係の世界中の研究者たちの中においてもモンゴル語による呼び方で知られているのが一般的であるため、「チョイジ・オドセル」と言うモンゴル語の訛りに近いカタカナの表記を本論で利用する。

## 第1章 『菩提道次第大論』のモンゴル語訳の種類、年代、訳者、流布の実態

### 第1節 書誌情報概観と先行研究

チベット仏教がモンゴルに伝来したのはサキヤ派の僧侶によってである。その後カルマ派も一時期モンゴル宗教の頂点に立っていた歴史があるが、次第にゲルク派が中心的位置を占め、それが定着してきた。現在、モンゴル国最大の僧院であるガンダン寺においてもゲルク派の学堂の学統を継いでいる<sup>7</sup>。その過程で、ゲルク派の開祖ツォンカパの『菩提道次第大論』が数回モンゴル語訳された。

しかし、これまでその経緯は明らかになっていない。『菩提道次第大論』のモンゴル語訳はほとんど研究されておらず、たまたまその文献に出会った人が個別に紹介したのみである<sup>8</sup>。ゆえに、全部でいくつの翻訳が存在し、何年に誰によって訳され、お互いどのような関係を持っているのかは一切不明なままである。本章においては、『菩提道次第大論』のモンゴル語訳の資料を提示して、それら翻訳について現在確認できる限りで調査し、奥書や歴史文献を元に、翻訳年代を確定あるいは推定する。また、完本ではなく三士説の章までの写本が5つ現存している。そのうち、この章の最後に7種の翻訳の書誌情報をまとめた通りでは① (2a) HMJ、② ZSMJ (4d)、③ ZSMJ (4e)、④ GMJ (6)、⑤ GMJ (6a) の5つが奥書を持たないが、翻訳者が不明な写本も含めて、すべての翻訳が揃う最初の部分である帰敬偈を対比し、それらの写本がどの翻訳の系統に属するかを明らかにし、併せてそれらの前後関係も考察する。現時点で『菩提道次第大論』のモンゴル語訳は7種を確認できている。

### 第2節 各モンゴル語訳『菩提道次第大論』の翻訳者、年代の確定、書誌情報のまとめ

#### (1) アルタンゲレル訳

これは、モンゴル国立図書館 No.4049/96 所蔵の写本 (378 fols.) であり、アルタンゲレル・ウバシ (Altan gerel ubasi) による『菩提道次第大論』のモンゴル語訳である。奥書は、次の通りである。

<sup>7</sup> ボルマー (2020) p. 185.

<sup>8</sup> Лувсанбалдан Х. (1975) p. 158, Бямбаа Р. (1997) p. 33, Сеценбилэг С. (2018) p. 31.

ere boyda Činggis qaγan-u altan uray-dur törügsen, erke kücün yeketü Včirai qaγan-u ači anu boluγsan, erten-ü irüger-iyer erketü qutuγ-tu-yin ečig[e] bolun učiralduγsan, erdeni sasin tör[ü]-yi engke-ber manduyuluγči Včirai tüsiyetü qaγan. asaraqui nigülesküi sedkil inü aburayči Qongsim bodisung metü, ariyun süsüg bisirel inü nasuda ???layči bodisung metü, arγadal ügei ün-en-i ügüleküi anu arsis-un qaγan metü, arban buyan-iyar amitan-i uduridqui anu Čagirvad qaγan metü bölüge. teyimü sayin aldar-tu tere boyda-yi törül yegüdkegsen dur-i tesčü yadan qutuγ-tu boyda nom-un qan terigüten quvaray-ud ba, tegsi bisirel-tü čoytu eke Bunidara qong tayiji Dayiching terigüten, tengsel ügei olan süsüg ten-i orčiyul kemen duradγaysan dur-i. boyda tsongkhaba kemen bügüde de sayitur aldarsiy-san boyda bügüde merged-ün orui-yin čimeg [378a] boluγsan tere boyda-yin, бүкүи sudur saštir-un onisun-u nigen-e quriyaju nomlaysan, бүрин γurban arad-i bodi mör-dür uduridqu-yin jerge egüni. Altan genel ubasi aljiyaqu čileqüi-ben tala ülü qaran, aliba ese medegsen-iyen nom-un qan-dur öčijü asayuyad, alγasal ügegüiy-e ö[e]dür šöni ürgüljid kičiyen orčiyulju tegüskebei bi, aldal ügei bičigči Maidari Ĵimali qoyar asuru ilübtülen bicibei. [AMĴ. 277b21-378a36]

この聖主チンギース・ハーンの黄金の氏族に生まれ、権力あるヴァチライ・ハーンの孫となり、古い誓願によって権力ある化身〔ジェブツンダンパー世〕の父として生まれた。宝のように貴い宗教と政治(政教一致の政治)を平和に興隆させるヴァチライ・トゥシェート・ハーンは、救済者の観音菩薩のごとき慈悲の心を備え、常諦菩薩のごとき清らかな信解を備え、聖仙王<sup>9</sup>のように和らげず真実を語り、転輪王のように十善によって有情を導く。そのような名声をもつ聖主が転生する時に、大変哀しんだ転生僧である聖法王をはじめとする僧侶たちと、平等な信仰を持つ吉祥なる夫人プニタラ、皇太子ダイチンをはじめ、比較できないほど多くの信仰者たちが翻訳せよと勧めたことにより、聖主ツォンカパとしてあまねく知られる、諸々の聖主や賢者たちの頭頂の荘嚴 [378a]となった(頭面礼足した)その聖主〔ツォンカパ〕の、あらゆる経典と論書の要を一つにまとめて説いた、三士すべての人々を菩提道に導くための〔修行の〕次第であるこれ〔『菩提道次第大論』〕を、アルタンゲレル・ウバシたる私は、疲れることを全く顧慮することなく、不明な部分は法王に伺い尋ねて、一日も空けずに昼夜も間わずして懸命に翻訳し完成させた。誤りなく書きとどめた書記は、マイドリとジマリの二人で、非常に丁寧に書いた。

<sup>9</sup> arsi: drang srong rgyal po、ツォンカパの著作にでてくる。



奥書に、男子である聖主チンギース・ハーンの黄金の氏族に生まれた、有力の灌頂を具えた金剛王の孫となった、古い誓願によって灌頂を具えた化身の父として生まれたとあるのは、ジェブツンダンパー世<sup>10</sup>の父であるトゥシェート・ハン部のゴンボドルジェを指している。そのゴンボドルジェが 1655 年に亡くなったときの遺族の願いにより、アルタンゲレル・ウバシが『菩提道次第大論』をモンゴル語に翻訳した<sup>11</sup>。従って、アルタンゲレル『菩提道次第大論』は 1655 年頃に翻訳されたことが知られる。

## (2) ラブジャムパ<sup>12</sup>・ザヤの弟子ダギ訳

トド文字の『菩提道次第大論』モンゴル語訳は、モンゴル国立図書館とガンダン寺図書館とホブド大学図書館に一部ずつあったと言われるが、三つとも存在を確認することができなかった。モンゴル国立図書館 No.8541 にトド文字の『菩提道次第大論』と記載されている本は、奥書に「インドの作者のダルマ・シリ・バドラと共に、翻訳師パンディタのツォグ・ルンプが翻訳して、確認し確定し終わった」<sup>13</sup>とあるので、『菩提道次第大論』ではないことが分かる。ガンダン寺図書館所蔵の写本については、大きさが 59.7×15.5cm、黒墨と赤墨で書かれた写本 (471 fols.)<sup>14</sup>であったという記録が残っている。一方、ホブド大学図書館にあった写本は、PDF が残っている。その PDF は、ホブド大学の A. バトソーリ教授が所持しており、筆者は最初の 5 フォリオと最後の 2 フォリオのみを閲覧することができた。その PDF により奥書のない写本 (233 fols.) であったことが分かる。最後に「大士の道の〔箇所〕で説明した誓願心の学処を持つ勝者の息子が一般行について学ぶ道次第を説明し終わった<sup>15</sup>」とあるので、三士の章までの写本である。ガンダン寺図書館に所蔵されていたトド文字の写本は完本であり、ホブド大学図書館にあったという写本 (HMJ) は三士の章までのテキスト翻訳であるので、当然ながらフォリ

---

<sup>10</sup> 清の支配が明朝まで及び、さらにハルハ・モンゴルへ侵入しようとしていた中、セチェン・ハンのショロイ (1577-1652) とトゥシェート・ハン部のゴンボドルジェ (1594-1655) をはじめとするハルハのリーダー達がモンゴル全体を一手にまとめるために、1639 年にシレー・ツァガン湖という場所で、トゥシェート・ハン・ゴンボドルジェの当時 4 歳であった子、ザナバザル (1635-1723) をハルハ・モンゴルの宗教の指導者に推戴した。ザナバザルは、後にジェブツンダンパー世と呼ばれるようになる。彼は 1650 年に、留学先でダライラマ 5 世によりチョナン派のターラナータの化身として認定される。Очир А.(2004) pp.108-111, Гомбожав С.(2016) p.197.

<sup>11</sup> Дамдинсүрэн Ц. (1984) p.19, Ганзориг Д., Бямбаа Р. (2017) p.5.

<sup>12</sup> 仏教博士号

<sup>13</sup> モンゴル国立図書館 No.8541 題名不明な写本 446a34-37: enetkeg yin üile-dügči Dharma Sri Bhadra tai, kelmürči bande Соүлһүпү көрбүүлүн шүүгед сиідкен байулыбай.

<sup>14</sup> Лувсанбалдан Х. (1975) p.185.

<sup>15</sup> yeke töröl-kittüin zamayin nomalasan küsekü setkil sudulqutai ilayuyısan köükeni yürü-yin yabudal-du surqu zamayin ulami nomloči düsbai. [HMJ. 233b13-17]

才数が合致しないが、アムガラン写本<sup>16</sup>の『菩提道次第大論』の例から考えると、両者は同じ翻訳である可能性がある。Kh.ロブサンバルダンによって書き残されている奥書からその存在が知られるガンダン寺図書館所属の写本の奥書は以下の通りである。

törö nereyini ende yosučilan barin üiledügči tabtayar üre boluysan todorqoi biligēr qoyor janggiyin yosuni yambarčilan Sengge dgra 'dultei. tungyaliy süjügēr yurban erdeni takiyçi Će dbeng rgyalmo qoyor kürbüül kemēgsen-dü. tōmilon kürbüülbe Rab 'byam Ĵa ya-yin ečüs šabi Daki neretü dgeslüng. [Лувсанбалдан Х. (1975) p.158]

政治と名声をこの地で正しく執行するものの第5番目の息子となった、明瞭な知の二人のザンギ (Mong. janggi 章京: 官職名) の流儀のままに〔成す〕センゲ・ラドゥラ<sup>17</sup>と、透明な浄信によって三宝を供養する者であるツェベン・ジャルモの二人が「翻訳しなさい」と言って、指名して翻訳させたのが、ラプジャムパ・ザヤの最後の弟子ダギという比丘である。

翻訳依頼者のセンゲ・ラドゥラは、ザヤ・パンディタと非常に親密な関係であった。故に、ザヤ・パンディタが活着している間は、その弟子のダギに翻訳を依頼することはなかっただろうと推測されるので、このトド文字による『菩提道次第大論』は、ザヤ・パンディタが亡くなった1662年から、依頼者のセンゲ・ラドゥラが亡くなった年代である1670年の間に訳されたと考えられる。つまり、1662-1670年の間に翻訳されたと推測することができる。

翻訳者のダギという人物について詳しい資料は無い。ゴマン寺史において『菩提道次第大論』のモンゴル語への翻訳者はメルゲン・ラマのガワンローロイである<sup>18</sup>と述べられているので、同一の人物であろうと Kh.ビャンバジャブが主張している<sup>19</sup>。

<sup>16</sup> 後述する。

<sup>17</sup> ここでの翻訳依頼者のセンゲ・ラドゥラと (16??-1670 在位: 164?-1670) とは、オイラト部族連合に属すジュンガル部の第2代部族長バートル・ホントイジ (1??-1653 在位: 1634-1643) の第5番目の息子であり、その弟の第6番目の息子はガルダン・ハーン (1644-1697 在位: 1671-1697) である。依頼者のもう一人であるツェベン・ジャルモは、センゲ・ラドゥラの夫人である。この夫妻は、仏教に深い信仰を持っており、ザヤ・パンディタが亡くなる1年前、つまり1661年においても翻訳依頼を出していた。1662年に、ザヤ・パンディタがチベットへ行くに際して、ウセン・サーマルという場所で12日間も家に訪問してもらい、法を聴聞し、100頭の馬をはじめとする布施などをした。また、ザヤ・パンディタが亡くなった2年後、すなわち1664年にザヤ・パンディタ翻訳の経典を写し、写本を集めるメンバーとしての9人が送り込まれたという。これは、翻訳依頼者のセンゲ・ラドゥラは、ザヤ・パンディタととても身近な関係であったことを示している。 Лувсанбалдан Х. (1975) p.140.

<sup>18</sup> bstan pa bstan 'dzin (2003) pp. 430-434.

<sup>19</sup> Ядамжав Г. (2017) p. 401.

### (3) ウラド旗のメルゲン・ラブジャムパ・クンガギャムツォ訳

この翻訳の原文は、内モンゴル佛教協会図書館に所蔵されている。筆者は、その1986年に手写された内蒙古図書館 No.B/209-1/1~10 の番号で登録される10冊の最後の数ページを閲覧できた。奥書が以下の通りである。

egün-i mongγul döčün yisün jasay bügüd-yin. kümün-ber orui-yin čimeg bolγan bariγsan toyin blam-a kemen. qamuγ jüg-üd-tür aldarsiγsan tere yeke boyda-ber. orčiyul kemen duradqui jarliy oruidur soyurqaysan tegün-e sitüged. jarliy tegün-e bütüküyin tulada Töbed-ün yeke ayalyu-ača 'bro ba mergen Rab 'byams pa Kün dga' rgya mtsho kemekü ber. orčiyul-un üiledbei tegüni kičiyen bičigsen bičigči anu Urad-un. dges lüng Sis rab rgya mtsho kemekü tere ber sayitur bičibe. [RMJ. 1456b, No.B/209-10]

この〔『菩提道次第大論』〕を、〔内〕モンゴルの49旗の全ジャサクの、人々が頭頂の莊嚴として奉じたトイン・ラマと、あらゆる方角に広くに知られた人物である偉大な聖主が、翻訳せよと勧める命を賜った。その命により、その命を果たすためにチベットの偉大な言葉からドワ・メルゲン・ラブジャムパ・クンガギャムツォと言う者が翻訳した。それを懸命に書いた書記、ウラド旗の比丘シェラブギャムツォと言う者が正しく記した。

翻訳者は、ドワ・メルゲン・ラブジャムパ・クンガギャムツォ (Mong. 'bro ba mergen Rab 'byams pa Kün dga' rgya mtsho) であり、書写した人はウラド旗の比丘シェラブギャムツォ (Mong. Urad-un dges lüng Sis rab rgya mtsho) であることが明らかに書き留められている。

S. セチンビレグは、依頼者はネイジ・トイン・ホトクト2世アグワン・ロブサン・ダンビジャルサン (Mong. neyiji toyin qutaytu Ayvanglubsangdambijalsan 1671-1703) であり、書記は、ウラドのメルゲン・ラブジャムパの弟子にあたるシェラブギャムツォ (Mong. Šrabjamsu) であると述べている<sup>20</sup>。S. セチンビレグの言う通り、依頼者がネイジ・トインであるなら、この翻訳は1703年までに翻訳されただろうと推測できる。訳者のクンガギャムツォが1654年生まれである。そして、訳者の生まれた1654年からネイジ・トインが亡くなった年代である1703年の間

<sup>20</sup> Sečenbilig S. (2018) p. 31.

に翻訳されただろうという大体の翻訳年代を推測する。つまり、翻訳年代は 1654-1703 年である。

#### (4) テンギユル収録の訳

これは、『ツオンカパ全集』所収の訳である。Γanjuur Danjuur (2014)によって閲覧可能である。奥書を持たないため翻訳者は現時点で不明である。Γanjuur Danjuur (2014)によって『ツオンカパ全集』ka (第1) 巻は『菩提道次第大論』となっており、奥書を持たない。『ツオンカパ全集』kha (第2) 巻は『菩提道次第小論』となっているが、北京版テンギユル収録のチベット語原文を見れば『菩提道次第論』に関係するいくつかの著作に対する奥書がダライラマ5世によって書かれているので、さらにモンゴル語に翻訳される時の奥書がモンゴル語によって付加されている可能性はある。しかし、Γanjuur Danjuur (2014)は、『ツオンカパ全集』第2巻と第8巻を欠いていて、『菩提道次第小論』を見るができない<sup>21</sup>。一方羽田記念館の『ツオンカパ全集』は9巻所蔵され、その中に『菩提道次第小論』が存在するが、253 fols.のうち 235 fols. (1b-235b) しかない。すなわち最後の18フォリオが欠けているため、その奥書を見るができない。『菩提道次第小論』は、サンクトペテルブルグ大学図書館に所蔵されているので、そこで閲覧できるものと思われる。翻訳年代が1730年代後半であると考えられている<sup>22</sup>。その全集収録の『菩提道次第小論』の奥書において、木版について以下のような記述がある。

ces rgyal ba btsong kha pa chen po'i bka' 'bum gsar brkos ma grub pa tshan che ba 'dug pa rnams  
gsar du brko dgos tshul gyi sde pa sangs rgyas rgya mtshos sngon nas bskul ma byung ba ltar byang  
chub lam gyi rim pa 'di yang rab byung bcu gnyis pa'i me yos kyi lo/ / dga' ldan phun tshogs gling  
du par brko ba'i gra bsgrigs pa'i tshe/ zhus dag dang do dam gnyis ka byed mi yar 'brog ba dge slong  
blo gros brtan pa/ rtse skor ba dge slong blo gsal mkhas pa/ bkra shis gling pa dge slong smra ba'i  
dbang phyug gsum dang / yig mkhan dga' ldan bstan 'dzin / blo bzang rab 'byor/ tshe ring dar rgyas/  
brkos mkhan dbu mdzad dgos slebs/ gzhung pa rdo rje/ dpung sogs/ brag sna dbang rgyal/ rdo rje  
dbang rgyal/ tshe dbang dpal ldan/ gsum dar / gtsang pa kun dga' tshe brtan/ g.yul rgyal/ lhun sdings  
rdo rje/ 'dzim chung dbang po/ / dbang ldan / srung mo pad+ma rnams dang / shing bzo bsod nams/  
dbu lha 'dri[sic. 'bri] mi bzang po 'od zer/ dgos cha sprod mi rgya ma ba ngag dbang tshe ring dang  
ka bzhi smad pa bsod nams nor bu rnams kyis ched du sgrubs pa'i byang chub lam gyi rim pa 'bring

<sup>21</sup> ボルマー (2019) pp. 4-6.

<sup>22</sup> 詳しくは、第2章を参照。

po'i par byang 'di yang za hor gyi ban+de 'jam dbyangs dga' ba'i bshes gnyen gyis sbyar ba'i yi ge pa ni dpal grong sngags rams pa ngag dbang dge legs kyis bgyis pa dza yan+tu// [Postscript to the New edition of the Complete Works of Tsong kha pa: for “Byang chub lam gyi rim pa” 324a2-8]

ツォンカパ全集に〔関して〕まだ成就していない諸々の新版を、新たに彫版する必要性があるとデワサンギェー・ギャツォ (sDe pa sangs rgyas rgya mtsho) により以前から督促が来ていた通りに、この『菩提道次第論』をも第十二ラプチュンの丁卯 (1687) 年にガンデン・プンツォク (dGa' ldan phun tshogs) 寺で彫版の準備をした際に、校正者兼監修者、ヤルドク (Yar 'brog) の人であるゲロン・ロトゥテンパ (bLo gros brtan pa)、ツェコル (rTse skor) の人であるゲロン・ロサルケーパ (bLo gsal mkhas pa)、タシリン (bKra shis gling) の人であるゲロン・マウエーワンチュク (sMra ba'i dbang phyug) の3人と、文字工のガンデン・テンヅィン (dGa' ldan bstan 'dzin)、ロサン・ラプジョル (bLo bzang rab 'byor)、ツェリン・タルギェー (Tshe ring dar rgyas)、彫版師・棟梁のグーレブ (dGos slebs)、シュンパ・ドルジェ (gZhung pa rdo rje)、プンソク (dPung sogs)、タクナ・ワンギャル (Brag sna dbang rgyal)、ドルジェワンギャル (rDo rje dbang rgyal)、ツェワン・ペルデン (Tshe dbang dpal ldan)、スムタル (gSum dar)、ツァン (gTsang) の人、クンガーツェテン (Kun dga' tshe brtan)、ユルギャル (g.Yul rgyal)、フンディン・ドルジェ (lHun sdings rdo rje)、ヅィムチュンワンポ ('dZim chung dbang po)、ワンデン (dBang ldan)、スンモ・ペマ (Srung mo pad+ma)、木工、ソナム (bSod nams) ウハディ・ミ・サンポオーセル (dBu lha 'dri mi bzang po 'od zer)、必需品の給付者、ギャマ・ダワンツェリン (rGya ma bdag dbang tshe ring) とカシメーパ・ソナムノルブ (Ka bzhi smad pa bsod nams nor bu) 〔全員〕により成就した『菩提道次第中論』の奥書、これも、サホルの大徳ジャムヤン・ガーウエーシェーニエン ('Jam dbyangs dga' ba'i bshes gnyen) が著した〔、その〕筆記者は、ペルトン (dPal grong) の人、ガラムパ (sNgags rams pa) のガワン・ゲレク (nGag dbang dge legs) が務めた。勝利あれ。

この奥書は、チベット語北京版テンギェル収録『ツォンカパ全集』に入っている『菩提道次第論』系の作品を特別に木版を起し、編集したことについて再録している。1687年に、木版が作成された場所は、ポタラ宮の麓にあったガンデン・プンツォク (dGa' ldan phun tshogs) 寺であり、そこはショル (zhol) 版を扱っていた寺だったことから、このいくつかの『菩提道次第

論』の木版の原本はシヨル版であったことが分かる。木版作業において、施主はダライラマ 5 世の摂政サンギェー・ギャツォ (Sangs rgyas rgya mtshos) であったことが記述されている。そして、奥書を書いた人、サホルのジャムヤン・ガーウエーシェーニエン ('Jam dbyangs dga' ba'i bshes gnyen ) とは、ダライラマ 5 世ロサン・ギャツォ (bLo bzang rgya mtsho, 1617-1682) のことである。この奥書が書かれた 1687 年には既にダライラマ 5 世は亡くなっていたが、サンギェー・ギャツォによってその事実は固く秘匿されていた。

モンゴル語訳『ツォンカパ全集』の原文は、全集中の著作の配列順からチベット語北京版テンギユル附属『ツォンカパ全集』であることは明確である<sup>23</sup>。ここから、モンゴル語訳テンギユル収録の訳『菩提道次第大論』の原文は、北京版 (1724) であり、さらにチベット語訳北京版テンギユル附属『ツォンカパ全集』の第 1 巻の『菩提道次第大論』は原本がシヨル版の『ツォンカパ全集』であることまで確認できた。7 種の『菩提道次第大論』のチベット語による原文について、現時点において検索可能な唯一翻訳は、このテンギユル収録の訳『菩提道次第大論』である。

#### (5) テウメド旗の国師であるロサンツェンペル訳

内蒙古図書館 No.B/946/6 と No.B-2/946/6 の上下冊に分かれた複製出版 (1230 pp.) の形で閲覧可能な翻訳である。題名は、『無比なる偉大なツォンカパが著した『菩提道次第大論』である<sup>24</sup>』となっている。奥書は、次の通りである。

[616a19] egüni mongyul-un kelen-dür orčiγul kemen, erkin oyutu toyin rabjamba dkon mčog bsam 'rob kiged, erdem bisilyal-tu čorji Tat pa rgya mtsho ba, erdemtü güüsi blo bzang dbang rgyal terigüten. olan šabinar ber duradqasan-a sitüjü, olan ami-tan-i uduriduyči šasin-u ejen boluysan olan boyda blam-a nar-un ölmei-dür sitüjü olan sonusuγsan güüşrii dga-a bču sudhi neretü-ber. öber-ün oyun-u činegen masi öčüken [616b]bolbaču, ülemji ačitu yoga cari blam-a-yin gegen-eče, öni udayan orčiγuly-a kötülbüri selte-yi sonusun, ülemji včir dhar-a 'zam dbyans bsad ba-yin gegen kiged. degedü buyan sadun dkun mčog bdhičin-u gegen-eče, degedü nom egünü nomlal??-yin kötülbüri-yi sonusuγ-san ba, degedü nom egünü mön tayilburi-dur sitüjü, degedü nom egüni önide delgeregülkü-yin sanal-iyar. arban dötüger sayitur iregsen jil-ün, anggara\* kemegekö qara bičin on ašuvani\* sar-

<sup>23</sup> ボルマー (2019) p. 15.

<sup>24</sup> *sačalal ügei yeke bzungkha ba ber jokiγaysan yeke bodhi mör-ün jerge orusiba.*

dur, ali čidaqui-ber tegüsgen orčiγulaysan-u biči-geči inü, ariγun sanvar-tu gušri blo bchang legs bsad dar rgyas bolai. (中略) [618a] nom-un yosun egüni, dayičing ulus-un törü gerel-tü-yin qoyaduyar on-u qar-a morin jil barayun tümed kirγultai-yin čimed-ün bkrašis dga'ldan chos 'khor gling keyid-dür büridken seyilejü orusiγulba. [LMJ. 616a19~, 618a]

[616a19]「これをモンゴル語に訳せ」と貴い学識ある僧侶であるラブジャンバ・クンチョグ・サムドゥブ (Tib. dkon mchog bsam 'grub) や、学識と瞑想にすぐれた法主 (Mong. corji) タトワ・ギヤムツォ (Tib. Tattva rgya mtsho) や、学識ある国師(guusi)であるロサン・ワンギヤル (Tib. blo bzung dbang rgyal) などの多くの弟子が勧めたことに依拠して、諸々の有情を指導する者である〔仏〕教の主となった聖ラマたちの御足に帰依して、何度も聴聞したカーチュ (仏教博士号 Tib. bka' bcu, Mong. dga-a bču) のスディという名のものが、自身の知識はとても少ない [616b] が、偉大な恩者であるヨーガチャーリー・ラマ先生であるかどうかという確認から長時間〔に渡り〕翻訳概要などを聴聞し、偉大な持金剛仏ジャムヤンシェーパ先生や、最上の善知識であるクンチョグ・ディチン (Tib. dkong mchog bde chen?) 先生から、最上の法であるこの教えの概要を聴聞したことや、この最上の法の注釈に依拠し、最上の法であるこれを永遠に広める意志により、第 14 年ラプチュン (チベット語で rab byung。丁卯からはじまる 60 年一周期の紀年法。) のアンギラ (壬申をあらわすサンクスリット語の美称) と言う黒猿年の 9 月に、出来る限り〔のこをして〕翻訳完成させた。書記は、清らかな律僧・国師ロサン・レクシェー・タルゲー (Tib. blo bzung legs bshad dar rgyas) である。(中略) [618a] 法のこの流儀を、大清国の道光 2 年の黒馬年、トゥメト右旗キルゴルタイのチメドのダシ・ガンデンチューコルリン (< bkra shis dga' ldan chos 'khor gling) において完成させ、彫り納めた。<sup>25</sup>

奥書において翻訳した年代は「arban dötüger sayitur iregsen jil-ün. anggara kemegdekü qara bičin on ašuvani sar-dur. 良く訪れた第 14 年の悪身を持つものと言う黒猿年の 9 月」と書いてあるのは、西暦で言えば 1812 年であり、開版された年代として「dayičing ulus-un törü gerel-tü-yin qoyaduyar on-u qar-a morin jil. 大清国道光 2 年の黒馬年」と書いてあるのは、1822 年に当たる。翻訳者は、カーチュ・スディというものであることが分かる。この翻訳者カーチュ・スディとは、内モンゴルのテウメド (tümed) 旗の国師であるロサンツェンペル (Mong. Lubsangčempil, 1761-1834)

<sup>25</sup> anggara: Alice Sarközi (2018) p. 1366, No. 37178, ašuvani: Alice Sarközi (2018) p. 547, No. 15239.

であることが知られている。1810年に『菩提道次第大論』を翻訳し、1812年までにその作業を続けていたとロサンツェンペル伝に言及されている<sup>26</sup>という。

#### (6) ガルサンジャンバ訳『菩提道次第大論』

また、北のブリヤート<sup>27</sup>人であるデルゲルのガルサンジャンバと言う人が『菩提道次第論』を翻訳したことについて、自伝に書き残している。ガルサンジャンバの翻訳であると思われるアギ寺版の『菩提道次第大論』の奥書は、以下の通りである。

boγda btsongkhapa-yin gegen ten-ü jōkiyaγsan yeke bodi mōr-ün jerge-eče bodisadu-a-yin yabudal  
yerü-dür suralčaqui-yin üy-e kürtele ki egün-ü keb-i, asuru ariγun šayšabad kiged, busud-i tusalaqu  
ülemji sedkil-ün sang boluγsan smanpa khripa rinčin bzangpo (Tib. smanpa khripa rinchen bzangpo)-  
yin gegen ten-ber nayan nasun-dayan šasin-u γarqu-yin orun [230a] bdičin lhüngrübgling (Tib. bde  
chen lhung grub gling)-dür büküi siltayan nōgüčel-i nayirayulju keb-tür bütügelgegsen-ü keb-ün  
temdeg irüger selte kereg-tei kemen dga bju blobzang bsamgdan (Tib. dka bcu blo bzang bsam gten)  
duradqaysan-u ildar-a galpa bhadra-ša-a sa dhar-a (Tib. kalpa bha dra sha' sa dha ra) ber nayirayulbai.  
[GMJ. BDRC No. W1EE31. 229b16-230a11]

ボグダ・ツォンカパ・ゲゲンテンの著作した『菩提道次第大論』のうち、一般菩薩行を学ぶ章までのこの版〔木〕を、最上で清らかな戒律と利他への偉大なる心の蔵となったマンパ・ティパ・リンチェンサンポのゲゲンテンは80歳のとき、〔仏〕教の生れ出る拠点となっているデチェン・フンテウ布林〔寺〕において、条件すべてを手配し、版〔木〕を作らせた〔木〕版にさらに厳密な書き方は〔付加する〕必要があるとカーチュ・ロサンサムテンが依頼したことに依拠してカルパ・バドラ・シャーサダラ<sup>28</sup>が編集した。

まず、ツォンカパ著『菩提道次第大論』の三士説の章までのテキスト翻訳であることを述べている。そして、マンパ・ティパ・リンチェンサンポ (Tib. sMan pa khri pa rin chen bzang po, Mong. sManpa khripa rinčin) は、80歳のときに作らせた木版に訂正が要るのでという理由でカーチュ

<sup>26</sup> Qai mi (2011) pp. 285-288.

<sup>27</sup> 現在は、ロシア国の領域にあるが、モンゴル国の北のバイカル湖やシベリアン周辺に住んでいる人々である。

<sup>28</sup> これは、編集者が自名をサンスクリットで書いたものであり、自分の名をサンスクリットで記載するような習慣は、その当時は一般的だったようである。



(Tib. bka' bcu, Mong. dga bju) ・ロサンサムテン (Tib. bLo bzang bsam gten, Mong. bLobzang bsamgdan) によって依頼されて、カルパ・バドラ・シャサダラがこの木版を再編集したことが奥書から読み取れる。しかし、この奥書から、編集者が訳者を兼ねたかどうかは、読み取ることができない。

奥書でのカルパ・バドラ・シャサダラ (Tib. Kalpa bha dra sha' sa dha ra, Mong. Galpa bhadra-ša-a sa dhar-a) の名は、他に知られるデルゲルのガルサンジャンバ (1816-?) というブリヤート人の名にぴったり合わないが、ガルサンジャンバ自身も決まった一名を書き残すのではなく、いくつかの別名を利用することがあったようである。ガルサンジャンバは自伝を残しており、『菩提道次第論』を1870年に翻訳したと書き残しているという<sup>29</sup>。『菩提道次第論』と書いてあることから、大論の翻訳か小論の翻訳か区別がつけられないような書き方にはなっているが、19世紀に『菩提道次第大論』がデルゲル・ガルサンジャンバによって翻訳されたと知られる<sup>30</sup>。従って、この奥書にある編集者のカルパ・バドラ・シャサダラは、ガルサンジャンバに違いなし、彼の翻訳でもあると判断して間違いはない。そうすれば、ガルサンジャンバ『菩提道次第大論』の翻訳年代は、1870年になる。

#### (7) ボルガン訳『菩提道次第大論』

現代語翻訳のボルガン訳『菩提道次第大論』は、Булган Т. (2004, 2006, 2007)の3冊で知られる。訳者の僧侶 Т.ボルガン (Түмээхүү Булган, 1959～) は、モンゴル国立大学の准教授であり、1999年に「仏教の実践・教誡を完成させた『入行論』について」とのテーマで文学博士号を取得し、非常に広い範囲で仏教研究を行なっている。その範囲とは、論理学部、仏教でいう内明である般若学部、中観部、アビダルマ部、律部、学説綱要書といった分野を研究しているという。

現存する7種の翻訳の書誌情報を以下でまとめる。

- (1) アルタンゲレル (Altan gerel) 訳 (1655)
- (2) ダギ (Daki) 訳 (1662-1670)
- (3) クンガギヤムツォ (Kün dga' rgya mtsho) 訳 (17世紀)

<sup>29</sup> Дамдинсүрэн Ц. (1968) p. 184.

<sup>30</sup> Бямбаа Р. (1997) pp. 33, 38 では、デルゲル・ガルサンジャンバと言うブリヤート人が19世紀に『菩提道次第大論』を翻訳したことについて言及されている。ガルサンジャンバ訳『菩提道次第大論』には、アギ寺版(1906)が残っている。アギ寺は、現在ロシアのブリヤートに存在しており、デルゲル・ガルサンジャンバはブリヤート人である。

- (4) 『ツォンカパ全集』所収の訳 (1730 年代後半)
- (5) ロサンツェンペル (Lubsangčempil, 1761-1834) 訳 (1812)
- (6) ガルサンジャンバ (Галсанжамба, 1816-18??) 訳 (1870)
- (7) ボルガン (Булган, 1959～) 訳 (2004-2007)
- (1) アルタンゲレル訳『菩提道次第大論』→ *yeke bodhi mör-ün jerge*. [翻訳年 1655]
- 略語: AMĴ ← アルタンゲレル・ウバシ (Altan gerel ubasi) による翻訳
  - 所蔵地: モンゴル国立図書館所蔵 No.4049/96
  - 閲覧状況: 閲覧可能な写本 (378 fols.)
  - 筆者の閲覧状態: 2018 年 8 月、モンゴルでの現地調査の時、1b,377b,378a のみローマ字転写することができた。
- (2) ダギ訳『菩提道次第大論』→ 題名不明. [翻訳年代 1662-1670]
- 略語: DMĴ ← ザヤ・パンディタの最後の弟子ダギ (Mong. Rab 'byam Ĵa ya-yin ečüs šabi Daki) による翻訳
  - 所蔵地: 行方不明
  - 閲覧状況: 閲覧不可能なトド文字による写本 (59,7×15,5 cm, 471 fols.)
  - 筆者の閲覧状態: 閲覧したことが無い。
- (2a) 訳者不明なホブド写本『菩提道次第大論』 題名不明、[翻訳年代不明]
- 略語: HMĴ ← ホブド (Hkovd) 大学の写本
  - 所蔵地: 行方不明、ホブド大学図書館に所蔵していたトド文字写本
  - 閲覧状況: 閲覧不可 (233 fols.) 三士説の章までのテキスト
  - 筆者の閲覧状態: 最初の数ページの PDF を閲覧した。
- (3) クンガギャムツォ訳『菩提道次第大論』→ *lamrimčimu*. [翻訳年代 17 世紀後半]
- 略語: KMĴ ← ラプジャムパ・クンガギャムツォ (Mong. Rab 'byams pa Kün dga' rgya mtsho) 全部で 3 セットがあるようである。
  - 所蔵地: (3a) 内蒙古図書館 No.B/209-1/1～10 (10 冊)
    - (3b) 原本は、内モンゴル佛教協会図書館に所蔵されていたという。

- (3c) もう一部は、故宮博物院図書館（No. 宗 23658）。木版年代 1667、朱墨抄本（26 lines, 頁面 63.7×22.1, 版框 50.7×14.4 cm, 694 叶）
  - 閲覧状況：1986 年に手写された内蒙古図書館所蔵 No.B/209-1/1～10(10 冊、1457 pp.)で閲覧可能
  - 筆者の閲覧状態：(3a)の最初からの 5 ページと最後からの 5 ページを閲覧した。
- (4) テンギュル収録の訳『菩提道次第大論』→ *ilayuyısan-u sayin jarliy bügüde-yin onisun-i quriyaısan yurban törülkiten-iyer angqar-un abaqu-yin jerge bügüde-yig bürin-e üfügülügsen yeke bodhi mör-ün jerge-yin yabudal yerü-yin surtaqun-aça degegeši kiged, duyan-yin mön çinar amurlin aqui-dur yambar metü surulçaqu-yin yosun nomlal kemekü.* [翻訳年代 1730 年代後半] 訳者不明
- 略語：ZSMĴ ← テンギュル収録『ツォンカパ全集 (ЗОНХОВ СҮМБҮМ)』所収の翻訳
  - 所蔵地：『ツォンカパ全集』ka (宗一) 巻は、三士説の章 1a-386a (386 fols)となっており、ka (宗又一) 巻は 止観の章 1a-204a (204 fols)となっているが、前者は in Ganjuur Danjuur (2014) 宗喀巴全集 vol. 1 で、後者は vol. 2 によって閲覧可能となっている。
  - 閲覧状況：(4) Ganjuur Danjuur (2014)で閲覧可能 → 大谷図書館 No. B1-2 Aa/07997/S-1(三士説の章)、S-2(止観の章)
    - (4a) 上者と同版の全本 (3 セット)、東洋文庫所蔵 MO2-07-11,13,16+24 (MO2-07-13 は三士説の章であり、MO2-07-24 は止観の章であるが、別々に登録されている) 完本
    - (4b) ロシアのサンクトペテルブルグ大学図書館所蔵『ツォンカパ全集』第 1 巻上 (40-41 lines, 頁面 59.5×12.5 cm, 版框 49.5×8.5 cm, 384 fols.)、第 1 巻下 (204 fols.) St.P Ca. No. 2.116-128 の完本
    - (4c) 内モンゴル大学図書館所蔵 No.49.3/22 の『ツォンカパ全集』（この木版は、(4)、(4a)、(4b)と同様な形式であり、宗第一巻と書いてある完本
    - (4d) BDRC No. W1EE1 *yeke bodhi mör-ün jerge* は、宗第 1 巻 (ツォンカパ全集第 1 巻)と書いてあるが、同内容で木版別の文献である<sup>31</sup>。三士説の章までのテキスト (41 lines, 316 fols.)

<sup>31</sup> Ganjuur Danjuur (2014)によって筆者に閲覧可能な黒字『ツォンカパ全集』は、版本刷りの失敗で 103a と 104a の内容が入れ替えられたため、本来なら 103b の内容が入るべき箇所に本来なら 104b の内容が入り、104a の代わりに 103a の内容が入ったため、内容の順番が狂っている[102b → 104a → 103b → 103a → 104b → 105a]という特徴がある。BDRC No. W1EE1 も、その版本刷りの失敗は一緒であり、ページの前後にマークを付けることで正

- (4e) N.アムガラン<sup>32</sup>僧侶所蔵写本<sup>33</sup> *yeke bodhi mör-ün jerge orusiba*. 三士説の章までのテキスト (22 lines, 548 fols.) 所蔵地：モンゴル国
  - 筆者の閲覧状態：BDRC No. W1EE1 はダウンロードできており、アムガラン写本は写真で頂いたので閲覧可能である。また、Ганжуур Данжуур (2014)は、大谷大学図書館に入っているのでテンギユル収録の訳 (4) も閲覧可能。
- (5) ロサンツェンペル訳『菩提道次第大論』*yeke bodhi mör-ün jerge*. [翻訳年 1812]
- 略語：LMĴ ← ロサンツェンペル (Mong. Lubsangčempil, 1761-1834) 訳
  - 所蔵地：内蒙古図書館 No.B/946/6, No.B-2/946/6
  - 閲覧状況：(618 fols.) 木版の複製出版の2冊 (1230 pp.)が上記のNo.で内蒙古図書館にある。
  - 筆者の閲覧状態：複製出版の写真で閲覧可能。
- (6) ガルサンジャンバ訳『菩提道次第大論』*sačalal ügei yeke zokha ba-yin jokiya yeke bodi mör-ün jerge orusiba*. [翻訳年 1870]
- 略語：GMĴ ← ガルサンジャンバ (Галсанжамба, 1816-18??) による三士説の章までのテキスト翻訳
  - 所蔵地：BDRC No. W1EE31<sup>34</sup>、BDRC No. W1EE32、in Буяндэлгэр Г. (2014)
  - 閲覧状況：(6) BDRC No. W1EE31 奥書無し (37 lines, 269 fols.)
  - (6a) 同翻訳『菩提道次第大論』の別版 BDRC No. W1EE32 *sačalal ügei yeke zong khapa-yin jokiya yeke bodi mör-ün jerge oruši-ba*. 奥書あり (30 lines, 231 fols.)

しい順番を示している。102b → 最後に「卍」字のマーク、104a の最初に「卍」、最後に「メガネ」マーク、104b は最初に「=」マーク、103a の最後に「=」マーク、103b は最初に「メガネ」マーク → 105a をそれぞれ付けられている。

<sup>32</sup> N. Amgalan, モンゴル国ガンダンテクチェンリン寺院学術文化研究所事務局長・研究員

<sup>33</sup> A 写本も上述した版本刷りの失敗[A. 148a19-150b9]を受け継いでおり、ZSMĴ.102b 内容に相当する箇所 [148a19] の最後に∴のようにマーク「∴」を入れ、その戻しを示す矢印を ZSMĴ. 104a 内容に相当する箇所 [149a21]に手書きしている。

<sup>34</sup> BDRC No. W1EE31 は、チベット語の単語やチベット語起源の人名などに手書きのチベット文字を書き入れていたが、それらは BDRC No. W1EE32 において版木に刷られている。また、BDRC No. W1EE32 の奥書で、木版に記号などの追加が必要だと依頼されたので、再編集したとの翻訳者の記述が残っているから BDRC No. W1EE31 は、BDRC No. W1EE32 より木版の成立が先立つものである。Буяндэлгэр Г. (2014)によれば、BDRC No. W1EE31 は木版の成立年代が 1906 年であると書いてはあるが、その根拠を示していない。

- ◇ 2020年、ガンダン寺による木版の複製出版 (41,5×9,5 [30×6,5] cm, 30 lines, 231 fols.) (6a)と同木版
- ◇ in Буяндэлгэр Г. (2014) キリル文字による出版 (425 pp.)
- 筆者の閲覧状態：BDRC No. W1EE32、W1EE31、in Буяндэлгэр Г. (2014)、2020年にガンダン寺による木版の複製出版により閲覧可能。

(7) ボルガン訳『菩提道次第大論』*Их бодь мөрийн зэрэг*. [翻訳年代 2004-2007]

- 略語：BMJ ← T.ボルガン (Булган Т. 1959～) によるキリル文字で書かれた現代語翻訳
- 閲覧状況： Булган Т. (2004, 2006, 2007)の3冊で閲覧可能
- 筆者の閲覧状態：閲覧可能。
  - Булган Т. (2004) ЗОНХАВА ЛУВСАНДАГВА (ツォンカパ・ロサンタクパ) *Бага ба дунд төрөлхтний мөр I дэвтэр* (小士と中士の道 第1冊)
  - Булган Т. (2006) ЗОНХАВА ЛУВСАНДАГВА (ツォンカパ・ロサンタクパ) *Их төрөлхтний мөр II дэвтэр* (大士の道 第2冊)
  - Булган Т. (2006) ЗОНХАВА ЛУВСАНДАГВА (ツォンカパ・ロサンタクパ) *Амарлингуй оришихуй ба үлэмж үзэхүй ухаан III дэвтэр* (止観の智 第3冊)

### 第3節 各訳の帰敬偈の対比

チベット原文とその和訳と7種の翻訳の帰敬偈を含む最初の部分を比較させた表を以下に提示する。無駄に量が多くなるからという理由で、モンゴル語訳の和訳を入れていない。

題名	<p>LM: Tib. mnyam med tsong kha pa chen pos mdzad pa'i byang chub lam rim che ba bzhugs so//</p> <p>和訳：等しき者無き大ツォンカパが著作なさった『菩提道次第大論』がごございます。</p> <p>1) <i>yeke bodi mör-ün jerge.</i></p> <p>2a) non.</p> <p>3) <i>lamrimčimu.</i></p> <p>4) <i>ilyuγsan-u sayin jarliy бүгүд-yin onisun-i quriyaγsan γurban törülkiten-yer angqar-un abqu-yin jerge бүгүд-yi бүрин үжүгүлүгсен yeke bodhi mör-yin jerge-yin yabudal yerü-yin surtaqun-ača degegsi kiged diyan-u mön čanar amurlin aqui-dur yambar metü surulčaqu-yin yosun nomlal kemekü .</i></p>
----	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

	<p>5) <i>sačalal ügei yeke bzungkha ba ber jokiyaysan yeke bodhi mör-ün jerge orusiba.</i></p> <p>6) <i>sačalal ügei yeke zokha ba-yin jokiyal yeke bodi mör-ün jerge orusiba. 31</i></p> <p>7) <i>Их бодь мөрийн зэрэг оривой.</i></p>
1.	<p>na mo gu ru many+dzu g+ho ShA ya/ (Skt. namo gurumañjughoṣāya)</p> <p>上師マンジュゴーシャに帰命する</p> <p>1) Namu gürü Mañjugusay-a</p> <p>2a) Namu guru Mañzu go ṣa ya.</p> <p>3) Namu gürü Mañzu gho ṣa-a.</p> <p>4) Namu guru Mañzu gho ṣa ya.</p> <p>5) Namu guru Mañzu gho ṣa-a-ya.</p> <p>6) Namu guru Mañzu gho ṣa-a-ya.</p> <p>7) Багш Манзушир бурханаа мөргөмү.</p>
2.	<p>phun tshogs dge legs bye bas bskrun pa'i sku / /</p> <p>mtha' yas 'gro ba'i re ba skong ba'i gsung / /</p> <p>ma lus shes bya ji bzhin gzigs pa'i thugs / /</p> <p>shAkya'i gtso bo de la mgos phyag 'tshal / /</p> <p>千万の善妙なる円満により造られた御身体、</p> <p>無辺の趣の願いを叶える御言葉、</p> <p>残りなきすべての所知を如実に御覧になる御心の</p> <p>シャーキャ族の主、その方に頂礼する。</p> <p>1) qotala tegüsügen költi sayin buyan-yar törügüldegsen biy-e-dü,</p> <p>qotula amitan-u egerel-i qanyaqui jarliq-tu,</p> <p>qočurli ügei medegdekün-i yosuyar anu üje-küi jirüke-tü,</p> <p>qotula Šakiliy-uud-un erkin tegün-e terigüber-yen mörgümü.</p> <p>2a) xotolo tögüs byava sayin buya-nār öödügen beye,</p> <p>kijälši ügei amitani erel xangyaxu jarliq,</p>

	<p>xočorli ügei medelgei yambar-čilan üjeqsen sedkil, šākya-yin erkin töün-dü oroyi-γōr mürgümüi.</p> <p>3) qotula tegüs sayin buyan byava-bar bolbasu-raysan bey-tü, kiḡaḡalasi ügei amitan-u eril-i qangγ-a-qu-yin jarliḡ-tu, qočurli ügei medelge-i yambarčilan ayiladuḡsan sedkiltü, Ša-a kha-yin qaḡan tegün-dür terigüber mörgümüi.</p> <p>4) qotala tegüs költi sayin buyan-iyar egüdügsen bey-e kiḡaḡalasi ügei amitan-u egerel-i qangγaḡči jarliḡ, qočurli ügei medegdekün-i yambarčilan ayiladuḡči sedkil-tü, šakiy-a-yin erkin tegün-dür terigüber mörgümüi</p> <p>5) qotala tegüsüksen költi sayin buyan-iyar egüdügsen bey-e, kiḡaḡalasi ügei amitan-u egerel-i qangγaḡqu-yin jarliḡ, qočurli ügei medegdekün-i yambarčilan ayiladqu-yin sedkil-tü šakiy-a-yin erkin tegün-dür terigüber-iyen mörgümü,</p> <p>6) qotala tegüs költi sayin buyan-iyar egüdügsen bey-e-tü, kiḡaḡalal ügei amitan-u egerel-i qangγaḡči jarliḡ-tu, qočurli ügei medegdel-i yambar čilan üjegeči sedkil-tü, ša-a ki-a-yin erkin tegün-e terigüber mörgümü,</p> <p>7) Сая живаа сайн буян хотол чуулж мэндэлсэн лагшинт Сааршгүй олон амьтаны эгээрлийг хангагч зарлигт Сац хамаг мэдэгдэхүүнийг ёсчлон болгоосон таалалт Сартваахь Шагжа язгуурын Эрхэм танаа тэргүүн юүгээр мөргөмү</p>
3.	zla med ston pa de yi sras kyi mchog/ /

rgyal ba'i mdzad pa kun gyi khur bsnam nas//

grangs med zhing du sprul pas rnam rol pa//

mi pham 'jam pa'i dbyangs la phyag 'tshal lo//

その無双なる教主の御子息の最上なる者、  
勝者の全ての御行為という荷を担いなさって  
無数の国土に化身が遊戯する方、  
アジタ（弥勒）、マンジュゴーシャ（文殊）に帰命する。

- 1) tengsel ügei üjegülügči tegün-ü köbegün-ün manglai anu,  
ilaγuγsan-u qamuγ üile-yin ügürge-yi bariγad,  
toγan tomsi ügei ulus-dur qubilyan-yar čenggegči,  
Mayidari Mañjusiri-dur mörgümü.
- 2a) xani ügei üjüülüq-či töüni köükeni dēdü  
ilaγuq-sani jokōl, büküni üürge üürči,  
tōlši ügei oron-du xübilyā-nār maši čengeqči,  
mēdri jōlön egešiqtü mürgümü,
- 3) sačalal ügei üjegülüg-či tegünü köbegün-ü degedü,  
ilaγuγsan-u jokiyal bügüde-yin ügür-ge-yi abuču,  
toγulasi ügei orun-dur qubil-γan-bar sayitur čenggeg-či,  
Mayidari Jögelen-Egšig-tü-dür mörgümü.
- 4) sačalal ügei üjegülügči tegün-ü aqamad köbegün,  
ilaγuγsan-u jokiyal bükün-ü egürge bariju  
toγulasi ügei orun-a qu-bilyan inu teyin čenggegči  
Mayidari Mañzušrii-dur bisirküi-ber mörgümü.
- 5) tengčeši ügei baγši tegün-ü köbegüd-ün manglai,



	<p>ilayusyan-u jokiyal bügüde-yin ügürge-yi bariju, toylasi ügei orun-dur qubilyan-iyar teyin čenggegsen Mayitri Mañzu gho ša-a-dur mörgümü.</p> <p>6) sačalal ügei üjegülüg-či tegünü köbegün-ü degedü, ilayusyan-u jokiyal bügün-ü ügürge-yi abču bürün, toylasi ügei orun-a qubilyan-iyar teyin čenggegči Ülü ilaydaqu Mañju gho ša-a-dur mörgümü.</p> <p>7) Ханьцашгүй багш таны шавийн манлай Хамгийг болгоогчийн зохионгуй бүхнийг үүрэгч Хэмжээлшгүй олон ертөнцөд хувиран сайтар бүжигч Хүндлэлт Майдар, Манзушир танаа мөргөмү</p>
4.	<p>shin tu dpag par dka' ba rgyal ba'i yum// ji bzhin dgongs pa 'grel // mdzad 'dzam gling rgyan// klu sgrub thogs med ces ni sa gsum na// yongs su grags pa'i zhabs la bdag phyag 'tshal// 非常に量り難い勝者の御母（般若）を 意趣の通りに解釈なさる閻浮提の莊嚴、 ナーガールジュナ、アサンガという〔天上・地上・地下の〕三地に 著名な方の御足に私は礼拝する。</p> <p>1) masi uqaquy-a berke burqan-u nom-un yool-i, mön yosuyar tayalal tayiluyči čambutiib-ün čimeg, Nagarjuna Türbel ügei kemekü yurban orud-dur oyuyata aldarsiysad-u köl-dür mörgümü bi.</p> <p>2a) maši čaqlaxu berke ilayusyan-i yum,</p>

yambar-čılan tālal tayilun üyiledüqči jambutibiyin čimüq,  
naγanγuna türbil ügei kemēn γurban γajar-tu,  
oyōto aldaršiqsani ölmidü bi mörgümü.

3) masida onuquy-a berke ilayuyusan-u törü,  
yambarčılan tayalaysan-i tayilun üile-dügči čambutib-ün čimeg,  
Nagaγun-a Türbel-Ügei kemen anu γurban γajar-tur,  
oyuyata aldarsiysan-u köl-dür bi mörgümü.

4) masi kireleküi berke ilayuyusan-u γoul-un,  
tayalal tayil-buri jokiyayči čambutiib-ün čimeg,  
Naganγun-a Türbel ügei kemegdekü γurban orud-tur  
oyuyata aldarsiysad-un köl-dür mörgümü bi.

5) masi čaylaquy-a berke [2a] ilayuyusan-u eke-yin,  
tayalal-i yambarčılan tayil-un jokiyayči čambu tiib-ün čimeg  
Naga-a zu na türbel ügei kemen γurban γajar-tur,  
oyuyata aldarsiysan-u ölmei-dür bi mörgümü.

6) masi čaylaquy-a berke ilayuyusan-u eke-yin tayalal-i,  
yambar čılan tayilun jokiyayči zambutiib-ün čimeg,  
Naganzuna türbel ügei kemen γurban γajar-tur,  
oyuyata aldarsiysan-u [2a] ölmei-dür mörgümü bi.

7) Машид онохуйяа бэрх “Ялгуугсадын эх” судрын утгыг  
Магадтай болгоон тайлбарлагч-Замбуу тивийн чимэг  
Хутагт Нагаржуна, Асанга хэмээн гурван газраа  
Хотол алдаршсан та бүгдийн өлмий дор мөргөмү

5.	<p>shing rta chen po gnyis las legs brgyud pa'i /  zab mo'i lta ba rgya chen spyod pa'i lam / /  ma nor yongs su rdzogs pa'i gnad bsdus pa'i / /  gdams pa'i mdzod 'dzin mar me mdzad la 'dud / /  二人の大車（龍樹・無著）から良く伝わった  甚深なる見解・広大なる行の道を  過たず完全なる要訣に撰した  教誡の蔵を保持するディーパンカラ（アティシヤ）に敬礼する。</p> <p>1) qoyar yeke tergen-eče sayitur barildun iregsen,  gün üjel aqui yeke yabudal-un,  endegürel ügei mör-i sayitur tegüsügsen onisun-i quriyaşan,  ubadis-un sang-i bariççi dibanggara-dur sögüdümü.</p> <p>2a) xoyor yeke tergenēče sayitur ündü-süleqsen,  gün üjel ou yeke yabudaliyin jam,  endöü ügei oyoōto dousuqsani oni-su xurān,  ubadişiyin sang bariq-çi dhi pam ka ra-du sögödü-müi.</p> <p>3) qoyar yeke tergen-eče sayitur ündüsüleqsen-ü  gün narin üjel aqui yeke yabudal-un mör,  ese endegüregsen oyuçata tegüsügsen-ü onisun-i quriyaşan,  ubadis-un sang-i bariççi dibanggara-dur sögüdümü.</p> <p>4) qoyar yeke tergen-eče sayitur ündüsüleqsen,  gün narin üjel aqui yeke yabudal-un mör-i,  endegürel ügei oyuçata tegüskeküi onisun-i quriyaşan,  ubadis-un sang bariççi dibanggar-a-dur sögüdümü.</p>
----	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

	<p>5) qoyar yeke tergen-eče sayitur ündüsülegsen gün üjel aqui yeke yabudal-un mör-ün onisun-i endegürel ügei tegüsgen quriyaγsan, ubadis-un sang-i bariγči dibanggar-a-dur sögüdümü.</p> <p>6) qoyar yeke tergen-eče sayitur ündüsülegsen, gün üjel kiged, aqui yeke yabudal-un mör-i, endegürel ügei oγuyata onisun-i ubadis-un sang-i bariγči dii baṃ ga ra-dur sögüdümü.</p> <p>7) Их тэрэгчин хоёроос сайтар дамжин ирсэн Энгүй гүн үзэл агуу их явдал мөрийн Эндүүрэггүй төгөлдөр шимийг хураасан Эх увидасын хүү санг баригч Адиша танаа мөргөмү</p>
6.	<p>rab 'byams gsung rab kun la lta ba'i mig skal bzang thar par bgrod pa'i 'jug ngogs mchog brtse bas bskyod pa'i thabs mkhas mdzad pa yis// gsal mdzad bshes gnyen rnam la gus phyag 'tshal// 多数の教典全てを見る眼、 幸運な者が解脱に進む最上の入り口を 悲愍により動かされた方便善巧なる御行為により 明らかになさる諸善知識に恭敬帰命する。(帰敬偈はここまで)</p> <p>1) kijayalal ügei qamuγ jarliy nom-uud-i üjeküi nidü-tü, sayin qubitan-i tonilqui-dur odqayulaqui degedü orun egüden anu, nigülsküi-ber ködülgegdegsen uran arya-du üyiles-iyer, geyigülügči nöbür baysi nar-a kündülen mörgümü.</p>

- 2a) maši ketü sayin jarliq büküni üjekü nidün,  
sayin xubi-tu tonilxui-du odxu [2a] jamiyin dēdü,  
enereküyi-gēr ködölgöq-sön uran arya-du mergen jokölör  
todod-xon üyiledüqçi buyani sadun nogoud tu kündülen mörgümü.
- 3) kijiy-a-lasi ügei sayin jarliy bügüde-yi üjüktüyin nidün,  
sayin qubi-tan tonilqui-dur odaquiyin degedü  
mör-i nigülesküi-ber ködelgekü mergen arya-a jokiyaysan-bar,  
geyigülün üiledügçi buyan-u sadun-nuyud-tur kündülen mörgümü.
- 4) kijayalal ügei qotala sayin jarliy-i üjegçi nidün,  
sayin qubitan-i tonilyan getülgegçi oruqui degedü egüden,  
örüsiyeküi-ber manduyulun uran aryas-un üyiles-iyer  
todurqay-a jokiyayçi buyan-u sadun-nuyud-tur kündülen mörgümü.
- 5) maši ketürkei sayin jarliy bükün-dür üjekü-yin nidün,  
nirvan-dur oduyçi sayin qubitan-u [2b]oruqu-yin degedü  
yiga-yi örüsiyenggüi-ber kötelgegedsen mergen arya-a-yin jokiyal-iyar,  
toduraqul-un jokiyayçi buyan sadun-nuyud-tur bisiren mörgümü.
- 6) maši ketürkei sayin jarliy bükün-e üjekü nidün,  
sayin qubi-tan tonilqui-dur odqu-yin degedü oruly-a,  
eneriküi-ber kötelgegsen mergen arya-a-yin jokiyal-iyar,  
geyigülün jokiyayçi buyan sadun-nuyud-a bisiren mörgümü.
- 7) Энгүй уужим эрхэм зарлиг бүхнийг харагч нүд  
Эрхэм хувь сайт нирваанд зорчих олмын дээд  
Энэрэнгүй явдал, мэргэн арга ухаанаар  
Эгнэгт гэгээрүүлэгч-буяны садан бүхнээ бишрэн мөргөмү

7.	<p>deng dus rnal 'byor brtson rnams thos pa nyung //  mang thos nyams len gnad la mi mkhas shing //  phal cher gsung rab blta la phyogs re'i mig//  lung don rigs pas 'byed pa'i mthu med pas//  bstan pa'i gnad rnams rdzogs pa'i gdams pa mchog//  mkhas pa dgyes pa'i lam dang bral mthong nas//  shing rta chen po'i lam 'di bshad pa la//  bdag gi yid ni kun nas spro bar gyur//</p> <p>現在の瑜伽に精進する者らは聴聞が少なく、  多聞の者は行持の要訣に善巧でないし、  大部分は教典を見ても片寄った眼で、  聖教の義を正理により区分する力が無いので、  教説の諸要訣を完成する最上の教誡に  善巧なる者が歓喜なさる道と離れているのを見て、  大車の道（中観・唯識）、これを説くことに  私の意は歓喜することになった。</p> <p>1) edüge čay-dur yogačari-dur kičiyegčid sonusqui čögüken boluyad,  olan sonus-qu-yi abqui onisun-dur ülü mergesin,  olangkin jarliy nom-uud-i alayčilan üjeküi nidüten,  jarliy-un udqan-yi jokdi-ber ilyaqui küčün ügei-yin tula-da,  šasin-u onisun tegüsüksen degedü ubadis,  merged-i bayasqaqui mör-eče angnižiraysad-i üježü bürün,  yeke tergen-ü ene mör-i nomlaqui-dur,  bi setkil-yen qamuγ-ača ülemji bayasumui.</p> <p>2a) ödügē čaq yoγa du kičēqč'in sonosuqsan čōn,  olon-to sonosuqsan adaq-tu abxui onisun du ese mergežin,</p>
----	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

olonkin sayin jarli-gi üjekü-dü öröskül nidün,  
eşeyin udx-a-yi uxaqsanār ilıaxu kücü ügeyin tula  
şajını onisun bükün büridüqsen dēdü uba-dis,  
mergedi bayarloulxu jamāsa xaçaçaqsa-ni üjeji,  
yeke tergeni ene jami nomloxu-du,  
mini sedkil inu bükünēse durlaba,

3) edüge çay-tur yoga-i kiçiyegçi-nuyud sonusuysan çögüken,  
olan sonusuysad angqar[a]γ[s]an-u onisun ese mergesiged,  
olangkin sayin jarliγ-un üjel-dür jüg bayıquyin setkil-tü,  
esi-yin udq-a-yi uqayan-iyar ilıaqu kücün ügei-yin tula,  
üjügülügsen-ü onisun-nuyud tegüsügsen-ü degedü ubadasi,  
merged bayasaquyin mör-lüge angkişiraysan-i üjegend,  
yeke tergen-ü ene mör-i nomlaqui-dur,  
minu setkil anu bükün-eçe bayasaquy-a bolba

4) edüge çay-daki yoga-yi kiçiyegçid sonusuysan inu çögen,  
olan-i sonusuysad angqarun abqui onisun-dur mergen busu,  
olangkin sayin jarliγ-i üjeküi-dür alayçilayçi örügeskel nidü-tü,  
esi-yin udq-a-yi jokis-iyar negegeküi kücün ügei-yin tula,  
sasin-u onisun-nuyud tegüsügsen degedü ubadis,  
merged-i bayasqayçi mör-eçe angkişiraysad üjeşü bür-ün,  
yeke tergen-ü ene mör-i nomlaqui-dur,  
minu duran qamuy-aça tayalaqui bolbai.

5) edüge çay-ta yoga-dur kiçiyegçin-nügüd sonuşal çögen,  
olan sonus-baçu angqarun abqui-yin onisun-dur ese mergeşiged,  
olangkin sayin jarliγ-i üjeküi-dür alayçil-tu nidün,  
esi-yin udq-a-yi sigiıdbüri-ber ilıaqu-yin çidal ügei-yin tula.

	<p>sasin-u onisun-nuyud бүридүгсен degedü ubadis merged bayasqui mör-eče qayačaysan-i üjejü, yeke tergen-ü mör egüni nomlaqui-dur, minu setgel бүкүн-eče duraşıqu bolbai.</p> <p>6) edüge ki čay-un yoga-dur kičiyegči-nügüd sonusuγsan čögen, olan sonusuču angqar-un abqu onisun-dur ese mergejiged, olangkin sayin jarliγ-i üjeküi-dür alayčinyui nidütü, esi-yin udq-a-yi uqayan-iyar ilγaqu kücün ügei-yin tula, sasin-u onisun-nuyud tegüsügsen ubadis-un degedü merged-i bayasγaqu-yin mör-eče [2b] qayačaysan-i üjejü, yeke tergen-ü mör egüni nomlaqui-dur, minu setgel inü бүкүн-eče duraşıqu bolbai.</p> <p>7) Одоо цагт егүзэрт хичээгч нарын сонсох бага, Олныг сонсовч анхааран авч шим болгож ухаарсан нь үгүй Олонхи нь эрхэм зарлигийг алагчаалахуйн нүдээр үзэж Онч номын утгыг ухаанаар ялгахын чадалгүй болсон тул Эрхэм номын аньс бүхэн төгс бүрэлдсэн дээд увидас Энгүй мэргэд баясахын мөр лүгээ хагацсаныг үзээд Их тэргэчний энэ замыг номнохуй яа Эгэл миний сэтгэлд дүүрэн баяр төрмүй зэ</p>
8.	<p>gang dag phyogs 'dzin mun pas ma bsgribs la/ / legs nyas 'byed pa'i blo yi mthu ldan zhing / / dal ba'i rten bzung don ldan byed 'dod pa'i/ / skal ldan de rnams rtse gcig bsgrims te nyon/ / 立場を執る闇によって覆障されずに 善悪を区分する慧の力を具え、</p>

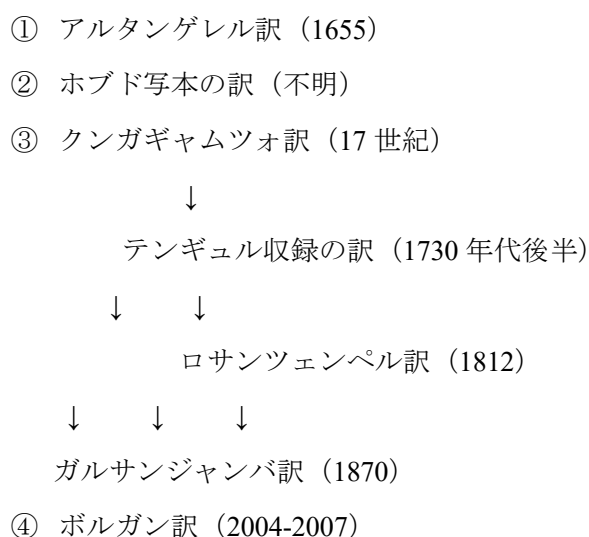


有暇の善き所依を有意義にしたいと思う  
機縁を具えたそれらの者は一境に注意して聴け。

- 1) ken tere alayçı-lan sedkigçi qarangquy-a ese tüidteged,  
sayin mayui-yi ilyaqui uqayan-u küçün tegüsüsen,  
çolatu[çöletü] sayin sitügen-i yabiy-a-tu bolyan küsegçin,  
tedeger qubitan nigen üjügür-tü sedkil-iyer sonusudqun.
- 2a) ken alaçılaxu jüq barixu xaranyür ese bürkün,  
sayin mouki ilya-xu oyouni kücü tögüsüsen,  
çolo- yin sayin şütēki tusa-tai bolıoxui dura-laq-çi,  
xubi tögüsüsen tede nigen üjüürer kinaji sonos.
- 3) ali ken jüg bariqui qarang-qui-bar ese tülidügsen-dür,  
abaqui gegeküi-i ilyaquyin oyun-u küçün tegüsüged,  
çöle-tü-yin sayin sitügen-ü udq-a-tu bolyan duralaqui,  
sayin qubi-tu tede-nuyud nigen üjügür-tü sedkil-i erçimleged sonus.
- 4) alimad alayçılaqui qarangqui-bar ese tüyidügsed,  
sayin mayui-yi ilyaqui oyun-u küçün tegüsüged  
çöle-tü sayin sitügen-i yabiyatu bolyan taçalayçı,  
tedeger tegüs qubitan nigen üjügür-tü sedkil-iyer sonusudqun.
- 5) alimad alayçılan barimtlaqu-yin qarangqui-bar ese bürkügden,  
sayin mayui-yi ilyaqui-yin oyun-u küçün tegüsüged  
çilüge-tü-yin sayin sitügen-i bolyan keregtü bolyaquy-a küsegçi  
tegüs qubi-tan tedeger nigen üjügür-tey-e kinaju sonu-suytun.
- 6) alimad jüg-i bariqui qarangqui-bar ese bürkügdeged,

	<p>sayin maγu-yi ilγaqu oyun-u küčün tegüsügsen böged,          čilüge-tü sayin sitügen-i qabiy-a-tu bolγaqu-yi küseg-či,          tegüs qubi-tu ted nügüd nigen üjügür-teye erčimlejü sonusuγtun.</p> <p>7) Аливаа хязгаарыг баримтлах харанхуйд үл хөлхөлдөн          Авир сайн мууг ялгагч оюуны чадал төгөлдөр болоод          Ахуй чөлөө учралт сайн шүтээнээ ач туст болгохоор хичээгч          Асар хувь төгөлдөр тэд бүхэн нэгэн үзүүрт сэтгэлээр анхааран сонсогтун</p>
--	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

帰敬偈を含めた最初の部分のみの比較であるから、全体像を把握することができるものではないが、あくまで『菩提道次第大論』のモンゴル語訳中での相互関係を推測するために帰敬偈を比較した。まず、はっきりしていることは、ガルサンジャンバ訳（1870）は、ロサンツェンペル訳（1812）、テンギユル収録の訳と（1730年後半）、クンガギャムツォ訳（17世紀）まで遡って、参照されている様子が伺われる。つまり、テンギユル収録の訳とロサンツェンペル訳とガルサンジャンバ訳は、クンガギャムツォ訳の影響下にある。一方、アルタンゲレル訳（1655）、ホブド写本の訳、クンガギャムツォ訳（17世紀）、ボルガン訳（2004-2007）は、別々に成立した単独な翻訳に思われる。ボルガン訳は、帰敬偈を含むこの最初のテキストに対して、モンゴル語らしく韻を踏んで訳しているところが特殊である。翻訳間の影響関係を矢印を使って図で示せば、以下の通りとなる



このような図から、1730年代後半に成立したモンゴル語訳『ツォンカパ全集』中の『菩提道次第大論』は、それ以前の訳『菩提道次第大論』のうち、クンガギャムツォ訳をそのまま採用した可能性はある。しかし、現時点で筆者はクンガギャムツォ訳は最初の一部しか閲覧できていないので、あくまで推測である。『ツォンカパ全集』がモンゴル語訳テンギユルに附属されることになったので、ここでいうテンギユル収録の訳は、その他の訳より広く普及したと考えられる。

### 小結

本章において、現在調べられる限りのモンゴル語訳を調査し、奥書やその他の歴史文献の引用を通じて翻訳者を確定し、それぞれの翻訳年代を推定した。具体的に、すべての翻訳が揃う最初の部分である帰敬偈を含む一部だけを対比して読み、『菩提道次第大論』の4つのグループ中の7種のモンゴル語訳を本章の調査で確認できた。また、奥書を持たないため、翻訳者を確定できない写本も含めて、筆者が閲覧可能な箇所と比較検討を行い、写本ないし木版の種類を確定させた。その結果を書誌情報としてまとめた。また、モンゴル語訳テンギユル収録の『菩提道次第大論』の原文は、北京版（1724）であり、さらにチベット語訳北京版テンギユル収録『ツォンカパ全集』の第1巻の『菩提道次第大論』は原本がショル版の『ツォンカパ全集』であることまで確認できた。

また、テンギユル収録の訳（1730年後半）、ロサンツェンペル訳（1812）、ガルサンジャンバ訳（1870）は、クンガギャムツォ訳（17世紀）の影響下にあることが判明した。

## 第2章 モンゴル語訳『ツォンカパ全集』の二つの版

### 第1節 書誌情報概観と先行研究

『ツォンカパ全集』には、ほぼ同じ時期の二つの版が存在するが、それらの版の成立の状況や内容の異同については研究がない。モンゴル語訳『ツォンカパ全集』の研究に際してまず諸版本の全体像を把握しておく必要がある。

本章は、現在確認できるモンゴル語訳『ツォンカパ全集』の二つの版について、その現存する巻と、二つの版の関係、現存する目録の比較検討、それぞれの版の異同等の文献学的な調査結果を提示する。

モンゴル語訳『ツォンカパ全集』の二つの版のうち、一つはモンゴル語訳北京版テンギェルに含まれる。前述したように、北京版チベット大蔵経は、清朝の雍正帝によって1724年に刊行されたが、そのモンゴル語訳北京版大蔵経は、次の乾隆帝によって1749年に刊行された。以下、テンギェル収録全集と呼称する。この『ツォンカパ全集』は、モンゴル語訳北京版大蔵経と同じく赤いインクで印刷されている。

もう一つは、同じ北京で1730年代後半に刊行された町版のモンゴル語訳『ツォンカパ全集』である。その奥書を見れば、清朝時代の外モンゴルと内モンゴルのノヤド、つまり地域のリーダーたちが協働して、『ツォンカパ全集』を翻訳し、木版にしていることが分かる。これは通常の黒字で印刷されているので、以下黒字全集と呼ぶことにする。纏めるならば、以下の通りである。

- (1) 乾隆帝により1749年に北京で刊行されたモンゴル語訳北京版テンギェル所収『ツォンカパ全集』（テンギェル収録全集）
- (2) 1730年代後半に翻訳され、北京で刊行された単独のモンゴル語訳『ツォンカパ全集』（黒字全集）

黒字全集については、Fanjuur Danjuur (2014)の影印版により閲覧可能となっている。しかし、全20巻のうち第2巻と第8巻以外が刊行されている。2014年に、モンゴル語北京版大蔵経が複製出版されることになった時、本来の赤いインクで刷られた北京版の『チャンキヤ全集』と『ツォンカパ全集』が紛失していたため、黒字の『チャンキヤ全集』と『ツォンカパ全集』をコンピューターで赤字の版面に加工して刊行したものである。黒字全集は、欠本を含むものが2箇所所蔵されている。

- ① 内モンゴル自治区フフホトの内蒙古図書館
- ② ロシアのサンクトペテルブルグ大学図書館

内モンゴル自治区フフホトの内蒙古図書館所蔵黒字全集の目録は、『中国内蒙古文古籍目録』(内蒙)<sup>35</sup>、ロシアのサンクトペテルブルグ大学図書館所蔵黒字全集の目録は『サンクトペテルブルグ大学図書館蔵書モンゴル語資料目録』(St.P Ca.)<sup>36</sup>にそれぞれ記載されている。それらによると、内蒙古図書館所蔵黒字全集は、第2巻と第8巻が欠けており、サンクトペテルブルグ大学図書館所蔵黒字全集は、第3、7、10、19、20巻が欠けているが、これらを合わせれば全巻が揃うことになる。

Γanjuur Danjuur (2014)の出版の際に、サンクトペテルブルグ大学図書館に、欠けている第2巻と第8巻の貸し出しの提供を依頼した。しかしながら、その交渉が実を結ばず、第2巻と第8巻が欠けたまま複製出版された。Γanjuur Danjuur (2014)は、内蒙古図書館所蔵のモンゴル国立図書館所蔵モンゴル語訳北京版テンギユル、内モンゴル自治区フフホトの内蒙古図書館所蔵チャンキヤ、ツォンカパの黒字全集、モンゴル国立図書館所蔵モンゴル語訳北京版テンギユルの目録巻を使用した出版である。

一方、テンギユル収録全集は、全20巻のうち9巻のみが京都大学大学院文学研究科附属の羽田記念館に保管されている<sup>37</sup>。以下の通りである。

- 第2巻 (234 fols.)
- 第4巻 (370 fols.)
- 第5巻 (344 fols.)
- 第10巻 (片面1 fols.)
- 第12巻 (353 fols.)
- 第14巻 (片面1 fols.)
- 第16巻 (259 fols.)
- 第18巻 (327 fols.)
- 第20巻 (276 fols.) + 附属目録 (11 fols.)

---

<sup>35</sup> 内蒙 No. 00623, [pp. 148-156]

<sup>36</sup> St.P Ca. No. 2.116-128, [pp. 60-71]

<sup>37</sup> 羽田記念館に所蔵されているテンギユル収録全集は、目録に入っていない。そのため、全集の存在が訪れていく人以外に知られない。保存状態も悪く、湿気の影響を受け文字が薄れている。

第 20 巻本に目録 (11 fols.) が付いている。第 10、14 巻は、1 フォーリオのみの不完全な巻であるので、実質的に残っているのは 7 巻のみである。

また、『菩提道次第大論』は、①北京版テンギユル目録中のトゥケン著『ツォンカパ全集』の目録<sup>38</sup>においては、ka (第 1) 巻と kha (第 2) 巻に分かれているが、②黒字全集の目録においては ka (第 1) 巻の上巻と下巻になっている。③その黒字全集の形式を持つ『菩提道次第大論』が東洋文庫に 3 セットあり、No.MO2-07-11 と No.MO2-07-13 と No.MO2-07-16+24 (No.MO2-07-16 は三士の章、No.MO2-07-24 は止観の章であるが、別々に登録されている) の番号で登録されている。東洋文庫にある黒字全集の Ka (第 1) 巻の 3 セットは、同版<sup>39</sup>のものに思われる。それに比べて、④内モンゴル大学図書館所蔵 No.49.3/22 の黒字全集の形式を持つ『菩提道次第大論』は小型である。

上述した黒字全集の版本①～④は、形式が一緒であるから『ツォンカパ全集』の第 1 巻として数えたいが、『菩提道次第大論』のみが単独に木版された可能性は十分にある。おそらく、『ツォンカパ全集』第 1 巻と記されているが、①～④の 4 版は単独な木版であると判断して良いだろう。

羽田記念館所蔵テンギユル収録全集には『菩提道次第大論』に当たる第 1 巻がなく、第 2 巻が『菩提道次第小論』であることから、トゥケン著『黄教初祖百千法語総目』目録の配列通りであることが分かる。『菩提道次第大論』と『菩提道次第小論』が第 1 巻と第 2 巻に分かれている形式はテンギユル収録全集のみであり、上述したような単独なモンゴル語訳『菩提道次第大論』は、黒字全集の形式に従うものばかりである。

## 第 2 節 北京版チベット大蔵経と『チャンキャ全集・ツォンカパ全集』

前述したように、北京版チベット大蔵経に雍正帝 (1678-1735) の勅令によってツォンカパとチャンキャ 2 世 (Tib. ngag dbang blo bzang chos ldan, 1642-1715) の全集が加えられた。

ダライラマ 3 世をモンゴルに迎えたアルタン・ハンの子の時代に、まず全カンギユルと、テンギユルの一部がモンゴル語に翻訳され、満洲人が中国を征服して建てた清朝の最盛期に乾

<sup>38</sup> 題名は、『黄教初祖百千法語総目』である。

<sup>39</sup> No.MO2-07-11 ←大きさ 14×59 cm、No.MO2-07-13 ←大きさ 13×58 cm、No.MO2-07-16+24 (No.MO2-07-16 ←大きさ 12×58 cm、No.MO2-07-24 ←大きさ 13×58 cm) というようにバラついた大きさと東洋文庫モンゴル語図書館検索サイトに登録されている。

隆帝 (1711-1796) の命令によって、全テンギユルを翻訳してモンゴル語訳北京版大蔵経が開版された<sup>40</sup>。1749 年、乾隆帝はモンゴル語訳テンギユルに序文を書き、満洲語、モンゴル語、漢語による同一内容の文章を残している。

egün-i tngri-yin tedkügsen-ü jiryuduyar on-u čayayčün takiy-a jil ebül-ün segül sar-a-ača egüsgejü üiledtüged, naiman jil ilegüü bolču. sirayčün moyai jil-ün zun-u terigün sar-a-dur kürtel-e tegüsbei. tangyud-un jaljamjilaju üiledtügsen danjur nom qoyar jayun qorin tabun kelmeli. bügüde naiman tümen tabin yisün qayudasu. mongyul-iyar orčiyuluysan anu. arban tümen naiman mingyan arban jiryuyan qayudasu. basa uridu törül-ün jangkiy-a qutuytu-yin ijayur jokiyaysan süngbüm nom doluyan debter-i oluyad. biligtü nom-un qan-u bariysan sir-a-yin šasin-u uy blam-a bzovanghaba-yin jokiyaysan süngbüm nom qorin debter selte-yi yeke danjur nom-dur oruyulju seyilgeged keb daruyuluwad. tarqayaju tungqalabai. [MD Ca. 御製続蔵経序 2b2-27]

これは乾隆 6 年 (1741)、辛酉年の冬の最後の月から作業が始まり、8 年少しかかり、己巳年 (1749) の夏の初月までに完成した。チベット人が相承し、作成したテンギユルは 225 巻、全部で 8 万 59 フォリオ、モンゴル語によって翻訳されたのは 10 万 8 千 16 フォリオ、さらに前世<sup>41</sup>のチャンキヤ・ホタクトの著作した全集 7 巻を収録し、ビレグト・ノムン・ハンの依頼した黄教の開祖ラマであるツォンカパの著作した全集 20 巻を偉大なるテンギユルに収録し、彫り起し、木版にして、広く公布した。

つまり、モンゴル語訳テンギユルを完成させるのに、乾隆 6 年である 1741 年から 1749 年まで 8 年間かかったこと、テンギユルは、225 巻全部で 8 万 59 フォリオ、さらにチャンキヤ 2 世の全集 7 巻と、ビレグト・ノムン・ハン (Mong. Biligtü nom-un qan) の依頼で『ツォンカパ全集』20 巻をテンギユルに収録させて、木版を作成させたことが述べられている<sup>42</sup>。これは、チベット語テンギユルと同様に赤字で印刷されている。

<sup>40</sup> 福田、石濱 (1986) p. 107.

<sup>41</sup> 前世のチャンキヤ・ホタクトとは、チャンキヤ 2 世ガワンロサンチューデンを指していつていることであり、チャンキヤ 3 世ルペドルジェからして前世のチャンキヤというような表現にしているのである。

<sup>42</sup> 乾隆帝の父である雍正帝による序文 (1724) が北京版チベット大蔵経に付されている。そこにも同様の事情が書かれている (MD Ca. 御製序文 2b4-24:) それによると、『チャンキヤ全集』は、テンギユルに収録するのに、特に依頼者が存在しないこと、『ツォンカパ全集』は、ビレグト・ノムン・ハンの依頼でテンギユルに収録したことが確認できる。ビレグト・ノムン・ハンとは、ジェブツンダンパー世の弟子に当たるハルハ人であり、モンゴルが清朝の支配下に入る時に、活動したので雍正帝により与えられた称名である。本名は知られない。

### 第3節 モンゴル語訳『ツォンカパ全集』の二つの版

『ツォンカパ全集』を収録したモンゴル語訳北京版テンギェルが開版されるよりも前に、北京で黒字の『ツォンカパ全集』が開版された。

『ツォンカパ全集』の翻訳年代を推測するため、翻訳年代が明確に書かれている第5巻と第18巻の奥書を参照する。ここで、まず黒字全集の第5巻の奥書を下記に引用する。

tangyud bičig-ün ded surγayuli-yin bayši böged long pu se kemegdekü yeke kiyid-ün, terigülegsen jasay blam-a güüşrii danjin čoyidar gelüng ber tngri-yin tedkügšen-ü yutayar on čeyider sar-a-ača ekileged qoyitu dötüger on burqan bayši eke-yin umai-dur öged boluysan, tusa bütügšen kemekü siroi em-e qonin jil-ün, tügemel ridi qubilγan üjügülügšen maga kemekü qaburun terigün sar-a-yin tunumal delger edür-e orčiyulju dayusyad sigüüjü tegüskebei. [Tanjuur Danjuur (1914) 宗5巻 pp. 332-333; ča (Tib. tsha) 334b9-334b26]

チベット語の副学科の先生であり、ロンプセ (long pu se) 大寺の管長のジャサク・ラマである国師テンジン・チューダル・ゲロンが乾隆3年である戊午年(1738)の正月 (Tib. tshes gtor, Mong. čeyider) から始め、次の年である乾隆4年である「釈尊が胎内に宿って利益が成就した」と言う己未年(1739)の「奇跡を見せた」春の初月である1月の晴れた日に翻訳し、修正して完成させた。

この黒字全集の第5巻所収の著作は、『入中論釈・密意解明』(Mong. töb-tür oruqu-yin aqui yeke nomlal tayalal-i masi geyigülügči kemekü) であるが、その翻訳者はテンジン・チューダル (Mong. danjin čoyidar ← Tib. bstan 'dzin chos dar) ・ゲロンであり、翻訳年代は1738年から1739年であることが確認できる。続いて、翻訳年代が書かれている『ツォンカパ全集』の第18巻のページの最後に「出版年は大清乾隆三年春日立(1738)」と漢語で記している。

第5巻に1738年から1739年、第18巻に1738年と翻訳年代が書かれていることから、おそらく黒字全集は1730年代後半までに翻訳されたと推測される。

### 第4節 モンゴル語北京版テンギェル収録の『ツォンカパ全集』の目録

モンゴル語訳北京版テンギェルには、『ツォンカパ全集』の目録に関しては、2箇所収録されている。

- 北京版テンギェル目録部に増書されたトゥケン著『ツォンカパ全集』の目録



➤ 北京版テンギユル収録『ツォンカパ全集』第20巻中の目録

前者は、Fanjuur Danjuur (2014)のテンギユル目録巻に収録され、後者は、羽田記念館に所蔵されている『ツォンカパ全集』のうちの第20巻に入っている。1749年発行のモンゴル語訳北京版テンギユルは以下の3箇所の一部ずつ現存している<sup>43</sup>。

- (1) モンゴル国立図書館（完全な目録を伴う）
- (2) 内蒙古図書館（目録が不完全）
- (3) 内蒙古社会科学院図書館（目録が不完全）

目録巻において、北京版に『チャンキヤ全集』7巻と『ツォンカパ全集』20巻を追加したと雍正帝序文<sup>44</sup>、乾隆帝序文<sup>45</sup>、トゥケン著の目録である『新增百千法語序』の序疏<sup>46</sup>に書かれているが、現存する1749年発行のモンゴル語訳テンギユルは三つとも『ツォンカパ全集』と『チャンキヤ全集』を含んでいない。なぜ、彼ら二人の全集を含んでいないのかは、現時点で不明である。

『ツォンカパ全集』と『チャンキヤ全集』がテンギユルに収録されたのは、雍正帝の時代にチベット語での北京版大蔵経が編集された1724年である。

tegün-ü yeke törü-yi erkesigülčegsen boyda nayiraltu töb qayan, temdegtey-e burqan-u šasin-i jaljamjilan delgeregülkü tuyil-un örüsiyel-iyer, degedü ilayuyusan boyda bzonkhapa sumadi kiiriti-yin 'bum jarliy kiged, tengsel ügei açitu vakindr-a sumadi dharm-a ..... blam-a 'bum jarliy selte-yi keb-tür seyilgejü da a 'gyür erdeni luy-a qamtuda orusiylqui-dur ketürkei ilayuyusan tabdayar gegen-u jokiyaysan qayučin tuy-a biçig ba, gegen uqayatan-u küčükün-ü čimeg üjšegüleng cindamani-yin erike kemegekü sin-e tuy-a biçig seltin-i. kelkü mongyul-un ayaluyubar yeke gyesgüs büged töbed suryaulyi-yin baysi terigün blam-a dgyeslong bgdan gčün čosdar,

---

<sup>43</sup> Sečenbilig S. (2017) p. 129.

<sup>44</sup> MD Ca. 御製序文 2b5-24.

<sup>45</sup> MD Ca. 御製統藏経序 2b16-27.

<sup>46</sup> MD Ca. 序疏 1b25-2a19.

dgyeslong ..... gdbeng puncoys qoyar orčiγulbai. [MD Ca. 『黄教初祖百千法語総目』 27b12-26<sup>47</sup>]

その偉大な〔国家〕政治を仕切ったボグダ雍正帝が、間違いなく仏教を継続して広める究極の慈心で、最大の勝者であるボグダ・ツォンカパ・スマディ・キルティの全集と無比の御恩あるワキンダラ・ロサン・チューキ・ギャツォの全集などを木版に彫らせ、テンギユル (da a 'gyür) と共に設置する際に、勝者ダライラマ 5 世の古い目録と、『明慧の力の莊嚴である美しい如意宝珠』と言う新しい目録を、表現されるモンゴル語によって大責任者 (gyesgüs) チベット学校の先生のラマの長であるゲロン・テンジン・チューダル (Mong. bgdan gč'in čosdar)、ゲロンのツェワン・プンツォー (..... gdbeng puncoys) の二人で翻訳した。

雍正帝は、『ツォンカパ全集』と『チャンキャ全集』の木版を作らせ、テンギユルと共に刊行した。その際、トゥケンが『黄教初祖百千法語総目』という新しい目録を作成し、それをダライラマ 5 世のテンギユル目録と共に、ゲロン・テンジン・チューダル (Mong. bgdan gč'in čosdar ← Tib. bstan 'dzin chos dar) とゲロン・ツェワン・プンツォー (Mong. .... gdbeng puncoys ← Tib. tshe dbang phun tshogs) の二人でモンゴル語に翻訳したとある。

ただし、大谷大学所蔵北京版大蔵経においては、トゥケンが著した目録のチベット語原文は目録巻の北京版大蔵経第 332 巻に入っていない。大谷大学所蔵北京版大蔵経テンギユル目録では、1724 年の『黄教初祖百千法語総目』<sup>48</sup>のモンゴル語訳だけがある。そのチベット原文は、Γanjuur Danjuur (2014)のテンギユル目録巻 (MD Ca.) から知ることができる。

### 第 5 節 モンゴル語訳『ツォンカパ全集』の目録の比較

二つの全集の相互の関係を明確にするため、現存する『ツォンカパ全集』の目録を比較する。モンゴル語訳北京版テンギユル収録の『ツォンカパ全集』が不完全なためモンゴル語訳北京版テンギユルを Γanjuur Danjuur (2014)において複製する際に、黒字全集を利用したことは、上述した。従って、Γanjuur Danjuur (2014)は、黒字全集の第 20 巻も目録を伴うものである。それらの目録を比較する。

<sup>47</sup> Γanjuur Danjuur (2014) p. 241.

<sup>48</sup> 『北京版チベット大蔵経目録』 第 332 巻 dkar chag II (bstan 'gyur) pp. 206(5)-209(2) 序論 1a-12b 目録 13a-19a.

モンゴル語による『ツォンカパ全集』の目録は2種類である。

- (1) 北京版テンギユル目録部に増書されたトゥケン著『黄教初祖百千法語総目』
- (2) モンゴル語訳『ツォンカパ全集』第20巻に附属した目録

2種類の目録にそれぞれ二つの木版が存在する。黒字全集とテンギユル収録全集は、第20巻に目録が含まれている。両者、つまり「黒字全集目録」と「テンギユル収録全集目録」は木版は別で、内容は同一のものである。「黒字全集目録」は、Γanjuur Danjuur (2014)の『ツォンカパ全集』の第20巻で閲覧可能であり、「テンギユル収録全集目録」は羽田記念館に所蔵するモンゴル語北京版テンギユル収録『ツォンカパ全集』の第20巻に入っているもので閲覧可能である。

- (1) 北京版テンギユル目録部に増書されたトゥケン著『黄教初祖百千法語総目』
  - (1a) チベット語北京版テンギユル目録巻におけるトゥケン著『黄教初祖百千法語総目』(1724、以下「チベット語テンギユル附属目録」と記す) → 大谷大学所蔵北京版大蔵経第332巻によりモンゴル語のみで閲覧可能
  - (1b) モンゴル語北京版テンギユル目録巻におけるトゥケン著『黄教初祖百千法語総目』(1749、以下「モンゴル語テンギユル附属目録」と記す) → MD Ca.によりチベット・モンゴル語で閲覧可能
- (2) モンゴル語訳『ツォンカパ全集』に附属した目録
  - (2a) 「黒字全集目録」<sup>49</sup>(1730年代) → Γanjuur Danjuur (2014)の『ツォンカパ全集』の第20巻でモンゴル語により閲覧可能、
  - (2b) 「テンギユル収録全集目録」(1749) → 羽田記念館所蔵『ツォンカパ全集』でモンゴル語により閲覧可能

「チベット語テンギユル附属目録」<sup>50</sup>は、大谷大学所蔵北京版大蔵経の目録巻である第332巻に収録されている。ただし、なぜかチベット語原文は欠如している。これと同じ種類の「モン

<sup>49</sup> 内蒙、St.P Ca.に採録されている。

<sup>50</sup> 『チベット語テンギユル目録』第332巻 pp.206.3-209.2 (『黄教初祖百千法語総目』12a1-19a32)

「ゴル語テンギユル附属目録」は、Γanjuur Danjuur (2014)のテンギユル目録巻に収録されている。その奥書から分かることは、以下の通りである。

[...]ces bstan 'gyur rin po che'i dkar chags blo gsal mgul rgyan tsin da ma Na'i 'phreng mdzes zhes bya ba 'di ni ho sho'i bzang sog po'i khrim ra'i as han am pa gong ma'i blon chen bkra shis dang // lugs gnyis kyi mkhyen dpyod 'das shing nyims len la rtse gcig tu brtson pa phu'u yig bla ma shes rab rgya mtsho gnyis kyi 'di lta bu zhig gyis zhes bskul ba ltar btsun gzugs snyoms las pa ngag dbang chos rgya mtsho zhes bgyi bas rgyal khab chen po pe'i cing gi tsan dan jo bo'i lha khang du sbyar ba<sup>51</sup> (MD Ca.テンギユル附属目録 22b2-5<sup>52</sup>)

以上の『丹珠爾目録・智者頂飾・如意珠美鬘 (bstan 'gyur rin po che'i dkar chag blo gsal mgul rgyan tsin da ma Ni'i 'phreng mdzes)』というこれは、旗における外モンゴルの全国政治的管理局の大使、上の大臣であるタシと、〔政教〕二規の智慧をそなえ、実践に専念している印鑑管理者のラマであるシェーラブ・ギャムツォの二人がこのように作成してくださいと依頼した通りに、仕事が遅い僧ガワン・チューキ・ギャツォが王国の首都北京の梅檀寺の仏殿で編纂し・・・

目録の依頼者がタシ (Tib. bkra shis) とシェーラブ・ギャムツォ (Tib. shes rab rgya mtsho)、目録作成者はガワン・チューキ・ギャツォ (Tib. ngag dbang chos kyi rgya mtsho)、場所は北京の梅檀寺 (Tib. tsan dan jo bo) であることがわかった。ここで言う作成者のガワン・チューキ・ギャツォは、トゥケン2世 (1680-1736) のことである。それから、このトゥケン著の目録である『黄教初祖百千法語総目』は、題名が『明慧の知の力の莊嚴である美しい如意宝珠』である。

上述したように「チベット語テンギユル附属目録」は、北京版チベット大蔵経の332巻にモンゴル語訳のみが収録されている。従って、内容が同一な別の木版による「モンゴル語テンギユル附属目録」を「黒字全集目録」と比較する。

<sup>51</sup> kemekü da a 'gyür erdeni-yin toy-a bičig gegen erike kemegdekü egün-i, qosiyun-u erkim qayıqamsiy büged yadayad mongyul-un tör-yi jasaqu yabudal-un yamun-u qabsurčü dayaysan sayid degedü-yin sidar dotuyadu yeke sayid rasi ba, qoyar yosun-u medel sinjilel ayuujiyad angqar-un abqui-dur čing sedkil-iyer kičiyegči tamay-a tanu suruysan blam-a sisreb rgyamčo qoyar ene metü nigen-i üiled kemen [27b]duraduysan-u yosuyar toyin düri-tü jalaqai vagyadar-a dharm-a samudra kemegdekü-ber qačan-u yeke qota begejingün zandan juu-yin buqar keyid-tür nayirayuluysan-u ... [MD Ca. 『黄教初祖百千法語総目』 27a23-27b8]

<sup>52</sup> Γanjuur Danjuur (2014) p.863.

「黒字全集目録」と「モンゴル語テンギユル附属目録」は、後述する若干の配列の違い以外は内容が一致する。まず二つの目録において第 10 巻と第 16 巻が入れ替えられている。すなわち、「モンゴル語テンギユル附属目録」において、2 作から成り立つ *tha* (第 10) 巻が、内容は同一であるが「黒字全集目録」においては、*ma* (第 16) 巻となり、逆に「黒字全集目録」の *tha* (第 10) 巻が「モンゴル語テンギユル附属目録」では *ma* (第 16) 巻となっている。

羽田記念館に所蔵するモンゴル語北京版テンギユル収録『ツォンカパ全集』の第 16 巻、つまりテンギユル収録全集の実物を閲覧したところ、「黒字全集目録」の配列通りに「*ma*」の第 16 巻となっていた。また、*ba* (第 15) 巻に関しては、「黒字全集目録」において、3 作が抜けている。テンギユル附属目録第 15 巻における以下の 3 作である。

第 4 番 *rgyud kyi rgyal po dpal gsang ba 'dus pa'i rim lnga gdan rjogs kyi dmar khrid*<sup>53</sup>

第 5 番 *gsang ba 'dus pa'i zhal shes yig chung thor bu pa*<sup>54</sup>

第 6 番 *bsre dang 'pho ba'i gdam ngag*<sup>55</sup>

上記以外は、順番通りになっている。また、*tsha* (第 18) 巻に関しては、作品の順番が変わっただけで作品の数は一致している。

北京版テンギユル収録の『ツォンカパ全集』は、実際に、この二種の目録のどれに従っているかを次に確認する必要がある。「モンゴル語テンギユル附属目録」と「黒字全集目録」には、若干ではあるが配列の差が見られる。それは、「モンゴル語テンギユル附属目録」は、1724 年に開版された北京版チベット語テンギユルの目録巻がそのままモンゴル語に翻訳されたものであるため、チベット語の『ツォンカパ全集』の作品の順序に従っているのに対し、「黒字全集目録」はモンゴル語訳『ツォンカパ全集』（黒字全集）を反映しているからである。

テンギユル収録全集の実物は、9 巻のみが羽田記念館に保存されていることについて上述した。その 9 巻は、黒字全集と木版が違うのでフォリオ数の差が伺えるだけで、やはり「黒字全集目録」の配列に沿う同様な内容であった。つまり、モンゴル語北京版テンギユルは、黒字全集をもう一回木版を彫り直し、収録したということになる。

以上をまとめると、次のようになる。

---

<sup>53</sup> 大谷 No. 6171\_126.4.

<sup>54</sup> 大谷 No. 6172\_126.5.

<sup>55</sup> 大谷 No. 6173\_126.6.

➤ 「黒字全集目録」と「テンギユル収録全集目録」は、全く同じ目録であり、「テンギユル収録全集目録」は「黒字全集目録」をもとに彫り直されている。

➤ 「モンゴル語テンギユル附属目録」と「チベット語テンギユル附属目録」は内容は同じであり、チベット語の目録をもとにモンゴル語に訳された。

### 小結

木版は、モンゴル語訳テンギユルに収録された赤字の『ツオンカパ全集』（1749）と、黒字全集（1730年代）の2つが存在するが、モンゴル語訳テンギユル収録『ツオンカパ全集』は、黒字全集をもとに木版を彫り直したものであり、内容が同一のものである。つまり、モンゴル語訳『ツオンカパ全集』は1種類のみである。その1種の『ツオンカパ全集』に対して、二様の目録が存在するが、対応する目録は、本論でいう「黒字全集目録」、つまり「モンゴル語訳『ツオンカパ全集』（第20巻）に附属した目録」（11 fols.）である。1749年のモンゴル語訳テンギユル全体の目録巻（MD Ca.）は、1724年のチベット語北京版テンギユル目録巻の直訳であるということから、実際にモンゴル語訳テンギユル収録『ツオンカパ全集』とは、巻の入れ替えや3作の違いなどがあることは本章で確認できた。

### 第3章 チャンキヤ著『正字法・賢者の源』の特徴

#### —『二卷本訳語釈』との比較を通じて—

本章は、『賢者の源』と『二卷本訳語釈』の比較検討を通じて、『賢者の源』の特徴を明らかにすることを目的とする。具体的には、『賢者の源』が欽定訳語集として『二卷本訳語釈』の延長線上にあることに焦点を当てて『賢者の源』の成立事情を検討するとともに、その序文で言及されている本論の構成を検討し、『賢者の源』の特徴を明らかにしたい。

『賢者の源』において、『二卷本訳語釈』と『翻訳名義大集』を依拠した典籍として言及している<sup>56</sup>。また、『賢者の源』と『二卷本訳語釈』は、いずれも欽定決定訳語集である。それゆえ『賢者の源』の性格を明らかにするには、両者を比較する必要がある。『翻訳名義大集』は序論を持たないので、著作意図などは不明であるが、その事情については『二卷本訳語釈』の序論に示唆されている。

先行研究においては『賢者の源』は、『二卷本訳語釈』と同類である点が認められているが、両書物の内容の相違点について具体的に言及されていないので、その点について本章で取り上げ、併せて『賢者の源』において真言部、新旧語彙の章が設けられたことに関しても検討を行う。

#### 第1節 先行研究概観と書誌情報

『賢者の源』に関する先行研究としては、酒井(1942)、磯田(1984)、Ruegg(1973)、Канаока(1992)、金岡(1986、1987a、1987b、2005)、Sainbileg(2016)がある。

酒井(1942)は、真言部のみ和訳し、『賢者の源』を最良の仏教概論正字書として紹介している。磯田(1984)は、般若部のみをローマ字転写(テキストのKB利用)している。Ruegg(1973)は、序文を英訳解説し、それが『二卷本訳語釈』の伝統を継承していることを指摘し<sup>57</sup>、その上で仏教の教理的な面に関して『二卷本訳語釈』より詳しいことを、チャンキヤが有名な学僧であったことと結びつけて解釈している<sup>58</sup>。しかし、これらの相違が『賢者の源』と『二卷本訳語釈』の成立の背景の相違によるものであることについては触れていない。

<sup>56</sup> 西沢(2017)は、『翻訳名義大集』と『二卷本訳語釈』について詳しい研究を行っている。しかし、『賢者の源』については言及していない。

<sup>57</sup> Ruegg(1973) pp. 246-257.

<sup>58</sup> Ruegg(1973) p. 258.

金岡 (1986) は、モンゴル語訳『賢者の源』の序文を扱い、タイトル、成立、編者・著者について述べている。金岡 (1986, 1987a, 1987b)、カナオカ (1992) は、文献学的な解説や時代背景、先行研究の紹介ならびに出版されたテキストの解題などを行なっている。金岡 (1986) はモンゴル語訳『賢者の源』の具名について解説を行い、金岡 (1987a) は、モンゴル語訳に参画した学匠について述べている。金岡 (1987a) は、モンゴル語による仏教的な借用語について考察している。その中で、『賢者の源』の思想の背景にあったと考えられるのは『二巻本訳語釈』と『翻訳名義大集』という言及がある。金岡 (2005, 2006) は、モンゴル語訳『賢者の源』の序文における「翻訳論」を和訳して、それに対する考察を行っている。以上のように金岡の論文は数々存在するが、モンゴル語訳のテキストの研究が主で、チベット仏教史上の訳語集との比較やチベット仏教の術語集としての全体の構成という点には触れていない。

Sainbileg (2016) は、『賢者の源』のチベット語とモンゴル語のローマ字化されたテキストを提示するが、その内容については詳しい言及はない。Sainbileg (2016)<sup>59</sup>では、章の構成について簡単に紹介するが、章の配列順についての説明はみられない。また、真言部、新旧語彙の章が設けられていることについては考察を行っていない。章の構成内容に関する説明も十分ではない。

### 書誌情報

『賢者の源』は、チベット語のみのテキストと、モンゴル語訳の対訳を伴うテキストの二種類が利用可能である。本章で扱うテキストの書誌情報を挙げるならば、以下の通りである。

1. チベット語原典: *dag yig mkhas pa'i 'byung gnas* (KB)
  - ① 北京版チャンキヤ3世ルペードルジェの全集<sup>60</sup>所収本 BDRC<sup>61</sup> No.W23741 [213 fols.]
  - ② BDRC No. W28833: *krung go bod brgyud mtho rim nang bstan slob gling nang bstan zhib 'jug khang* (1995) Vol.7(pp.227-652) [北京版再出版]
  - ③ BDRC No. W29035: *Library of Tibetan works and archives*. Dharamsala (2003) [北京版再出版]

---

<sup>59</sup> Sainbileg (2016) p.11.

<sup>60</sup> チャンキヤ3世ルペードルジェの全集は北京版のみが確認される。②は、北京版を利用したものであることが、ページ数と形式がぴったり会うことからみて分かる。③は、北京版であることが表紙に記されている。④は、活字版である。

<sup>61</sup> Buddhist Digital Resource Center > BDRC. 仏典のPDF化をおこなっているアメリカの事業者のサイトである。



④ BDRC No. W2PD17430: *bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang. lha sa* (2015) [活字本]

2. チベット語・モンゴル語の対訳 : Tib. *dag yig mkhas pa'i 'byung gnas*, Mong. *merged yarqu-yin orun* (MGO)

① 北京版 (1742)

St.P Ca. No. 825 (3 Tib. lines, 53.8×11 [50.6×7.4] cm, 371 fols.)

内蒙 No. 06757 (3 Tib. lines, 7.5×50.5 cm, 371 fols.)

② アギ寺版 (1924) <sup>62</sup>

St.P Ca. No. 827 (3 Tib. lines, 60×9.5 [50.5×7.5] cm 385 ? 378 ? fols.)

原典は筆者未見、校訂本 Sainbileg (2016)

③ 活字本<sup>63</sup>

Ĵamyantübden, Ĵoriytu (1988): *Merged garaqu-yin oron. Jangkiya-Isidanbiromva jokiyaba.*

begejing: ündüsün-ü keblel-ün qoriy-a. 嘉木様圖布丹・卓日格圖『智慧之源』北京

Rasisereng G. (2011) *Oyun-i todurquihuyçi erdeni erike. Tib. blo gsal rin chen phreng ba. degedu,*

dooradu debter. Kökeqota: Öber mongyol-un keblel-ün bülügöl Öber mongyol-un soyul-un

keblel-ün qoriy-a. 格・拉西色楞『明慧寶鬘』呼和浩特 内蒙古文化出版社

チベット語・モンゴル語の対訳版『賢者の源』は広く普及している。その形式の『賢者の源』であるBDRC No.W4CZ74378は、完本ではなく因明部のみであるが、北京版の形式が確認できる良好に撮れたテキストである。完本がモンゴルの国立図書館、中国国家図書館、サンクトペテルブルグ大学図書館にあることが知られる。寺院や個人の手に残っているものもある。写本が三つほど登録されているが、それぞれ北京版から後に写されたものである。内蒙 No. 06758 (8.8×52.8 cm 41 fols.) 内蒙古自治区図書館所属の写本である般若部のみテキストと、内蒙 No. 06759 (11×48 cm 18 fols.) 写本である新旧訳語部のみテキストと、内蒙 No. 06760 (10×45.5 cm 23 fols.) çoyidan (乔丹) 個人所有の写本である新旧訳語部のみテキストである。

東洋文庫 No. MO2-A11-17とNo. MO2-A11-2は、両方共に般若部のみテキストである。筆者は、それを見ていないため、北京版かアギ寺版かは判定できていない。

<sup>62</sup> Sainbileg (2016) p.54 によると、アギ寺版において開板者のアギ寺は、チベット・モンゴル語対応の奥書 (1 フォリオ程度) を記している。奥書から『賢者の源』を首都フレーの文献学大学院からの依頼のもとで、モンゴルではアギ寺という名で知られたブリヤートのアギ寺で 1924 年に再版したことが分かる。

<sup>63</sup> Ĵamyantübden, Ĵoriytu (1988)は、僅かな情報を含む序論と最後にチベット語文法書を伴うチベット語・モンゴル語対訳の形式を保つものであり、解説、打ち間違いなどのミスが見られる。Rasisereng G. (2011)は、単語をチベット・モンゴル文字順で調べられるようにしている。

筆者は、アギ寺版は実物を閲覧できていないが、アギ寺版はSainbileg (2016)が校訂テキストを作っている。出版する際にアギ寺版は、フレーの文献学学士院の依頼で若干なりとも訂正を入れていることから、チベット・モンゴル語対訳版には、北京版とアギ寺版の二版が存在すると見なして良いと判断する。完本ではないが、サンクトペテルブルグ大学図書館にもアギ寺版が所蔵されている。

利用可能なテキストについては以上述べた通りであるが、本文の内容に関する部分での引用はチャンキヤ3世全集所収のチベット原文 (KB) を利用し、併せて、北京版チベット語・モンゴル語の対訳版 (MGO) も参照する。

また、チベット語・満洲語・モンゴル語の対訳も存在することがサンクトペテルブルグ大学図書館所蔵資料目録 St.P Ca. No. 826 (1 Tib. lines, 26.8×10.8 [21.2×6.7] cm) から知られる。ただし、題名が記述されておらず、1, 2, 4-6, 8-11巻が紛失した不完全版であり、第3と7巻のみが現存しているとのことである<sup>64</sup>。

『賢者の源』は、チャンキヤが当初チベット語で著作したときから、モンゴル語訳とともに刊行することを前提としていた<sup>65</sup>。その点を明らかにするために、以下、同序文を資料として本書の成立事情について検討する。

## 第2節 『賢者の源』の成立事情

チベット・モンゴル語対訳の北京版の奥書きには、その編纂事情について以下のように述べられている。

skad gnyis smra ba'i ku shri bcu mams kyis sngon gyi 'gyur rnying dang gsung rab kyi dgongs pa la legs par dpyad de ta'i ching lha skyong rgyal po'i gnam lo drug pa lcags mo bya lo'i smin drug zla ba'i rgyal phur gnyis grub sbyor nyin dbu btsugs te gnam lo bdun pa chu pho khyi lo 'i mgo zla ba'i tshes bco lnga'i nyin mjug rdzogs par byas te 'thad pa dang lung dang ma 'gal bar bkas bcad kyi tshul du gtan la phab pa'o // [KB .11.15b5-16a2]

10人<sup>66</sup>のバイリンガル国師達が、昔の古い翻訳や教典の意趣を良く考察して、大清国の乾隆6年である辛酉年（1741）の昴宿（10）月の勝日と木曜日の二つが重なった〔昴宿月

<sup>64</sup> St.P Ca. pp. 426-427.

<sup>65</sup> 詳しくは、「第2節『賢者の源』の成立事情」で後述する。

<sup>66</sup> KBやMGOにおいて、10人と明確に書いているが、実際に奥書において翻訳協力者として25名が挙げられているので、ここでの10人とは、具体的に10人を指しているのではなく、単に複数の意味であろう。

の] 中日に開始し、乾隆7年の壬戌年（1742）の觜宿（11）月の日である最終日に完成させて、論理と経典とに矛盾しないように、欽定（Tib. bkas bcad, Mong. jarliḡ jarčimlaqu）で決めたものである。<sup>67</sup>

これによれば、本書は、チャンキヤ・ルルペードルジェおよび補佐をしたロサン・テンペーニマ（1689-1746）<sup>68</sup>により1741年にチベット語で著作されたことがわかる。

『賢者の源』のモンゴル語訳は、その一年後の1742年に刊行された。また、チャンキヤ・ルルペードルジェは、清朝の乾隆帝の勅令によって、テンギユル全体をモンゴル語に翻訳して開版した<sup>69</sup>と云われている。モンゴル語訳テンギユル（1749）の目録巻御製序文には、乾隆帝自身の言葉として以下のように説かれている。

edüge ene orčiyluysan olan nom-ud-un ünen üge gün narin udqa-yi erten-ü čay-un ulamjilan delgeregülgösen blam-a baysi nar ɣajar orun tus tus-un kelen-ü erkeber üge udqa-a čöm neyilelčekü qamiy-a aqu, edügeki güüsi blam-a nar orčiylulqui-dur mön kü öber öber-ün ɣajar öbermiče-yin tulada, üge udqa-a sayitur neyileldüküy-e berke. eyimü-yin tula, šasin-i ündüsülegči tügemel sayin tangsuy nigülesküi-tü yeke ulus-un baysi jangkiy-a qutuɣtu tan-dur tusiyaɣu, angqan-a dokiyan-u šastir nayiraɣulun jokiyaɣad, tangɣud danjur nom-un üge-yi būrin-e mongɣul kelen-dür baɣulyaɣu, qarilčan mayadlaɣu todarqayilaɣu nigen adali ilerkey-e bolɣaɣad, tayilburi udqa-a neyilelčegsen-ü qoyina, sanayan jiyalta öbesüben nayiralduysan tulada, orčiylulqui-dur dulduyidqu sitükü ɣajar olqu böged ungsiqui-dur neng tasiyaraqū jöričekü yabudal ügei bolumui. [GD. Ca. 御製序文（乾隆帝）2a1-2b1]

さて、この翻訳された多数の〔仏〕法の深甚にして微細な内容の真実の言葉を往時より継承して、布教した諸々のラマや善知識が各地域の言語に依って〔翻訳しており、彼らの〕

<sup>67</sup> MGO.11.26b2-27a1: tel kelen-i ögülegči arban güüši-nügüd-ber erten-ü qaɣučin orčiylulɣa ba sayin jarliḡ-un taɣalal-i sayitur sinjilejü dayičing ulus-un tngri-yin tedkügsen-ü jirɣuduyar on temür em-e takiy-a jil-ün kirdig sar-a-yin bus braqasbadi qoyar tokiyalduysan sayin edür-e ekileged doluduyar on usun er-e noqai jil-ün mergesir sar-a-yin arban tabun-u sayin edür-e tegüskejü uduriɣulsun kiged jökistu uqaɣan-ača qaɣačaɣulul ügegüy-e jarliḡ jarčimlaqu-yin yosuɣar nota-dur baɣulyabai.

<sup>68</sup> Tib. khri chen sprul pa'i sku blo bzang bstan pa'i nyi ma dpal bzang po, Mong. gildan siregetü qutuɣtu blo-bjang bstan-pa'i nyima sayin čoytu-yin gegen.

<sup>69</sup> GD Ca. 御製序文（乾隆帝）2b9-16、福田、石濱（1986）p.107では、チベット語原文の北京版テンギユル（1724）は、最初の本版テンギユルである。この版の原本は、プトゥンが整理・編集したシャル寺本を、ダライラマ5世の没後、その死を隠していた摂政サンギェー・ギャムツォ（sangs rgyas rgya mtsho 1653-1703）が、他の写本テンギユルと比較校訂・増補したもので、附されている目録もダライラマ5世の名を借りて、摂政が1688年に書いたものである。目録部一巻を合わせて計225巻である。今枝1989, pp. 334-338.

言葉・内容のすべてが一致することがどうしてあろうか。現に、国師やラマ達の翻訳における〔言語は〕、各地域の特色のため、言葉・内容が一致し難いのである。それ故に、宗教の先駆者で、最上の慈悲を持つ偉大なる国師チャンキャ・ホタクト様に命令し、まず〔正〕字の論書を著作して、チベット〔語の〕テンギユルの言葉をすべてモンゴル語に翻訳し、〔言葉を〕照らし合わせて、〔言葉を〕定義付け、統一を明確にして、注釈内容と一致させることによって、その意図や指標が次第に一致してゆくので、翻訳の際に依拠する対象〔であるこの『賢者の源』〕ができて、読解に際しても取違い・きまりに背くことが無くなる。

この序文によれば、従来仏典は、諸々のラマが自らの地域の言語に依って翻訳していた。実際に、その翻訳語には、同じモンゴル語でもそれぞれの地域ごとの方言の差があるので、必ずしも表現・内容が一致しない。このような現状を打開するために、乾隆帝はチャンキャ・ホタクトに命令<sup>70</sup>して、『賢者の源』が執筆されたという成立事情が見て取れる。

著者のチャンキャ3世は、乾隆帝と施主・帰依処の関係を結んだ高僧である。モンゴルの王侯とチベットの高僧の間には、施主・帰依処 (Tib. *yon mchod: yon bdag dang mchod gnas*) 関係<sup>71</sup>が結ばれてきたことはよく知られている。このように施主・帰依処の関係を結ぶ伝統が、フビライ・ハーンとパクパ、アルタン・ハーンとダライラマ3世ソナムギャムツォというように、元朝時代から続いてきた。その清朝のルーツは元朝であり、従ってモンゴル大ハーンの継承が清朝皇帝の根拠であったため、乾隆帝もその伝統を受け、チャンキャ3世からチャクラ・サンヴァラ灌頂を授かり、自らを転輪聖王として宣伝する。それは、チベット仏教世界との関係を改善するといった政治的な背景・目的を持っていたこともあり<sup>72</sup>ながら、やはり過去の伝統を継承して、同時代の人物であるチャンキャ3世と施主・帰依処の関係を結ぼうとしたことを示している。

施主・帰依処の関係は、過去の伝統を継承して同様な行動をとるチベット＝モンゴル仏教の伝統の一例であるが、それと同様に、チベット語訳大蔵経を作成する際に『二巻本訳語釈』が

<sup>70</sup> 『賢者の源』が皇帝の命令で著されたことの意義は、後述する。

<sup>71</sup> その関係でモンゴルからチベットにもたらされる財貨は、チベットにおいて寺廟の建立や大蔵経の開版等の仏教的活動を活発化させていた。王侯とチベットの高僧が施主・帰依処関係を結ぶ伝統が、モンゴル帝国の政治的な体制を受けた清朝の皇帝たちによって受け継がれたため、乾隆帝とチャンキャ・ルルペードルジェもまた施主・帰依処関係を結んだのである。清朝がユーラシア東部で大きな影響力を維持したのは、清朝皇帝が、文殊菩薩の化身や仏教を護持する転輪聖王として認められるというような、いわゆるチベット仏教の保護者・施主としてチベット仏教世界の枠組みに入ったことが大きな要因であったとされている。石濱 (2001) 参照。

<sup>72</sup> 石濱 (2011) pp.168-187.

著作された伝統に倣い、モンゴル語訳大蔵経が作成される際に『賢者の源』も著作された、という仮説を立てることができる。

次にチャンキャ自身の証言を見てみよう。『賢者の源』の序文には以下のように述べられている。

nye lam bka' yi dgongs 'grel gyi bstan bcos 'gyur ro cog hor gyi skad du bsgyur te spar du bskrun  
dgos tshul gyi bka' phabs par brten/ bka' spyi bos blangs te bsgyur ba la nye bar zhugs so/ /de la yang  
chen po hor gyi yul gru so so'i skad kyi byings 'dra yang / zur cung zad tsam re mi 'dra ba mang zhing  
/ khyad par du chos bsgyur ba'i ming brda' 'dogs tshul bkas bcad 'dra ba zhig mi 'dug pas/ lo tstsha ba  
du mas so so rang rang gi 'dod pas tha snyad mi mthun pa sna tshogs sbyar tshe thos bsam byed pa  
rnams kyis rtogs dka' ba sogs nyes pa du ma'i gzhir 'gyur pas gsung rab kyi ming brda'i tha snyad 'dogs  
lugs rags bsdus zhig sbyar nas du bsgrubs te/ kun la khyab par byas na legs tshul zhus par de ltar gyis  
zhig pa'i bka' stsal ba spyi bos mnos te/ tshul de 'god par bya ba la/ [KB .1.10b4-11a3] <sup>73</sup>

近日、仏説の註釈である論書の〔チベット語への〕翻訳全集（＝テンギユル）をモンゴル語に翻訳し、出版する必要があるとの勅令が下されたことに基づき、その勅令を押し戴いて拝受して翻訳する作業を開始した。それについても、大モンゴルという国のそれぞれの地域は言語の基本（skad kyi byings）は同じであるが、部分的には異なるものが多く、とくに仏典翻訳の語彙を形成する仕方は〔チベットの〕欽定決定訳語の様なものが存在しないので、多くの翻訳師が各々好きなように異なる様々な〔訳〕語を用いる時、聞思する者たちが理解しがたいことなど、多くの過失のもととなるので、教典の語彙の命名の仕方〔の規則〕をおおまかに編纂して、〔モンゴル〕全〔土〕に広めたら良いのではと〔私が皇帝陛下に〕申し上げたところ、「そのようにせよ」との勅令を頂戴した。〔そこで〕その規則を〔以下に〕提示しよう……。

<sup>73</sup> MGO.1.16b2-17a3: edüge jarliḡ-un tayalal-i tayiluḡsan sasdir bügüde-yi mongḡul-un kelen-dür orčiḡulju kebtür bütügekü kereḡtei kemen jarliḡ bayuḡayḡsan-dur sitüjü, jarliḡ-i orui-bar abču orčiḡulqui-dur čiqula orubai, tegün-dür-ber yeke oor mongḡul-un tus tus orun-u üge-yin ḡool adali bolbasu-bar öñčög öčüken tedüi adali busu olan, ilangḡui-a nom-i orčiḡulqui-dur ner-e dokiy-a nereyidküi yosun-i čayaḡalan toyḡayḡsan metü nigen ügei-yin tula, olan kelemürči-ner öber öber-ün joriḡ-iyar eldeb jüil ülü jokilduqu nereyidkel nayirayulbasu sonusqui sedkiküi-yi tayalayčid-ta medeküi-e berke terigüten olan gem-ün orun bolqu-yin tula sayin jarliḡ-un ner-e dokiyān-u nereyidkel-i nereyidküi yosun büdügübčilen quriyayḡsan nigen-i nayirayulju keb seyilüged, qotala-dur tügegen üiledbesü sayin aḡayḡ kemen ayiladqayḡsan-dur tere metü üiledtügei kemekü jarliḡ bayuḡayḡsan-i orui-bar abču, tere-kü yosun-i nayirayulun üiledküi-dür,

この引用からはまず、仏法の翻訳語彙を設定する欽定決定訳語 (Tib. bkas bcad, Mong. čayaǰalan toytaǰaysan) が存在しないので、それを作成したいとチャンキヤ・ルルペードルジェが乾隆帝に上奏したことが分かる。つまり、モンゴル語訳テンギユルの編纂をきっかけとして、『賢者の源』が著作された事情を読み取ることができる。それは、乾隆帝の序文から読み取ることができる時系列である「1. 種々の不統一なモンゴル語訳仏典 → 2. 「正字の論書」即ち『賢者の源』の成立 → 3. 『賢者の源』に基づく従来の翻訳を統一的に改訳したテンギユルの成立」という一般に知られる順序とは異なる現実である

1. テンギユルの編集作業
- 2. 仏典モンゴル語訳の不統一
- 3. 『賢者の源』の成立

という順序である。このような成立事情は、『賢者の源』の内容が、経典ではなく論書に則したのものになっている理由を示してもいる。すなわち、テンギユルの編纂作業中に現れたことにより、『賢者の源』が論書を理解するための語彙集となっているのである。

### 第3節 『賢者の源』の文献的背景

次に、『賢者の源』が典拠とする文献、『賢者の源』の文献的背景となるものを見ていこう。

『賢者の源』は、インド原典からのチベット語仏典翻訳史上で作られてきた名義集の伝統を継承する。実際、チャンキヤは、上の引用文の直後に、チベットにおける一連の文法書や名義集を列挙している。

1. トウンミ・サンボタ<sup>74</sup>により著作された『三十頌』
2. トウンミ・サンボタの『性入法』<sup>75</sup>
3. ティ・レルパチェン (742-797)<sup>76</sup>の時代に翻訳者、パンディタ達が翻訳方法の法定書として著作した『二卷本訳語釈』<sup>77</sup>
4. カ・チョクシャン<sup>78</sup>つまりカワペルツェク、チョクロルーイギヤルツェン、シャンイエシエ

<sup>74</sup> Tib. thon mi sambho Ta, Mong. tonmi sambota.

<sup>75</sup> Tib. sum cu pa, Mong. sumju-ba 『三十頌』については、大谷 No. 5834 [ngo. 38a3-39a8]、東北 No. 4348 [co. 160b1-160b4]、BDRC No. W22704 [37a-38b]、Tib. rtags kyi 'jug pa, Mong. rtags kyi 'jug-ba 『性入法』については、大谷 No. 5835 [ngo. 39a8-40b5]、東北 No. 4349 [1fols. co. 161b4-162b7]、BDRC No. W1PD95844, W1GS66030, W23703.

<sup>76</sup> Tib. khri ral pa can, Mong. üsün sandalitu qayan.

<sup>77</sup> Tib. sgra sbyor bam gnyis, Mong. daγun-u nayiral 『二卷本訳語釈』については、大谷 No. 5833 [38 fols. ngo. 1-38a3]、東北 No. 4347 [30 fols. co. 131b1-160a7]、活字本 BDRC No. W1KG22296, 278p.

<sup>78</sup> Tib. ka cog zhang gsum.

- デ<sup>79</sup>を始めとする翻訳者達による経典に出てくる語彙の分類の広である『翻訳名義大集』
5. カ・チョグの始めとする翻訳者達による経典に出てくる語彙の分類の略である『翻訳名義小集』<sup>80</sup>
  6. ションヌペル (1392-1481?)<sup>81</sup>の『正字法・百の光』<sup>82</sup>
  7. プトン・センゲウ (14世紀)<sup>83</sup>『声義の海の鏡』<sup>84</sup>
  8. チャンパリンパ (1401-1475)<sup>85</sup>の『言莊嚴』<sup>86</sup>
  9. サムディンパ<sup>87</sup>の『錯乱の断』<sup>88</sup>
  10. シャル大翻訳者 (1441-1527)<sup>89</sup>の『宝の箱』<sup>90</sup>
  11. ペルカン翻訳者 (1456-?)<sup>91</sup>の『言語の灯』<sup>92</sup>
  12. 新旧訳語の分類を提示したキョクトン<sup>93</sup>の『丁子の天幕の家』<sup>94</sup>
  13. ウパロサル<sup>95</sup>が著作した〔『新旧訳語の分類』〕<sup>96</sup>

<sup>79</sup> Tib. ska ba dpal brtsegs, chog ro klu'i rgyal mtshan, zhang ye shes sde.

<sup>80</sup> Tib. bye brag rtogs byed che chung, Mong. ilyal onuyuluyçi yeke bay-a 『翻訳名義大集』 『翻訳名義小集』の二書。

『翻訳名義大集』については、大谷 No.5832 [107 fols. ngo. 204b7-310a8]、東北 No.4346 [131 fols. co. 1b1-131a4]

<sup>81</sup> Tib. stag ston gzahons nu dpal, Mong. stag bayisi kumar-a-siri. 不詳

<sup>82</sup> Tib. dag yig 'od zer brgya pa, Mong. dag-yig jayun gereltü.

<sup>83</sup> Tib. bu ston seng ge 'od, Mong. bu-ston arslan gereltü. 不詳

<sup>84</sup> Tib. sgra don rgya mtsho'i me long, Mong. dayun-u udqas-un dalai-yin toli. 不詳

<sup>85</sup> Tib. byams pa gling pa, Mong. byams-pa gling-pa、本名は bsod nams rnam rgyal.

<sup>86</sup> Tib. smra rgyan, Mong. ögülekün-ü čimeg チベット語での正式名は brda'i bye brag rnam par phyed ba'i tshig le'ur byas pa smra ba'i rgyan である。BDRC No.W1CZ1884 ウメー体の 39 fols.

<sup>87</sup> Tib. bsam ldings pa, Mong. bsamlding-pa. 不詳

<sup>88</sup> Tib. 'khrul spong, Mong. endegürel-i tebčigči. 不詳

<sup>89</sup> Tib. zha lu lo chen, Mong. zhalu kelemürči 本名は、zha lu lo tsA ba rin chen chos skyong bzang po である。

<sup>90</sup> Tib. za ma tog, Mong. erdeni-yin qayurčay, 正式題名は bod kyi brda'i bstan bcos legs par bshad pa rin po che'i za ma tog bkod pa である。活字本の 65pp. BDRC No.W1KG23488.

<sup>91</sup> Tib. dpal khang lo tsasha ba, Mong. dpalkhang kelemürči、著者本名は、dpal khang lo tsA ba ngag dbang chos kyi rgya mtsho.

<sup>92</sup> Tib. ngag sgron, Mong. kelen-ü jula、正式題名は bod kyi brda sprod ngag sgron gyi rtsa ba である。ウチェン体 76 fols. BDRC No.W1CZ872.

<sup>93</sup> Tib. skyogs ston=skyob pa'i skul tshig, Mong. skyogs bayisi.

<sup>94</sup> Tib. li shi gur khang, Mong. liši-yin ger bayising. 御牧 (1990) p.17 によれば、skyogs ston は rin chen bkra shis であり、シャル大翻訳者『宝の箱』(典籍の『宝の箱』に当たる)によれば著者のフルネームは、skyogs ston lo tsA ba ngag dbang rin chen bkra shis である。活字本の 151pp. BDRC No.W1KG14678, 活字本の 27pp. W25159(pp.397-424). 活字本の 24pp. W12486 は、御牧 (1990) p.21 注 12 にあげている『丁香帳』北京民族出版社 1981 である。

<sup>95</sup> Tib. dbus pa blo gsal, Mong. dbus pa blo gsal.

<sup>96</sup> 大谷蔵外 No. 13987 (Tib. brda gsar rnying gi rnam par dbye ba = ウメー体の 17 fols. BDRC No.W1KG12170)

14. ロデンシェーラブ (1059-1109) <sup>97</sup>の『必須語要約』<sup>98</sup>

以上の14の文献<sup>99</sup>が、チャンキャが『賢者の源』を著作する上で前提としているものである。そのうち、『二卷本訳語釈』から直接影響を受けていることが、『二卷本訳語釈』と『賢者の源』の序論を比較すると容易に分かる。『二卷本訳語釈』の序文には、サンスクリットからチベット語への翻訳規則が説明され、『賢者の源』の序論において、チベット語からモンゴル語への翻訳規則が述べられ、両者の序論での記述が相似している。では、『二卷本訳語釈』から『賢者の源』が何を引いたかを次に考察する。

#### 第4節 『賢者の源』における『二卷本訳語釈』と共通・不共通な翻訳規則

『賢者の源』の翻訳規則には16の項目がある。そのうち、『二卷本訳語釈』と共通なのは、5項目である。石川(1993)は、『二卷本訳語釈』における翻訳規定を9つに分けており、順次訳と非順次訳を別々に数えているが、この二つを「順次訳・非順次訳」の1と数え、筆者は『二卷本訳語釈』における翻訳論を8つに分けた。そして、『賢者の源』の翻訳論をSainbileg(2016)は16に分けているのを参考にした。『賢者の源』の翻訳規定について北村(2007、2008、2010)<sup>100</sup>がある。欧米系の現代の翻訳論との比較考察、評価をしながら翻訳規定を含む『賢者の源』の序論を和訳している。しかし、彼の論文のヒントが、筆者が扱っている研究とは少し違うので、先行研究として言及する程度にする。

それぞれの異なる部分と同義の部分の明白にするために、『二卷本訳語釈』の規則と『賢者の源』の記述の対照できる箇所1から5を図表で示し、『賢者の源』において増書された部分について増1から増11とに番号を振り、それぞれ内容に則した題名を付けた。『賢者の源』に

<sup>97</sup> Tib. blo ldan shes rab, Mong. blo ldan shesrab. 著者本名は、rngog lo tsA ba blo ldan shes rab.

<sup>98</sup> Tib. nyer mkho bsdus pa, Mong. quriyangyui čiqula keregten 正式題名は、dag yig nyer mkho bsdus pa shAkya'i dge slong blo ldan shes rab kyis mdzad paである。58pp.の手書きノートBDRC No.W8LS17835、ウチェン体の9 fols. W1PD89051(Vol.1, pp. 93-110)

<sup>99</sup> 典拠とする文献の1から5はチベット人が著したにも関わらず、テンギェルに収録されている。

<sup>100</sup> 北村彰秀(2007)「東洋の翻訳論 一蔵モ対訳『学者基本典』から」ウランバートル、北村彰秀(2008)「続 東洋の翻訳論 一学者基本典を中心として」ウランバートル、北村彰秀(2010)「東洋の翻訳論 III 一蔵モ対訳『学者基本典』を出発点として」ウランバートル。北村は、聖書をモンゴル語に翻訳したので仏典の翻訳論として『賢者の源』に出会えたようである。



おける文章順で言えば、1.から 4.、増 1 から増 11、5.といった順に番号を付けた。チベット原文に和訳をつけ、モンゴル語の訳文は注記に示した。

- ① 『二卷本訳語釈』 → GB [ACIP TD04347(eTB)]
- ② モンゴル語訳『二卷本訳語釈』 → DN [DN.2b1-5a11]
- ③ 『賢者の源』 → KB [KB .1.12a5-1.15a4]
- ④ 蔵蒙『賢者の源』 → MGO [MGO.1.19a1-1.23b1]

『二卷本訳語釈』と『賢者の源』に共通する翻訳規則 表(1)

GB, DN	KB, MGO
<p><b>1. 順次訳・非順次訳</b></p> <p>原文の語順通りに訳して通じるものは、順次訳にする。非順次訳は原文の語順通りに訳すと意味が通じ難い時に許される。韻文の場合は、一偈頌の範囲内のみで単語の順序を入れ替えてよく、散文の場合は、文脈上での検討のもとで単語の順序の入れ替えが許されるが、なるべく順次訳するのがよい。</p>	
<p>dam pa'i chos bsgyur ba'i lugs ni don dang yang mi 'gal la bod skad la yang gar bde bar gyis shig dhrmam bsgyur ba la <u>rgya gar gyi skad kyi go rims las mi bsnor ba bod kyi skad du bsgyur na don dang tshig tu 'brel zhing bde na ma bsnor bar sgyur cig bsnor na bde zhing go ba bskyed pa cig yod na/ tshigs bcad la ni rtsa ba bzhi pa'am/ drug pa 'ang rung ste/ tshigs su bcad pa gcig gi nang na gang bde ba bsnor zhing sgyur cig rkyang pa la ni don gang bsnyegs pa yan chad kyi tshig dang don gnyis ka la gar bde bar bsnor zhing sgyur cig</u></p> <p>[GB. ] [DN.3b5-21]<sup>101</sup></p>	<p>de ltar phan yon dang nyes dmigs legs par nges par byas nas bsgyur tshul dngos la/ gzhung gi tshig rnams [CS.1.12b]bod skad kyi go rims ji lta ba bzhin du bsgyur <u>na hor skad la go bde zhing / don 'khrugs par mi 'gyur ba rnams ni de ji lta ba bzhin du bsgyur bar bya zhing / de lta ma yin par tshig gong 'og bsnor na don go ba gsal zhing brjod bde ba rnams ni tshigs bcad yin na shloo ka gcig gi nang du gang bde bar snor zhing bsgyur ba dang / tshig lhug pa rnams ni tshig gcig gam gnyis sam gsum sogs tshig de dag gi don gang du bsnyegs pa yan chad du gang bde bar snor zhing bsgyur bar bya/ 'on kyang don snga phyi 'khrugs par mi 'gyur ba gal che la/ de yang tshig de</u></p>

<sup>101</sup> degedü nom-i orčiγulqu-yin yosun kemebesü, udq-a luy-a ču ülü qarsilqu böged töbed-tür ču alin amur-iyar orčiγuluytun. dharm-a-yi orčiγulqu-dur enedkeg-ün kelen-ü üy-e jerge-eče solil ügegüy-e töbed-ün kelen-dür orčiγulbasu

<p>正法の訳し方は、意味とも矛盾せず、チベット語でも〔意味が通り〕易いものにしなさい、ダルマ(法)を訳す場合に、<u>インド語の順序を入れ替えず、チベット語に訳すなら意味と語句とが関連し、〔通り〕易いなら入れ替えずに訳しなさい。入れ替えるならば、〔通り〕易く理解を生じさせるものがあるなら、韻文では四句、あるいは六句〔に訳して〕もよくて、1偈頌の内でもやり易い方に入れ替えて訳しなさい。単一〔の散文〕では、意味が通じる限りの語句と意味の両者にとって〔通り〕易く入れ替えて訳しなさい。</u></p>	<p>ka'i nus pa 'don lugs la legs par brtags dgos so// [KB.1.12a5-12b3, MGO.1.19.a1-19b1<sup>102</sup>]</p> <p>そのように、利益・功德、過失〔であるか〕をよく確定してから、翻訳の方法そのものについて、典籍における諸々の語句をチベット語の順序の通りに訳せば、モンゴル語で理解し易く、意味が勘違いされない諸々は、それをその通りに訳すべきであり、そのようではなく前と後ろの語句を入れ換えるなら、意味の理解がはっきりして、通じ易いものは、韻文の場合は、一つの śloka (四行偈頌) 中で簡単に〔語句を〕入れ替えて訳し、また散文の場合は、一つ、二つ、三つなどの語句、それらの意味が通じる限りは、安易に入れ替えて訳すべきである。しかし、前後の意味を勘違いされないことが大事である。それもその〔前後〕両者の語句の力を発揮させる仕方をよく検討する必要がある。</p>
<p><b>2. 意識 (補説)</b></p> <p>チベット・モンゴル語に存在しないサンスクリットの接頭辞などをすべて翻訳してしまうと、意味上の役割が薄い余計な語彙が増えていくので、意味に関して差し障りが無い余計なものを省略する。『賢者の源』では言葉を補うことも認められている。</p>	
<p>don lhag par snyegs pa med pa rnam ni tshig gi lhad kyis</p>	<p>yang 'ga' zhis bod skad ji lta ba bzhin bsgyur na hor yig la tshig lhag ha cang mang bas don gyi cha bsgrigs pa lta bu yang mang du yod pas/ de la ni don la mi gnod par byas te tshig lhag rnam dor bas chog la/ skabs 'ga' zhis tu tshig</p>

udq-a üge inu barilduqu böged amur bögesü solil ügegüy-e orçiyuluytun. solibasü amur böged medel-i törügülkü nigen bögesü silüg-tür inu dörben baday-tu ba jiryuyan çu bolqu. nigen silüg-ün dotur-a bögesü ali amar bolqui-bar soliyad orçiyuluytun. dang-dur bögesü udq-a alin-dur güyicüküi-eçe degegsi üge udq-a qoyayula-dur ali amur-iyar soliyad orçiyuluytun.

<sup>102</sup> tere metü tusa erdem kiged gem aldai-i sayitur mayadlaju bodadu orçiyulqui yosun-anu, youl-un üges-i töbed kelen-ü üy-e jerge yambarçilan orçiyulbasu mongyul-un kelen-e medeküi-dür kilbar büged, udq-a ülü solicalduqu-nuyud-i terekü yosuyar orçiyuluyad, teyimü busu uridu qoyidu üge-yi soliyulbasu udq-a-anu toda medegdeged ögülekü kilbar-nuyud-i silüglegsen üge bolbasu nigen silüg-ün dotur-a ali amur-iyar soliyulju orçiyulqui kiged, ürgüljilegsen üges-i nigen üge ba qoyar ba yurban terigüten tedeger üges-ün udq-a alin[B.1.20a]-dur kürküi-eçe degegsi ali amur-iyar soliyulju orçiyuluydaqui. Teyin bolbaçu uridu qoyidu udq-a-yi ülü soliyulqu yeke kereg-tü büged, tere-çü tere-kü üge-yin çidal yarıyaqui yosun-i sayitur sinjilekü kereg-tü bolai.

<p>bsnan mi dgos kyis don bzhin du thogs shig [GB. ] [DN.4b8- 9<sup>103</sup>]</p> <p>意味が余計なもの に通じることがない ものは、語句を余計 に補う必要がなく、 意味通りに〔訳を〕 付けなさい。</p>	<p>zur cung zad re ma bsnan na don gyi nus pa mi rdzogs pa lta bu yang yod pas/ de la ni don gsal ba la phan zhing tshig ror ma song ba'i skad zur bsnan nas bsgyur bar bya'o// [KB. 1.12b3-5, MGO.1. 19b1-3 <sup>104</sup>]</p> <p>時として、チベット語を逐語訳するなら、モンゴルの文字にとって、 余計な文句が非常に多くなるので、意味にとって妨げるものも多くあ るので、それについては意味に害がないように、すなわち余計な語句を 省略して良い。ある場合に、少しの語句を足さなければ、意味〔を伝え る〕力が完璧ではないようなものもあるので、それについては、意味が はっきりすることに役立ち、ダメにならない少しの語を補って、翻訳す べきである。</p>
<p><b>3. 多義語の訳</b></p> <p>多義語は翻訳対応語が決まらない場合は、翻訳せずに原語を活用する。<sup>105</sup></p>	
<p><u>skad gcig la ming du mar 'dren pa ni ltag 'og dang bstun la gar</u> snyegs pa bzhin du ming thogs shig gau ta mya lta bu gau'i sgra las tshig dang/ phyogs dang/ sa dang/ 'od dang/ rdo rje dang/ ba lang dang/ mtho ris la sogs pa rnam ba du mar snyegs pa dang/ kau shi ka lta bu'i rtswa ku sha thogs pa dang/ mkhas pa dang/ pad+ma la dga' ba dang/ 'ug pa dang/ mdzod ldan la sogs pa'i sgra'i lugs las drangs shing bsgyur na sna grangs mang po zhig tu snyegs la/ bsgyur ba rnams gcig gi nang du ni sna grangs de kun 'dur yang mi btu ba ste/ <u>gcig tu chad par byar</u> <u>yang gtan tshigs chen po med pa rnams ni mi bsgyur bar rgya gar skad</u> <u>so na zhog cig gar yang drang du rung ba'i tshig byung na/ phyogs gcig</u></p>	<p><u>ming gcig don du ma la</u> <u>bsnyeg tu rung ba rnams ni ltag</u> [KB.1.13a] 'og la legs par brtags te/ phyogs gcig la thag gcod du rung na gar bsnyegs pa der bsgyur la/ thag gcod du mi rung shing hor skad la phyogs gnyi kar bsnyegs pa'i skad dod ma rnyed na ni <u>bod skad sor</u> <u>gnas su bzhag par bya'o/ /</u></p>

<sup>103</sup> udq-a ülemji kürtegel ügei-nügüd-i üge-yin ayas-iyar udqačılan nereyidügtün.

<sup>104</sup> basa jarim-dur tübed kelen-ü yosuγar orčiγulbasu mongγol üsüg-tür asuru ilegü üledejü udq-a-yin qubi-yi qalqalaqu metü-čü olan bui-yin tula, tegün-dür-inü udq-a-dur gem ülü bolqu-bar ilegü üges-i oγurču bolqu büged, jarim üy-e-dür üges-i öčüken ese nemebesü udq-a-yin čidal ülü büridkü metü-čü bui-yin tula, tegün-e udq-a-yi todurayulqu-dur tusa-tu büged öd ügei ülü bolqu üge öčüken nemejü orčiγuluγdaqui.

<sup>105</sup> 金岡 (1987b) pp. 144-145 は、仏典翻訳に際して、意識せず音写して借用する場合の、『賢者の源』の二つの方針は、『二卷本訳語釈』のものと、「若干異同を呈するのみで、思想的には同様のものである」と述べる。一つは、多義語の場合で、もう一つは、固有名詞の場合である。多義語の場合は、「翻訳という作業上の起点言語と目標言語の記号内容が一对一に対応しない場合は、あえて翻訳せずに音写によって借用せよとするものであり、固有名詞に関しては、「チベットやサンスクリットの原名を借用する技法」であると金岡 (1987b) pp. 136-142 で述べている。

<p>tu chad par mi bsgyur bar spyir snyegs su rung bar gyis shig [GB. ] [DN.3b21-4a12]<sup>106</sup></p> <p><u>一語を多くの名に導くことは、前後と一致させて通じるように名を付けなさい。ガウタマのようなものは、ガウという言葉に語句と方向と地と光と金剛（ダイヤモンド）と牛と〔輪廻における〕高い位など多種に通じるし、カウシカのようなものをクシャ草を持つ人と学者と蓮華を喜ぶ者、フクロウ、ザクロなどの言語の有り方から導いて訳すなら、多くの項目に通じる。それに対して、諸々の訳語を一つの内にその項目すべてを引っ付いてもまとまらない。すなわち、<u>一つに決定しようとしても〔決定する〕大きな理由がない者は、訳さずにインド語のままにしておきなさい。</u>いずれにも導ける語句が出てきたなら、一方に決定して訳さずに一般に通じ得るようにしなさい。</u></p>	<p>[KB.1.12b5-13a2] [MGO.1.19b3-20a1]<sup>107</sup></p> <p><u>単語一つで、たくさんの意味を持ち得るものは、前後をよく検討して、一方に決定できるなら、至り着くところのその〔意味〕に訳し、決定できずモンゴル語に両方〔の意味〕に至る対応語が見つからないならば、チベット語のままにしておくべきである。</u></p>
<p><b>4. 固有名詞の訳</b></p> <p>固有名詞は翻訳をすれば、理解し難くなるので、前後に何について言っているのかの称号を補って、原語をそのまま活用する。</p>	
<p><u>yul dang/ sems can dang/ me tog dang/ rtsi shing la sogs pa'i ming bsgyur na yid gol zhing tshig mi bde ba dang/ 'ol phyir bsgyur du rung ba don du de ltar yin nam ma yin gtol med pa rnams la/ mgo la yul zhe 'am/ me tog ces pa la sogs pa gang la bya ba'i ming gcig bla thabs su snon la rgya</u></p>	<p>yang paN grub dang rgyal blon la sogs pa'i gang zag gi ming dang yul dang me tog dang rtsi shing la sogs pa'i ming bsgyur na go dka' zhing tshig mi bde ba dang / 'ol spyir bsgyur du rung yang don de ltar yin min gtol med pa rnams la ni ming gi mgo mjug ji ltar rigs par paNTi ta dang rgyal po dang / me tog zhes sogs gang la bya ba'i ming gcig bla thabs su bsnan nas rgya gar skad dam bod skad</p>

<sup>106</sup> nigen üge-yi olan udq-a-dur tataqui-yi inu degedü dour-a-du luy-a tokiyaldyulqu kürtegele ali jökiq-yin yosuyar ner-e öggügtün. goo da ma kemekü metü-eçe goo-yin dayun inu üge kiged jüg ba ʔajar kiged genel ba vör kiged üker ba öndür iʔayur terigüten olan jüyil-dür kürteküi kiged goo ši ga kemekü metü gūša ebesün-i bariyçi kiged mergen ba badm-a-dur bayasuʔçi [4a] kiged sira sibayun kiged sang tegülde terigüten-ü ayalʔus-un yosun-dur tataʔad orçiʔulbasu olan jüyil-dür kürtemjitü böged orçiʔyuluysan-nuyud inu nigen-ü dotur-a olan jüyil tere bügüde quran ülü çidaqu buyu. nigen-dür tasulun üyiledbeçü yeke batu uçir siltayan ügei-nügüd-i orçiʔyulul ügegüy-e mön kü enedkeg kele-iyer talbiytun. qamiyasi ber tataʔu bolqu nigen üge bolbasu nigen jüg-tür tasurqai-bar orçiʔyulul ügegüy-e neyitü-dür kürtegel-tü bolqui-bar üyiledügtün

<sup>107</sup> nigen ner-e olan udq-a-dur oruqu-nuyud-i-inu uridu qoyidu-yi sayitur sinjileged, nigen-dür sigyidçü bolqu bügesü alin-a kürtekü tegün-dür orçiʔyuluyad, sigyidçü ülü bolqu büged mongyul kelen-e qoyar udq-a-dur oruqui ner-e ese oldabasu mün-kü töbed üge-ber talbiydaqui.

<p><u>gar skad so na zhog cig</u> [GB. ] [DN.4a13-22]<sup>108</sup></p> <p>国と有情と花と果実と樹などの名を訳すなら、心が迷乱し語句が〔通じ〕易くなく、大体に訳せて意味に関して、その通りであるかないか確実にないものについては、頭に国とか、<u>花など</u>という何について言っているのかの一つの<u>単語を上手く足してインド語のまま</u>にしておきなさい。</p>	<p><u>sor bzhag tu bzhag par bya'o/ /</u> [KB.13a2-4 ] [MGO.1.20a1-3]<sup>109</sup></p> <p>また、学者・行者と王・大臣などの人名と地名と花と果実と樹などの名前を訳すなら分かり難くくて、語句が簡単ではなく、大体に訳したとしても、その通りの意味であるかないかは確実にないものに関しては、単語の前後の適切などころに、<u>学者と王と花など</u>という何について言っているのかの一つの<u>単語を上手く足してインド語、チベット語のまま</u>にしておくべきである。</p>
<p><b>5. 造語の条件</b></p> <p>欽定訳語集にない単語の造語については、好き勝手に造るものではなく翻訳班で相談しあい定めるべきである。</p>	
<p>skad kyi lugs 'di ltar bkas bcad pa las so so nas su yang 'chos shing 'og tu ming gsar du 'dogs su mi gnang gis/ bsgyur ba dang 'chad pa'i grwa so so nas skad gsar du ming gdags dgos pa zhig yod na yang/ so so'i grwa grwar ming chad par ma gdags par chos kyi gzhung dang sgra'i lugs las ji skad du 'byung ba'i gtan tshigs dang/ chos la ji skad du gdags pa dpyad de/ pho brang du bcom ldan 'das kyi ring lugs kyi 'dun sa dang/ d+har+m+ma zhu chen 'tshal ba'i grwar phul la/ snyan du zhus</p>	<p>gzhan yang brda' sbyor gyi gzhung 'di dang gzhan dag tu ma 'byung ba'i brda' gsar du sbyor dgos pa byung na rang rang gi sar 'dod pas rang dgar mi 'dogs par bsgyur ba'i grwar gtugs te gzhung dang gtan tshigs dang mi 'gal bar bsgyur bar bya'o// [KB.1.15a3-4] [MGO.1.23a3-23b1] <sup>111</sup></p>

<sup>108</sup> orun kiged amitan ba sečig kiged ed modun terigüten-ü ner-e-yi orčiylu bögösü sedkil tögerikü böged üge inu amur busu ba yerü baru-yiyar orčiylun bolqu bolbaču udq-a inu tere metü mōn busu bolqui boljiy-a ügei-nügüd-tür ekin-dür inu orun kemekü buyu, sečig kemekü terigüten alind-dur ögülekü-yin nigen ner-e-yi jokimja-bar nemegeđ mon-kü enedkeg kelen-iyer talbiytun.

<sup>109</sup> basa bañđita siditen ba qaayan tūsimeł terigüten bodgalis-un ner-e kiged orun ba sečeg jimis modun terigüten-ü ner-e-yi orčiylu basu medekü berke büged ögülekü-e amur ügei bolqu ba, tayamuyłan orčiylju bolqu bügesü-čü udq-a tere metü mün busu-yin mayad ügei-nügüd-i ner-e-yin eki segül ali jokis-tu-dur bandida ba qaayan kiged, sečeg kemekü terigüten alin-a ögülekü nigen ner-e-yi nemejü mün-kü enedkeg ner-e buyu töbed ner-e-ber talbiydaqui.

<sup>111</sup> busu basa dokiy-a nayıraylu-yin yol ene kiged busud-a ese yaruyłan dokiy-a-yi sin-e nayıraylu keregtei bolbasu, öber öber-ün yaajar-a [B.1.23b] dur-abar joriy meden nereyidül ügegüi-e orčiylu-yin küriyen-dür tuljaju yol ba učir siltaayan-luy-a qarasilayulul ügegüi-e orčiyluydaqui.

<p>te bkas bcad nas skad kyi dkar chag gi dkyus su bsnan no / / [GB. ] [DN.4b24-5a11]<sup>110</sup></p> <p>〔訳〕語のこの流儀通りに欽定したものから別個に誰も改変し、後で名を新しく付けることを許可なさらなかったが、訳と講説の学堂それぞれにおいて新語で名付ける必要があるとしても、学堂ごとに名を決定して付けずに、法の典籍と言語の有り方に出てくる通りの論理と、法でどのように仮設されているかを伺察して、〈宮中世尊教義会議〉と〈ダルマ〔法〕主編集班〉に委ね、〔こちらから〕報告申し上げて、欽定してから〔訳〕語の目録の本文に補ったのである。</p>	<p>また、記号造語の典籍であるこれ（『賢者の源』）とその他〔の典籍〕に出てこない記号を新たに造語する必要が生じたなら、それぞれの地域で好き勝手に仮設せずに、翻訳班で打ち合わせ、典籍と論理とが矛盾しないように訳すべきである。</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

一般に、仏教文献のモンゴル語訳は、チベット語の順序に従った逐語訳になっている。その理由は、「1. 順次訳・非順次訳」の規則があったからだと思われる。上述したように、順次訳・非順次訳の規則は、なるべく順次翻訳を促す『二卷本訳語釈』と『賢者の源』に共通する翻訳規則である。このような状況は、『賢者の源』成立年代以前に仏典の翻訳規則の知識が知られていたことを意味している。さらに、『賢者の源』の特徴でもある『二卷本訳語釈』と共通しない翻訳規則を紹介していこう。以下は、増書の増1から増11の原文を伴う実際の内容である。

#### 増 1. 解釈・根本偈訳

gzhung chen mo'i 'grel pa rnams la rang rang gi rtsa ba'i dpe sngar bsgyur zin pa yod na 'grel pa'i  
nang gi rtsa ba'i tshig kyang de dang mthun par bya la/ med na sngon du rtsa ba'i dpe bsgyur zhing  
de yang 'grel pa la bstun nas bsgyur bar bya'o/

[KB.13a4-5] [MGO.1.20a3-20b1]<sup>112</sup>

<sup>110</sup> kelen-ü yosun-i ene metü toytayan çayajılaysan-aça yadan-a qoyin-a ken ber çu tus tus-tayan jasayad sin-e ner-e ögçü ülü bolumui. orçiyuluyçi kiged jasayçi tus tus-un ayımay-aça sin-e ner-e ögkü keregtü nigen bui bögesü çu tus tus-un ayımay ayımay tayan jasaçu ner-e ögkül [5a] ügegüy-e nom-un youl kiged ayalyus-un yosun-aça ker kemen çaryușan uçir siltayan kiged nom-dur ker kemen nereyidügsen-i sinjiljü ordu qarsi-dur ilaju tegüs nögçigsen-ü öni yosun-u qural-un çajar kiged dha rmma-yi yekede sigün ariyudqayçid-ud-tur ergüged, sonusqan öçijü toytan çayajalaysan kelen-ü, temdeg biçig-ün youl-dur nemeyü.

<sup>112</sup> 増 1. yeke youl-un tayilburi-nuyud-tur öber öber-ün uγ-un biçig-i urida orçiyulun dayusușan bui bolbasu tayilburi-un [B.1.20b] dotoraki uγ-un üges-i-çü tegün-lüge neyilegülün üiledküi büged, ügei bolbasu urida uγ-un biçig-i orçiyulqu

偉大な典籍の解釈について、それぞれの根本偈の以前に翻訳し終わった定本があるなら、注釈の中の根本偈の語句もそれと一致させるべきであって、ないならば、先に根本偈の定本を翻訳する。それも注釈に基づいて訳すべきである。

解釈に関しては、定本の古訳があれば注釈で用いる単語もそれに一致させる。なければ、先に定本を訳し、注釈の単語も合わせる。

## 増 2. 論争の訳

rgol phyir rgol gyi rtsod pa'i tshig rnams ni phan tshun gnyi ka'i bsam pa'i gdengs dang rtsod pa 'gro lugs legs par brtags te bsgrub ngag dang sun 'byin pa'i ngag rno zhing go bde ba'i tshig gis bsgyur dgos so//

[KB.13a5-13b1] [MGO.1.20b1-2]<sup>113</sup>

論者と後論者の論議の語句は、互いに両者の考えの元と論争の進み方をよく検討して、論証側の語と論駁側の語を鋭く、理解し易い語句で訳す必要がある。

論争は、論者や後論者の考えの元に注意を払いながら、論証側と論駁側を分かり易く翻訳する。

## 増 3. 感動詞の訳

gzhan yang bstod pa'i tshig dang / smad pa'i tshig dang / ngo mtshar ba'i tshig dang / skyo bar 'gyur ba'i tshig dang / 'jigs pa'i tshig lta bu rnams la ni/ hor skad du kun la grags pa nus pa che zhing yid 'khul btub pa skabs su babs pa'i tshig gis bsgyur bar bya'o// [KB.13b1-2] [MGO.1.20b2-3]<sup>114</sup>

---

büged tegüni-čü tayilburi-luy-a tokiyaldyulju orčiyuluḡdaqui.

<sup>113</sup> 増 2. esergülügči kiged qariḡulayči-un temečeküi-yin üges-i činadu inadu qoyayula-yin sanayan-u uy kiged temečel-ün yabuča-yi sayitur aḡiḡlaḡu bütügeküi üge kiged sögügeküi-yin üges-i qurča büged medeküi amur üges-iyer orčiyulqui kereg-tü bolai.

<sup>114</sup> 増 3. busu basa maytaqu-yin üge kiged, mayudqaqu-yin üge ba, ḡayiqaqu-yin üge kiged, uyidqarlaqu-yin üge ba, ayuqu-yin üge metüs-tür-inü, mongyul-un kelen-dur qotala-da aldarsiḡsan büged yeke čidal-tu sedkil-i ködelgen čidaqui-yi učir-tur kürügsen üges-iyer orčiyuluḡdaqui.

また、称赞の語句と非難の語句と驚きの語句と厭離の語句と恐れ of 語句のようなものについては、モンゴル語でみんなに知られ、〔影響〕力が強く、心を感激させることができる適宜な語句で訳すべきである。

称赞・非難・驚きの語句・厭離の語句・恐れ of 語句については、心に響くような感動させる語句で訳す。

#### 増 4. 原典の間違った説を訂正しない

gzhung gis don legs par ma shod pa'am log par bshad par mngon pa 'ga' zhig 'dug na'ang gzhung  
rtsom pa pos ji ltar brtsams pa ltar bsgyur bar bya yi/ gzhung gzhan gyi legs par bshad pa las blangs  
te 'chos par mi bya ste/ gal te de ltar byas na slob dpon rnams kyi lugs so so ba rnams 'khrug par 'gyur  
ba'i phyir ro/ / [KB.13b2-4] [MGO.1.20b3-21a2]<sup>115</sup>

典籍の意味を良く説明し得なかったか、あるいは間違って説明したことが明らかであるとしても典籍の著者が著作した通りに訳すべきだが、その他の典籍の善説から引いて校訂すべきでない。もし、そのようにしたなら、軌範師たちのそれぞれの流儀が入れ替わることになるからである。

原典の意味を説明できなかった部分、間違って説明した部分は、その通りに訳す。その他の典籍の正説から引用して訂正しないこと。なぜなら、軌範師たちのそれぞれの流儀が混乱するからである。

#### 増 5. 隠語の訳

gdams ngag gi gzhung rnams su lha dang rdzas dang grangs sogs kyi ming gab tshig gzhan gyis  
bstan pa rnams ni de ji lta ba bzhin bsgyur bar bya yi/ rang ming rjen par mi bsgyur te/ de ltar na gab  
pa'i dgos pa med par 'gyur ba'i phyir ro/ / [KB.1.13b4-5] [MGO.1.21a2-3]<sup>116</sup>

<sup>115</sup> 増 4. γoul-un udq-a jarim-ud-i sayitur nomlan ese čidayśan ba buruyu nomlaysan anu ilerkei-e bui bügesü-ber[B.1.21a] γoul-i jokiyayči yambar metü tuγurbiśyan yosuyar orčiγulumui j-e. Busu γoul-un sayin nomlal-ača abču jasan buu üiled, kerbe tere metü üiledbesü bayśi-nar-un yosun öber öber-e-kü-nügüd solilduqui bolqu-yin tula bolai.

<sup>116</sup> 増 5. ubadis-un γoul-nuγud-tur burqan kiged ed ba toy-a terigüten-ü ner-e-yi busu niγuγsan üge-ber üjügülügsen-



教えの諸典籍に天 (burhan 仏) と物と数などの名をその他隠語によって示したものは、その通りに翻訳すべきであり、本来の名前で翻訳してはならない。というのも隠した必要がなくなるからである。

隠語によって示したものは、その通りに翻訳する。本来の名前で翻訳してはならない。というのも隠した意味がなくなるからである。

#### 増 6. 修辞の訳

yang snyan dngags kyi skabs su mngon brjod kyi ming gis bstan pa bong bu la mgrin bzang zhes pa lta bu yang ming de nyid kiyis bsgyur bar bya yi rang ming gis mi bsgyur te/ gzhan du na mi mdzes par 'gyur ro// [KB.1.13b5-14a1] [MGO.1.21a3-21b1]<sup>117</sup>

また、詩学の場合に語彙学の単語で示されたロバについては「良い声を持つもの」というようなものも、その通りの単語で訳すべきである。本当の名前 (ロバ) で訳さない。さもないと、美しくないからである。

詩学の場合に語彙学の単語で示されたロバについては「良い声を持つもの」というようなものも、その通りの単語で訳すべきである。本当の名前 (ロバ) で訳しては、美しくないからである。

#### 増 7. 宗派思想区別訳

gzhan yang rtsa ba'i rnam shes dang kun gzhi zhes pa gnyis don bsnyegs pa'i gzhi phal cher gcig yin kyang phal chen sde pa dang sems tsam pa gnyis kiyis ming 'dogs lugs dang bshad tshul cung zad mi 'dra ba lta bu rnams kyang rang rang gi gzhang las ji ltar 'byung ba ltar bsgyur bar bya yi/ don gcig pa la bsams nas tha snyad phan tshun bsre bar mi bya'o// [KB.1.14a1-3] [MGO.1.21b1-2]<sup>118</sup>

---

nügüd-i-inü tegün-i yambar yosuṅar orčiyulun üiledümüi j-e, öber-ün čuqum ner-e-ber ülü orčiyulqu büged, teyimü bolbasu niyuṅsan-inu kereg ügei bolqu-yin tula bolai.

<sup>117</sup> 増 6. basa jokis-tu ayalyus-un učir-a ilete ögüleküi-yin ner-e-ber üjügülügšen eljigen-i sayin qoyolai-tu kemegsen metü-yi-čü mün-kü tere ner-e-ber orčiyulun üiledümüi j-e öber-ün ner-e[B.1.21b]-ber ülü orčiyulqu bülüge, busučar bolbasu jokis ügei bolqu-yin tula bolai.

<sup>118</sup> 増 7. busu basa iṅayur-un teyin medeküi kiged bükün-ü sitügen kemeküi qoyar-un udq-a kürteküi-yin orun niruṅun

さらにまた、根本識と阿頼耶識という二つは、意味が至る基体は大部分同一であっても大部分の部派と唯心派の二つは名前の仮設の仕方と説き方が少し異なるようなものをもそれぞれの典籍に出てくる通りに訳すべきであり、同一の意味であると考え、言葉を相互に混ぜるべきではない。

それぞれの学説は、典籍に出てくる通りに訳すべきである。学派の違いがあるから、相互に混ぜるべきではない。

#### 増 8. 中観の学説に基づく訳

yang bden par grub pa dang / rang gi mtshan nyid kyis grub pa gnyis dbu ma thal 'gyur ba ltar na don gcig pas gcig yong sar gcig shos su bsgyur chog pa'i skabs yod mod kyang / dbu ma rang rgyud pa ltar na de gnyis shin tu mi 'dra bas don gcig par byed mi rung ba lta bu yang mang bas/ legs par dpyad nas rang rang gi lugs ltar bsgyur shes dgos so// [KB.1.14a3-5] [MGO.1.21b3-22a1]<sup>119</sup>

また、真実なものとして成立しているものと、自らの特質によって成立しているものの二つは、中観帰謬派の通りなら、意味が同一であるので、一方がある場所にもう一方で訳して良い場合があるけれども、中観自立派の通りならその二つの意味は全く違うので、同義にすることはできないようなものも多いから、よく検討してそれぞれの流儀通りに訳すことを知る必要がある。

「真実なものとして成立しているもの」と「自らの特質によって成立しているもの」は、中観帰謬派の見解では同義のため、言い換えて翻訳することが可能であるが、中観自立派の見解ではこの二つは同義ではないので、同義に訳してはいけない。良く考察し、それぞれの学派の見解に合わせて訳す。

---

tayan nigen mün bolbaču olangki ayimay-tan kiged sedkil-ün tedüiten qoyar-bar ner-e nereyidküi-yin yosu kiged nomlaqu-yin yosun öcüken adali busu metü nuγud-i-ču öber öber-ün γoul-ača yambar metü nomlaγsan yosuγar orčiγulun üiledümüi j-e, nigen udq-a-tai kemen sedkiγü nereyidkel-i inayši činaysi qolin ülü üiledkü bolai.

<sup>119</sup> 増 8. basa ünen-iyer bütügsen kiged, öber-ün belge činar-iyar bütügsen qoyar ketüregülügči töb üjelten-ü yosuγar bügesü nigen udq-a-tu-yin tula nigen-i ireküi γajar-tur nöγüge-ber orčiγulju bolqu-yin učir bui bolbaču, öber-ün ündüsün-ü töb üjelten-ü yosuγar bügesü tere [B.1.22a] qoyar oγoyata adali busu-yin tula nigen udq-atai-a bolγaju ülü bolqu metü-ču olan-u tula, sayitur sinjileγü öber öber-ün yosuγar orčiγulqui-yi medeküi kereg-tei bolai.

増 9. 中観と他の学説の違いを考慮した訳

gzhan yang bdag med dang bden med gnyis kyang dbu ma pa ltar na 'gangs 'dra na yang / grub mtha' 'og ma'i skabs su chos thams cad bdag med par khas len kyang bden med du khas mi len pa sogs kyi khyad par 'gangs che ba rnams kyang phyed dgos te/ gzhan du na phyogs gcig la don gcig tu bshad pa mthong bas skabs thams cad du don gcig par bzung nas ma brtags par tha snyad phan tshun bsres na grub mtha' rnams kyi mi 'dra ba'i khyad par mtha' dag 'chol bar 'gyur ba'i phyir ro/ / [KB.1.14a5-14b2] [MGO.1. 22a1-3]<sup>120</sup>

さらにまた、無我・真実無の二つに関しても中観派の通りなら、芯が同じであるが、〔その他の〕下の学説の場合には、一切法無我と認めていても、真実無と認めないことなどの異なる大きな芯も区別する必要がある。さもないと、一方で同一の意味で説いたものが発見されたからと言って、すべての場合に同一の意味で捉えて、検討無しに言葉を相互に混ぜるなら、諸学説のすべての違いが混乱することになるからである。

無我・真実無（諦無）の二つに関しても、中観派は同じであると主張するが、〔その他の〕下の学説の場合には、一切法無我と認めていても、真実無と認めないなどの違いがあるので区別する必要がある。

増 10. 文脈を考慮した訳

gzhan yang grub pa/ bsgrubs pa/ 'grub pa/\_zhes dang / bcom/\_gzhom/ 'joms zhes pa lta bu 'das pa dang da ltar ba dang ma 'ongs pa'i tshig gi khyad par rnams dang / 'dis rnyed pa dang / 'di rnyed pa lta bu byed pa dang / las kyi sgras bstan pa'i khyad par dang / sangs rgyas kho na yon tan dang ldan zhes dang / sangs rgyas yon tan dang ldan pa kho na zhes pa lta bu kho na zhes pa'i sgra tshig gi gong 'og tu 'jug pa'i khyad par gyis gzhan ldan rnam gcod dang / mi ldan rnam gcod kyi tshig tu 'gyur tshul dang / 'phral ba zhes pa brda' gsar la so sor phye ba'i don la 'jug na'ang brda' rnying la dpral

<sup>120</sup> 増 9. busu basa bi ügei kiged ünen ügei qoyar-i-ču töb üjeltan-ü yosuṅar bügesü niruṅu-inu adali bolbaču, door-a-du toytaṅṅaṅsan taṅalaltan-u uçir-a qamuṅ nom-ud-i bi ügei kemen aman abubaču ünen ügei kemen aman ülü abqui terigüten-ü yeke keregtei ilyal-nuṅud-i-ču ilyaqu kereg-tü bülüge. busučar bolbasu nigen jüg-tür nigen udq-a-tai-a nomlaysan-i üjegsen-iyer qamuṅ uçir-a nigen udq-a-tu kemen barjü sinjilel ügegüi-e nereyidkel-i činaysi inaysi qolibasu toytaṅṅaṅsan taṅalaltan-nuṅud-un adali busu-yin ilyal bügüde solildaqu-yin tula bolai.

ba'i skad dod yin pa lta bu sogs mang du yod pa rnams legs par ltag 'og la brtags nas bsgyur dgos so/  
/[KB.1.14b2-5] [MGO.1. 22b1-23a1]<sup>121</sup>

また、成立した、成立しつつある、成立する。また、摧破した、摧破するだろう、摧破する（チベット語は Tib. bcom/ gzhom/ 'joms 過去・未来・現在、モンゴル語訳は Mong. Nögcigsen, edüge kiged iregedüi 過去・現在・未来の順である）というような過去・現在・未来の語句の違いと、「これが得た」、「これを得た」というような動作者と動作対象（Tib. las）音で示した違い（特徴）と、「仏のみが功德を持つ」ということと、「仏は功德を持つのみ」というような語句の前後に入るところの違いで、他が〔功德を〕持つことを否定し、〔仏が功德を〕持たないことを否定する語句になる有様、'phel ba とするものは新語では、別々に分けるという意味に当たるとしても、旧語では額の対応語であるようなことなどが多くあることを良く前後（文脈上）を検討して訳す必要がある。

動詞の完了、未完了、現在という変化の違い、動作主体と動作対象の違い、「のみ」というような限定辞の位置の違い、否定の意味の違い、旧訳語と新訳語の意味の違いなど、文脈を考慮して訳すべきである。

#### 増 11. 韻文・散文訳

gzhan yang hor skad la tshigs bcad dang lhug pa'i khyad par dang / tshigs bcad kyang rkang pa ring thung snyoms pa sogs bod skad ji lta ba bzhin mi 'byung na'ang tshigs su bcad pa rnams ni snyan 'jebes don rdzogs pa go sla ba rkang pa ring thung kyang phal cher snyoms pa bya zhing bstod pa dang gsol 'debs lta bu 'ga' zhig la hor skad la grags pa'i mgo mtshungs kyi rgyan lta bu byas kyang 'gal ba med la/ gzhung chen mo rnams la ni de ltar mi bya ste/ gzhan du na tshig lhag mang du 'jug pas don bsgrigs par 'gyur bas so// [KB.1.14b5-15a3] [MGO.1. 23a1-3]<sup>122</sup>

<sup>121</sup> 増 10. [B.1.22b] busu basa bütügßen, bütügseger, bütükü, kemeküi kiged, daruysan, darun, daruqu kemegsen metü nögcigsen ba edüge kiged iregedüi-yin üges-ün ilyal-nuyud kiged, egüber oluysan kiged, egün-i oluysan kemekü metü üiledügçi kiged, üile-yin dayu-bar üjügülügen ilyal kiged, imayta burqan erdem-lüge tegülde kemegsen kiged, burqan imayta erdem-lüge tegülde kemegsen metü imayta kemeküi ayalyu üges-ün deger-e door-a oruqu-yin ilyal-iyar busud tegülde-i teyinkü tasulqu kiged, tegülde busu-yi teyin-kü tasulqu-yin üge bolqu-yin yosun kiged, 'phral-ba kemegsen sine dokiyan-dur öber öber-e ilyaqu udqas-tur orubasu-bar qayučin dokiyan-dur mangnai kemeküi-yin ner-e mün metü terigüten olan bui-nuyud-i uridu qoyidu-yi sayitur [B.1.23a] sinjilejü orçiyulqu kereg-tü bolai.

<sup>122</sup> 増 11. busu basa mongyul-un kelen-dür silüglegßen kiged ürgüljilegßen-ü ilyal ba, silüg-tür-çü baday urtu oqor tegsi bolqu terigüten töbed-ün kelen yambarçilan ese bolbasu-bar silüglegßen-nügüd-i-inü irayu nayiratai udq-a tegüs medeküi-e kilbar baday-un urtu oqor-i-çu olangkin-i tegsi üiledkü büged maytayal kiged jalbaril metü jarim-ud-tur mongyul kelen-dur

また、モンゴル語での韻文、散文の違いと、韻文も詩句の長短の等しさなどは、チベット語の通りに現れなくても韻文は優美さ、意味の完全さが理解しやすく、詩句の長短も大部分等しくすべきであり、称賛と祈願のようなあるものについては、モンゴル語でよく知られた頭韻の修飾のようなものをして反することはないけれど、大典籍ではそのようにすべきではない。さもないと余計な語句が多く入ることによって意味を妨げることになるからである。

韻文は優美で、意味が完全にして理解しやすく、詩句の長短も大部分等しくすべきである。称賛と祈願については、モンゴル語でよく知られた頭韻の修飾を利用して反することはないけれど、膨大な典籍では簡略に訳すべきである。さもないと余計な語句が多くなり、意味が通り難くなるからである。

上述したように『賢者の源』の翻訳規定の中に『二巻本訳語釈』の翻訳規定と共通な翻訳規定が記載されている。それらの仏典の翻訳規定の知識そのものは、『賢者の源』にまとめられただけであって、その成立と同時に生まれたわけではない。『二巻本訳語釈』との比較によって明らかになる『賢者の源』の特徴とは、増7から9の三つであるが、特に翻訳規則の中の一一般論を除いた中観帰謬論派を頂点に置いたゲルク派独自の見解に基づいている「増8. 中観の学説に基づく訳」である。

## 第5節 『賢者の源』の内容

次に、『賢者の源』が直接影響を受けていると見られる『二巻本訳語釈』および『翻訳名義大集』の2つと『賢者の源』の内容を比較していこう。『二巻本訳語釈』は、インドからチベットへの仏教前伝期に書かれたので、仏典をサンスクリットからチベット語へ翻訳する欽定訳語集として作成されたものである。内容に関しては、インド仏教における語源解釈・単語分析や語の定義の仕方に基づき仏教用語を定義し、訳語を確定している。従って、語彙としては、語義解釈が必要となる重要な用語のみが取り上げられており、収録されている語彙数は少ない。

それに対し、『賢者の源』は、仏教用語の意味そのものより、概念相互の分類やヒエラルキーによる体系を規定している。すなわち、仏教思想におけるカテゴリーの構造を示している。

---

aldarsiyasın toluγai qolbuqu metü üiledbesüber qarsı ügei bolbaču, yeke γoul-nuγud-tur tere metü ülü üiledkü büged, busučar bolbasu olan ilegü üges oruγsan-iyar udq-a daldalaγdaqu-γin tula bolai.

単語の意味に関して別の語で定義することやその単語が何を意味するのかを示すことを目的としなかったことが伺われる点では、『翻訳名義大集』と共通な面を持つ。『翻訳名義大集』はその難語釈の『二巻本訳語釈』とは異なり、単語が列挙されており、サンスクリットからの訳語の確定なので、語義解釈は無いが、収録されている語彙数は非常に多い。

分類形式に関しては、『翻訳名義大集』は『二巻本訳語釈』と同じように類義語ごとに分類されている。例えば「仏の御名の異名」など用語の分野ごとに説明している。それに対して『賢者の源』は、学問の分野ごとに用語を解説しているという特徴がある。

『二巻本訳語釈』の序文においては、サンスクリット語からチベット語への翻訳の方法が説明されており、また古代チベット王国での翻訳史について略説されている<sup>123</sup>。『賢者の源』の場合は、『二巻本訳語釈』の成立年代から900年ほど離れているため、その翻訳規則がさらに増加し、また仏典翻訳に関する歴史<sup>124</sup>も長くなっている。本文についても、11章に分けられた『賢者の源』の構成は、先行する欽定訳語集である『二巻本訳語釈』の本文の構成とかなり異なっている。著者のチャンキャ・ルルペードルジェ自身が『賢者の源』の構成を示しているので、引用で見よう。

da ni gzhung don dngos la 'jug par bya ste/ de la gnyis/ rig pa'i gnas lnga so so'i gzhung bsgyur  
 ba la mkho ba'i ming gi rnam grangs bstan pa dang / thun mong la mkho ba'i brda' gsar rnying gi  
 dbye ba sogs bshad pa'o/ / dang po la lnga/ nang rig pa dang / gtan tshigs rig pa dang / sgra rig pa  
 dang / bzo rig pa dang / gso ba rig pa'i gzhung bsgyur ba la mkho ba'i ming gi rnam grangs bstan  
 pa' / / dang po la/ mtshan nyid kyi theg pa dang / sngags kyi theg pa gnyis las dang po la/ phar phyin  
 dang / dbu ma dang / mngon pa dang / 'dul ba dang / grub mtha' spyi'i gzhung bsgyur ba la mkho  
 ba'i ming gi rnam grangs bstan pa dang lnga las/<sup>125</sup> [KB .1.15a4-15b2]

<sup>123</sup> 石川 (1993) p.iii.

<sup>124</sup> KB .1.1a1-15a4; MGO.1.1a1-23b1; Jamyantübden, Joriγtu (1988), pp. 11-63.

<sup>125</sup> edüge bodadu γool-un udq-a-dur orun üiledkü büged, tegün-e qoyar, (A) tabun uqayan-u orun tus tus-un γool-i orçiyulqui-dur keregtü ner-e-yin jüil-i üjügülkü ba, (B) yerüde keregtü sin-e qayučin dokiyau ilyal terigüten-i nomlaqu bolai. urida-dur tabun, (A1) dotoyadu uqayan ba, (A2) uçir siltayan-u uqayan kiged, (A3) dayun-u uqayan ba, (A4) uralaqu uqayan kiged, (A5) tejšgeku uqayan-u γool-i orçiyulqui-dur keregtü ner-e-yin jüil-i üjügülkü bolai. uridu-dur, (A1a) belge çinar-un kölgen kiged, (A1b) tarni-yin kölgen qoyar-aça angq-a-dur, 1. baramid ba, 2. madhi-a-maga kiged, 3. abhi-a-dharma ba, 4. vinai-a kiged, 5. toytaγaysan taγalal neyite-yin γool-i orçiyulqui-dur keregtü ner-e-yin jüil-i üjügülküge tabun-aça...[MGO. 1. 23b1-3]

これから、典籍の内容〔解説〕そのものに入ろう。それに二つある。五明処それぞれ (so so) の典籍を訳すのに必要な名詞の同義異語を提示することと、〔五明処に〕共通して (thung mong la<sup>126</sup>) 必要な新旧語彙の分類などを説くことである。第一には五つある。内明、因明、声明、工巧明、医方明の典籍を訳すのに必要な名詞の同義異語を提示することである。第一には、性相乗 (顕教) と真言乗 (密教) の二つがあるうち、前者に般若、中観、アビダルマ、律、学説一般の典籍を訳すのに必要な名詞の同義異語を提示することの以上五つがあるうち、

引用内容を分かりやすく表現するならば、表(2)の通りである。それぞれ章の割合を明確に示し、どれくらいの量であるか分かるように章内容後にチベット原文 (KB) によるフォリオ数を入れた。

『賢者の源』における章構成 表(2)

(A)	(A1)	(A1a)	1. 般若部 (11 fols.)	第1章 菩提心と、大乘の成就と三智と大乘の加行、仏陀の身語意の功德などの名詞の同義異語は、般若部 <sup>127</sup> の箇所で見られる。
		&	2. 中観部 (9 fols.)	第2章 それと同様に、我執と悪見と二無我と空性の分類、十地、菩薩行である六波羅蜜、四摂事、菩薩の根本墮罪、悪作などは中観部 <sup>128</sup> の箇所で見られる。
		(A1b) 密教	3. アビダルマ部 (44 fols.)	第3章 四諦、十二縁起、五蘊、十八界、十二処、心心所、白・黒業及び果、煩惱の設定、器・有情世界、二十僧伽、三相、静慮・無色定、止観の区分などはアビダルマ部 <sup>129</sup> の箇所で見られる。

<sup>126</sup> この語は、直前の「各々 (so so)」と対比的に使用されている。即ち、第一の科段では、五明処各々 (個別的な) 用語解説、第二の科段では、五明処に共通して用いられている新旧の用語の解説である。

<sup>127</sup> Tib. phar phyin, KB .1.15b1-26a4; Mong. baramid-un ayimay, MGO.24a-40a.

<sup>128</sup> Tib. dbu ma, KB .2.1b1-10a5; Mong. madhy-a maga-yin ayimay, MGO.1a-16a.

<sup>129</sup> Tib. mngon pa, KB .3.1b1-44a1; Mong. abhi dharm-a-yin ayimay, MGO.1a-89a.

	4. 律部 (38 fols.)	第4章 別解脱八類の律儀の受け方、親教師と軌範師の設定、墮罪の設定、百一羯磨の分類など四十篇の類は律部 <sup>130</sup> の箇所で見られる。
	5. 学説部 (10 fols.)	第5章 外教の十二学説、内教の四学説の共通しない主張それぞれの名前は学説部 <sup>131</sup> の箇所で見られる。
	顕教と不共通の密教概念 (12 fols.)	第6章 秘密真言の四部タントラそれぞれの灌頂、誓願、律儀、タントラの分類、道の設定の類は真言部 <sup>132</sup> の箇所で見られる。
(A2) 因明	(11 fols.)	第7章 所知境の設定、能知である量と非量の分類、論者・後論者の論争法の類などは因明部 <sup>133</sup> で見られる。
(A3) 声明	(15 fols.)	第8章 声成立と読誦、アリカリの書き方、格助辞の入れ方などは声明部 <sup>134</sup> で見られる。
(A4) 工巧明	(11 fols.)	第9章 十八明処と天文曆算の類の名詞の同義異語は工巧明部 <sup>135</sup> で見られる。
(A5) 医方明	(14 fols.)	第10章 病気と薬と診察と延命法、身体を養生する類は医方明部 <sup>136</sup> で見られる。
(B) 新旧語彙	(15 fols.)	第11章 新旧語彙 <sup>137</sup> の設定は最終章で見べきである。

<sup>130</sup> Tib. 'dul ba, KB .4.1b1-39a1; Mong. vinai-yin ayimay, MGO.1a-65a.

<sup>131</sup> Tib. grub mtha, KB .5.1b1-11b2; Mong. toytaγaysan tayalal-un ayimay, MGO.1a-19a.

<sup>132</sup> Tib. sngags, KB .6.1b1-13a3; Mong. tarni-yin ayimay, MGO.1a-20a.

<sup>133</sup> Tib. gtan tshigs rig pa, KB .7.1b1-11a5; Mong. učir siltayan-u uqayan-u ayimay, MGO.1a-18a.

<sup>134</sup> Tib. sgra rig, KB .8.1b1-16a1; Mong. dayun-u uqayan-u ayimay, MGO.1a-27a.

<sup>135</sup> Tib. bzo ba rig pa, KB .9.1b1-12a1; Mong. uralaqui uqayan-u ayimay, MGO.1a-20a.

<sup>136</sup> Tib. gso ba rig pa, KB .10.1b1-15a4; Mong. tejigeküi uqayan-u ayimay, MGO.1a-30a.

<sup>137</sup> Tib. brda' gsar mying, KB .11.1b1-16a3; Mong. sine qayučin dokiyan-u ayimay, MGO.1-18b.



本文内容は、A 五明、B 新旧語彙の2つに大きく分かれ、五明は、A1 内明（仏教学）、A2 因明（論理学）、A3 声明、A4 工巧明、A5 医方明の5つに分類される。A1 内明は、a 顕教、b 密教に分かれるが、顕教と密教の共通する語彙として、1. 般若部、2. 中観部、3. アビダルマ部、4. 律部、5. 学説部が説かれる。さらに、密教には顕教と共通しない密教だけに限られる語彙も存在するので、もう1章の真言部が設けられたのである。

1.から4.までは、ゲルク派の5つの主要課題の内、因明を除く「四難解（dka' bzhi）」の科目である。ゲルク派の寺院では一般的に、1、2、4、3の順序で学習され、律の方がアビダルマより先に来る<sup>138</sup>。しかし、長尾（1992）p. 77f.によれば内モンゴルではアビダルマの学習の方が律より先に来ることになっており、本書の叙述順と一致する。現在、モンゴル国最大の僧院であるガンダン寺においてもこの順で学習することになっている。『賢者の源』の著者のチャンキヤは、グンルン寺出身の僧侶であり、グンルン寺はゴマン学堂を本山としていたので、ゴマン学堂の学統を継いでいると思われる。そのゴマン学堂では、他学堂で律をアビダルマより先に学習するのに対し、アビダルマを律の先に学習する<sup>139</sup>。

以上の通り、『賢者の源』の構成はゲルク派の、特に著者が学んだゴマン学堂の学習課程に依拠している。

それから、『賢者の源』における11章の中で特徴的なのは、学説部と新旧語彙<sup>140</sup>部を含むことである。『旧ナルタン』写本大蔵経<sup>141</sup>の監修者はウパロサル（14世紀）であるが、ウパロサルにも学説綱要書<sup>142</sup>と新旧語彙集の著作がある。この点で、チャンキヤとウパロサルに共通点が存在する。実際、チャンキヤは、ウパロサル著『新旧訳語の分類』<sup>143</sup>とキョクトン著『丁子の天幕の

<sup>138</sup> ゲシェー・ラブテン他（1984）pp. 64-65、山口（1988 下）pp.365-366、小野田（1989）p. 369。

<sup>139</sup> 西沢（2011）p. 624。

<sup>140</sup> ラルパチェン（ral pa chen, 在位 815-836）の時代、826年から827年の間に、カワペルツェク（ska ba dpal brtsegs）とチョクローイギャルツェン（cog ro klu'i rgyal mtshan）とシャンイエシエデ（zhang ye shes sde）を初めとする翻訳の専門家たちが、当時の中央部チベット語の形態に基づいて改訂した。これ以降を brda gsar pa と呼び、それ以前は brda rnying pa と呼ばれるようになった。詳しくは、御牧（1990）を参照。

<sup>141</sup> 最初のカンギユル・テンギユルは、元朝第四代仁宗ボヤント・ハーンの時代に確立された旧ナルタン版であることは序論において述べた。旧ナルタン版大蔵経の監修者であるウパロサルは、ナルタン寺にあった諸経に加えて諸方からオリジナルやコピーを蒐集して、カンギユルとテンギユルに分けて編集した。ボヤント・ハーンのラマであったジャムヤンバ（Mong. Jamyangba）は、自分の師匠であるチョムデン・リグレル（Tib. bCom ldan rig ral）や弟子のウパロサルが滞在されるナルタン寺へ墨・筆写具一式を初めとする贈り物を送って、大蔵経を確立するよう指示したという。御牧（1987）p. 281。旧ナルタン版に基づき、ツェル（Mong. tsalba）とシャル（Mong. šalu）版のカンギユル・テンギユルが確立された。Secenbilig S. (2017) pp.116-127. いずれも、旧ナルタン版と同様な写本集である。

<sup>142</sup> 学説綱要書とは、インド諸学派の思想を解説するものである。つまり、外教と仏教四学派（毘婆沙師・経量部・唯識派・中観派）に分けて解説する。なお、チャンキヤの『学説綱要書』そのものと違って、『賢者の源』には唯識部が欠落しているが、それについては学説部において触れられている。

<sup>143</sup> 御牧（1990）p.17f.は、「ウパロサル著『新旧語彙集』は、ウパロサルが旧ナルタン大蔵経確立の経験を通

家』を『賢者の源』の中で典拠として上げている<sup>144</sup>。このように、チャンキヤとウパロサルは、大蔵経監修者であり、学説綱要書を著作しただけではなく、新旧語彙の章を著作した点でも共通した役割を果たしていると言える。

## 小結

『二巻本訳語釈』と『賢者の源』は、仏教用語の欽定訳語を提示する目的で作成された。そのため、両者の成立事情も似ており、『賢者の源』は『二巻本訳語釈』をベースにして著作されたものである。これまでの研究では、両者の内容はさほど違わないと述べられていたが、ここで確認した通り、『二巻本訳語釈』に比べて、翻訳の方法論としては『賢者の源』の方が詳細である。

内容に関して『二巻本訳語釈』は、インドからチベットへの仏教前伝期に書かれたので、語義解釈が必要となる重要な用語のみを取り上げ、インド仏教における語源解釈・単語分析や語の定義の仕方に基づき仏教用語を定義し、訳語を確定する「難語釈」である。『賢者の源』は、仏教用語の意味そのものより、仏教思想におけるカテゴリーの構造を示しており、概念相互の分類やヒエラルキーによる体系を規定している。

『賢者の源』は、その単語が何を意味するのかを示すことを目的としなかった点では、『翻訳名義大集』と共通な面を持つ。

成立事情に関しては、『賢者の源』に基づいて従来のテンギユルの翻訳を統一的に改訳したのではなく、モンゴル語訳テンギユル成立をきっかけに『賢者の源』が成立したことを確認した。そのため、『賢者の源』の内容も構成も、カンギユル収録の経典翻訳より、論書集であるテンギユルの翻訳に向いていると言える。すなわち、『二巻本訳語釈』は「仏の御名の異名」など用語の分野ごとに説明している。それに対して『賢者の源』は、五明の分類を元にした構成であり、さらに学説綱要、新旧訳語を解説しているという特徴がある。その構成が『二巻本訳語釈』と離れているのは、時代背景と成立事情からである。ゲルク派の学問体系がその構成の基となっていると言える。

---

じて、大蔵経に収めるべき経典や論典の写本を蒐集した際に気づいた旧訳語彙と新訳語彙とを対比して書きとめておいたものであり、現存最古の新旧語彙集である」という。

<sup>144</sup> KB .1.11a3-11b4; MGO.1.17a3-17b3; Jāmyantūbden, Joriyū (1988) pp. 65-69. なお、御牧 (1990) は、ウパロサルの *brda gsar rnying gi nam par dbye ba* の本文 (764 語彙)、キョクトンの *brda gsar rnying gi khyad par li shi'i gur khang* (822 語彙)、チャンキヤ 3 世の『賢者の源』 (*dag yig mkhas pa'i 'byung gnas*) の新旧訳語の第 11 章 (832 語彙) と比較して、校訂している。

## 第4章 欽定蔵蒙訳語集『賢者の源』の訳語の有効性

—『菩提道次第大論』と『入菩薩行論』の訳語を中心として—

本章は、『賢者の源』の訳語の有効性を明らかにすることを目的とする。『賢者の源』の有効性とは、すでに翻訳された仏典に対して校正マニュアルとして影響力があったこと、および『賢者の源』成立後に翻訳された仏典に対して翻訳マニュアルとして影響力を発揮することができたことである。前述した通り、テンギユルのモンゴル語訳と『賢者の源』の執筆は並行して行われている。テンギユルは、チベット仏教において編集された論書集であり、その中の論書の多くは『賢者の源』成立以前にモンゴル語訳されていた。『賢者の源』の成立時点で、モンゴル語訳テンギユルは編集作業中だったため、そこに収録されるべきモンゴル語訳されていない論書も存在したはずである。前者を代表するチョイジ・オドセル (fl. 1305-1321)<sup>145</sup>訳『入菩薩行論』（『入行論』と略称する）とテンギユル収録『ツォンカバ全集』所収の訳『菩提道次第大論』の二つに対して、『賢者の源』が校正マニュアルとして機能したか否かを検討する。また、『賢者の源』成立以降のアギ寺訳『入行論』と『菩提道次第大論』における『賢者の源』の欽定訳語による訳語の統一の有無を調べることで『賢者の源』は校正マニュアルとして影響力を発揮することができたか否かを検討する。

『入行論』を資料に選んだ理由は、以下の2つである。

1) モンゴルに仏教をもたらしたのは、1246年にモンゴルへ訪れたサキヤ派の五祖<sup>146</sup>の一人であるサキヤ・パンディタである。12世紀の初期サキヤ派の学者達が中観思想を研究する際に主に依用したテキストは、龍樹の中観六理聚やアーリヤデーヴァの『四百論』、さらには、「中観自立東方三論」と称される自立派の三大論書（『二諦分別論』、『中観莊嚴論』、『中観光

<sup>145</sup> 訳者のチョイジ・オドセルは、元朝のボヤント・ハーン（在位 1311-1320）の時代に国師を務めていたことが『元史』などの歴史書から知られる。何（ウイグル・チベット・モンゴル）人であったかは不明であるが、サキヤ派の学問堂で学ばれた僧侶であったことは確かである。Цэрэнсодном Д. (1969) pp. 7, 14, 19. チョイジ・オドセルについて詳しくは、Kesigtoyoqu Č. (1998) *Mongyol-un erten-ü udq-a jokiyal-un sin-e sudulul. Kökeqota: 518 duyar tal-a.* 策・賀西格陶克陶『蒙古古典文学研究新論』呼和浩特（内蒙古人民出版社）、Булган Т. (2009) “XII зууны их эрдэмтэн Чойжэ-Одсэр” Улаанбаатар: Лам нарын сэтгүүл, Kesigtoyoqu Č. (2013)を参照。

<sup>146</sup> サキヤ派の五祖の中で、サチェン・クンガーニンポ (Sa chen Kun dga' sNying po 1092- 1158)、ソナムツェモ (bSod nams rtse mo 1142~1182)、タクパゲルツェン (Grags pa rgyal mtshan 1147-1216) は相継いでサキヤ派の座主を勤めたが、彼らは正式な出家者ではなく、サチェン・クンガーニンポとソナムツェモの二人にいたっては戒すらも受けたことがない。タクパゲルツェンは居士戒を受けたが、正式な仏教の僧侶とは言えず、「白衣つまり俗人の三祖」と称されている。それに対し、サキヤ・パンディタとパクパ(Phags pa 1235-1280)は「赤衣二祖」とされるが、これは彼らが正式な僧侶であったからである。

明論』) やチャンドラキールティの『入中論』等の一連の中観論書ではなく、シャーンティデーヴァの『入行論』であった<sup>147</sup>。故に、チョイジ・オドセル訳『入行論』(1305)は、モンゴル仏教初期に行われた翻訳の一つであり、広く普及している仏典である。しかしながら、『賢者の源』の翻訳方針はゲルク派の教義を基にした規則となっている<sup>148</sup>ので、モンゴルへ仏教をもたらしたサキヤ派やカルマ派の時代に翻訳された仏典に適用可能であるのか疑問がある。また、注目したいのは、1749年にテンギユルを編集する際に、『入行論』を新たに翻訳せず古訳を用いた点である。それに対し蔵外文献の場合は、モンゴルで数多くの翻訳が現れる事例があった。例えば、ツオンカパ著『菩提道次第大論』には1655年から2007年にかけて7種のモンゴル語訳が現われ、サキヤ・パンディタ著『サキヤ・レクシェ』には8種のモンゴル語訳があったことが知られている。

2) 『菩提道次第大論』の中で、最も引用回数の多いインド仏典は『入行論』である。それについては後述する。

検討資料は、以下の通りである。

- ① チョイジ・オドセル訳『入行論』(1305)
- ② テンギユル収録『ツオンカパ全集』所収の訳『菩提道次第大論』(1730年代後半)
- ③ ロサンツェンペル訳『菩提道次第大論』(1812)
- ④ ガルサンジャンバ訳『菩提道次第大論』(1870)
- ⑤ アギ寺訳『入行論』(20世紀)<sup>149</sup>

チョイジ・オドセル訳『入行論』に関しては、先行研究が進んでいるため、それらの先行研究の成果を利用して、テンギユルへ入れる時の訂正のありさまを考察し、それが『賢者の源』によるものであったかどうかを検討する。その検討を通して、『賢者の源』の欽定訳語が、実際にテンギユルに反映していたか、それが果たして時間的に可能であったのかを推測する。モンゴル語訳テンギユル収録の訳『菩提道次第大論』に関しては、先行研究がない。その他のモンゴル語訳『菩提道次第大論』については研究もほとんど行われていない。そのため、それら7種の『菩提道次第大論』を並べて、『賢者の源』の欽定訳語が利用されたか考察する。

---

<sup>147</sup> 西沢(2020)要旨

<sup>148</sup> ボルマー(2020) pp. 180-186.

<sup>149</sup> Отгонбаатар P. (2019)は、古典モンゴル文字によるブリヤート版をキリル文字・古典モンゴル文字・チベット語訳の順で対比させたペチャ形式の出版である。

さらに、『菩提道次第大論』における『入行論』の引用文を通じて比較検討を行う。大蔵経のみならず一般の仏教文献の翻訳に対する『賢者の源』の影響力を測るため、『菩提道次第大論』の3種のモンゴル語訳と『入行論』の2種のモンゴル語訳における訳語の相違を調べ、そこに『賢者の源』の影響があるか否かを検討する。

## 第1節 先行研究概観と書誌情報

前述したように『入行論』は、モンゴルで広く普及しており、『入行論』の翻訳者のチョイジ・オドセルは、モンゴル語による『入行論』に対する注釈（BT）も著作している。そして、そのモンゴル語訳と注釈がモンゴルの各地で断片的に発見されたため、これまで文献学的な研究は多く行われてきた。写本ないし木版本、その他の断片の発見場所と研究者を文献の成立年代順に並べる。

- ① OS ← [39の断片による94偈の部分的な写本] 版本の成立は15世紀とされる。1939年に日本の東方文化学院の江上波夫を中心とする調査隊により内モンゴルのオロン・スム (Olun süm-e) から発掘されたものである。現在は横浜ユーラシア文化館に所蔵されている。
  - 服部四郎 (1940) 「オロンスム出土の蒙古文書について」『東方学報』 第11冊の2、pp. 257-278. ← その他のオロン寺からの発掘資料と共に和訳したが、彼は『入行論』の翻訳であることまで認識していない。
  - Romanized Ed. in Heissig (1976)
- ② L ← *Bodisung narun yabudal-dur oruqui neretü šastir*. [完本] 17世紀成立とされる、状態がきわめて良好な全訳写本である。所蔵地 The Library of Prof. Lokesh Chandra in New Delhi, No. L6 (30 Mong. Lines, 12×57 cm 56 fols.)
  - Printed in Chandra (1974)
- ③ M ← *Bodisung cary-a avatar-a-yin teyin böged nomlaqui tayilburi. bodi sedkil-i geyi-gülün üiledügči saran-u genel*. [断片、X28-58偈の注釈] 1902年に、チョイジ・オドセルが著作した注釈の12枚の写本がドイツのエクスペディアによってトルファンから発掘された。注釈の著作年代は1311年、初期の木版年代は1312年である<sup>150</sup>。現存するM木版年代が18世紀と推測されており、テンギユル収録版は、このM木版から移されたものだろうと考えられている<sup>151</sup>。所蔵地 The Royal Library Copenhagen, No. Mong. 480 Turfan fragment.

<sup>150</sup> Цэрэнсодном Д. (1969) pp. 86-88, Cerensodnom D. & Taube M. (1993) pp. 75-95.

<sup>151</sup> Rachewiltz (1996) Introduction. xi, Chandra (1974) p.3.

- Romanized ed. in Cleaves (1954)
- Romanized ed. in Haenisch E.(1954) *Mongolica der Berliner Turfan-Sammlung*. Berlin: I. Ein Buddhistisches Druckfragment vom Jahre 1312, Abh. d. Deut. Ak. d. Wiss. zu Berlin.
- ④ K ← Bodhi satu-a cari-ā ava-tā-ra orusiba. [完本] 現存するのはO.コワレブスキーによる手写のみである。
- Ed. in Владимирцов Б. Я.(1929) ← 手写本のKとテンギユル収録版DBの比較研究
- ⑤ DB ← Bodhi satuva nar-un yabudal-dur oruqi. テンギユル収録版 [完本]
- Romanized ed. in Ligeti (1966) *Śāntideva, A megvilágosodás útja. Bodhicaryāvatāra, Čhoskyi 'od-zer fordítása*, Budapest: Mongol Nyelvelméletár VII ← DBのみ利用
- Critical ed. in Rachewiltz (1996)

一方、アギ寺訳『入行論』については、その存在が Владимирцов Б. Я.(1929)によって知られていながら、研究が全く行われておらず、ただ名称が言及される程度である。チョイジ・オドセル訳『入行論』に関する研究は汗牛充棟であるのに唯一の別訳であるアギ寺訳『入行論』との比較研究なども存在しない。

以上の通り『入行論』に関する従来の研究は文献学的研究であり、『賢者の源』と結び付けた研究は行われていない。『賢者の源』に関しては、訳、成立、編者・著者、著作の経緯についての研究に止まっている<sup>152</sup>。『賢者の源』の訳語の有効性に関する研究は存在しないので、本章で訳語の比較という観点から以下の文献を用いて『賢者の源』における欽定訳語の活用の実際を比較検討する。

### 検討資料

3. チベット訳『入行論』→BCA
4. チョイジ・オドセル訳『入行論』→DB
5. テンギユル収録『ツォンカパ全集』所収の訳『菩提道次第大論』→ZSMĴ
6. ロサンツェンペル訳『菩提道次第大論』→LMĴ
7. ガルサンジャンバ訳『菩提道次第大論』→GMĴ
8. アギ寺訳『入行論』→AB

<sup>152</sup> ボルマー (2020) p.173. 『賢者の源』の先行研究に関しては、第3章を参照。

なお、チョイジ・オドセル訳『入行論』については、上記の5つの版本を利用したRachewiltz (1996)による『入行論』のモンゴル語訳の校訂テキストが既に作成されているので、ここではそれを依用することにする。テンギユル収録の『菩提道次第大論』以前の翻訳に関しては、その成立年代が『賢者の源』より前なので検討しない。厳密には、テンギユル収録の『菩提道次第大論』も、『賢者の源』より成立年代が早い<sup>153</sup>が、テンギユル収録時に『賢者の源』の方針による校訂・訂正が行われた可能性を探るために検討対象とする。

## 第2節 テンギユル編集時の『入行論』における訂正

本節で、先行研究に基づいて、モンゴル語訳テンギユルに入っているチョイジ・オドセル訳『入行論』は、テンギユルの編集作業の中で何らかの校訂・訂正がされたか、その訂正が欽定蔵蒙訳語集『賢者の源』によるものであったのかを考察する。さらに、テンギユルに入れるための古訳の修正基準について推測する。

チョイジ・オドセル訳『入行論』のK写本に関しては、原本がテンギユル収録版(DB)とは異なるものであったと推測されている<sup>154</sup>。その根拠は、ウラド旗の国師ビレグーン・ダライ(1670-1748?)による訂正が行われたとの奥書を伴うものであり、ビレグーン・ダライが訂正を行うきっかけがテンギユルの編集作業であったと見なされているからである。しかし、テンギユル収録版(DB)の奥書にチョイジ・オドセル訳であることが書かれているが、国師ビレグーン・ダライが最終的に翻訳を訂正したとの記述は見られない<sup>155</sup>。しかし、テンギユルの『入行論』は、国師ビレグーン・ダライが訂正を入れた版とされている<sup>156</sup>。また、K写本の成立年代がテンギユルより後のものであろうとの推測もある<sup>157</sup>。その根拠は、ビレグーン・ダライはその他の訂正資料では訂正したことをきちんと述べる傾向にあったこともあり、そもそもK写本の奥書ではビレグーン・ダライの校訂年代が1748年と書かれている<sup>158</sup>からであるというのである。このように、K写本の奥書における「国師ビレグーン・ダライが校訂した」きっかけについて従来の研究で最終的な結論に至っていない。いずれにせよ、国師ビレグーン・ダライの訂正は、統一を目的とした単語の置き換えなどではなかった。従来の研究者は、言語的な面

<sup>153</sup> ツォンカパ全集は、1730年代後半までにモンゴル語訳が完成されたと推測されている。ボルマー(2019) pp. 9, 15.

<sup>154</sup> Heissig (1976) pp. 247-249.

<sup>155</sup> DB. 52a14-29.

<sup>156</sup> Владимирцов Б. Я.(1929) pp. i -iii, Cleaves (1954) pp. 5-9, Rachewiltz (1996) Introduction.

<sup>157</sup> Chandra (1974) p. 2.

<sup>158</sup> Цэрэнсодном Д. (1969) pp. 53- 54,

から国師ビレグーン・ダライの訂正を扱っている。つまり、① 正書法 (orthography)、② 旧文法 (obsolete grammatical)、③ 語彙的な要素 (lexical elements) からチョイジ・オドセル訳であることが確認出来るから、国師ビレグーン・ダライによる訂正は 17 世紀から 18 世紀のチベット語からモンゴル語への仏教文献の翻訳形態を持っていると結論付けている。それは、結局文字の修正に留まっており、『賢者の源』の欽定訳語を意識したものではないことは明らかである。

また、モンゴル語訳テンギユルの編集の際に、『入行論』に関しては、新たな翻訳を作らずウラド旗の国師ビレグーン・ダライが訂正を入れたとされる古訳のチョイジ・オドセル訳をそのまま採用した。『賢者の源』増 1. 解釈・根本偈訳の規則「解釈に関しては、定本の古訳があれば注釈で用いる単語もそれに一致させる。なければ、先に定本を訳し、注釈の単語もそれに合わせる。」に従えば、同巻のモンゴル語訳北京版テンギユル第 114 巻に入っている 2 つの『入行論注釈』<sup>159</sup>もチョイジ・オドセル訳『入行論』の訳語を利用しているはずである。しかし、チョイジ・オドセル訳に訳語を一致させたとは言い難い。実際に『賢者の源』(1742)の執筆とモンゴル語訳テンギユルの開版(1749)の間は 7 年ほどしか無く、『賢者の源』の訳語に基づいて、訳し終わった経典・論書の訳語を校訂し、訳語を欽定訳語に一致させるのは困難であったと考えられる。

テンギユルの編集の際に、恐らくそれまでに翻訳された仏典を集録してから、古訳が存在しないテンギユル収録の仏典の翻訳作業に入ったことは容易に推定できる。その一例として取り上げられるチョイジ・オドセル訳『入行論』に関しても、テンギユルをきっかけに成立することになった『賢者の源』より校訂作業が先立つはずである。その意味で、国師ビレグーン・ダライの訂正の中に欽定蔵蒙訳語集『賢者の源』の基準を期待しなくても無理はない。従って、テンギユル編集中に経典・論書の古訳を用いた場合に、『賢者の源』を校正マニュアルとして参照した可能性は非常に低いのである。

---

<sup>159</sup> 1. 『入行論注釈』 *čari-a avatar-a-yin tayilburi bramze sambdau-a mati jokiyaysan orušibai.* (= *Bodhi sadu-yin yabudal-dur oruqu-yin berke tayilburi.*) MD vol. 114, 52a-432a. [381 fols.]. 2. 『入行論注釈』 *Bodhi sadu-yin yabudal-dur oruqu-yin teyin nomlal jarliy-un tayilburi.* MD vol. 114, 432a-544b. [113 fols.].



第3節 『賢者の源』の欽定訳語の有効性 — 『入行論』の引用文を通して—

『菩提道次第大論』の中で、最も引用回数の多い仏典は『入行論』であることについて前述した。具体的には、『入行論』は全914偈の中から190偈、およそ20%が引用されている。各章の引用文を調べた結果を下表に示す。同じ偈が繰り返し引用された場合は1(1)と表記し、偈の全行abcdのどれか一つでも引用されたものは、1と数えた。

『菩提道次第大論』における『入行論』の引用程度 表(1)

章	章名	引用偈	引用偈数 / 偈数	割合
第1章	菩提心の利益	2d, 5, 6ab, 6bd, 7ab, 9abc, 9(9d), 12, 14ab, 16, 21, 22, 24, 25, 30ab, 30bcd, 31ab, 34	15/36	42%
第2章	罪の懺悔	7ab, 34, 39, 46, 47, 48, 49ab, 54, 62	9/65	14%
第3章	菩提心の受持	10, 11, 25cd, 27, 31cd	5/34	15%
第4章	菩提心の不放	5, 6, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 39, 43, 44, 45, 46	24/48	50%
第5章	正知の守護	9, 10, 11, 12, 13, 14, 16(16), 26, 33, 69, 83c, 86, 87, 108, 109	15/109	14%
第6章	忍辱波羅蜜	1(1), 2(2a), 3, 4, 5, 6cd(6cd), 10, 12ab, 12cd(12cd), 14, 16, 17, 18ab, 20, 21(21), 31, 33, 34, 37, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 67, 72, 73, 74, 75, 80, 81, 82, 83, 84, 87, 88, 89, 90, 91ab, 93, 100, 101, 113	54/134	40%
第7章	精進波羅蜜	2a, 2bcd, 3, 12cd, 14, 14ab, 15, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 30, 33, 34, 35, 36, 39, 40, 40ab, 40cd, 47, 48, 49ab, 49cd, 50, 51ab, 51cd, 52,	47/76	62%

		53ab, 53cd, 54ab, 54cd, 55, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75		
第8章	禅定波羅蜜	1ab, 1cd, 4, 32, 81, 112cd, 119, 120, 129, 130, 131, 137, 138, 154cd, 155, 157, 158, 169, 170, 171cd, 172	20/187	11%
第9章	智慧波羅蜜	139ab, 157	2/167	1%
第10章	廻向		0/58	0
合計		引用偈数 191	191/914	21%

各訳『菩提道次第大論』における『入行論』の引用偈の中での訳語を比較する。

### 1. mi dga'

Tib. mi dga'に対して、チョイジ・オドセル訳『入行論』は、3種の語幹を用いて翻訳している。テンギュル収録『菩提道次第大論』における『入行論』の引用文でも、3種の語幹で翻訳している。

それに対して、ロサンツェンペル訳『菩提道次第大論』、ガルサンジャンバ訳『菩提道次第大論』、アギ寺訳『入行論』は『賢者の源』に示される訳語 (ülü bayasqu) で統一されている。

mi dga' 表(2)

翻訳年代	mi dga' 『菩提道次第大論』の『入行論』引用文で5回 <sup>160</sup> 登場	
1305年	チョイジ・オドセル 訳『入行論』	qorusqu (憎む) 2/5 <sup>161</sup> ese tayalabasu (意趣なさらなければ) 2/5, ülü tayalaqui 1/5 jjobalant (苦しみを持つ) 1/5
1730年代	テンギュル収録『菩提道次第大論』の『入行論』引用文	ülü tayalaqui (意趣なさらぬ) 1/5 ülü bayasqu (喜ばぬ) 2/5 gemsikü (後悔する) 2/5
1742年	『賢者の源』	ülü bayasqu 2/2 <sup>162</sup>

<sup>160</sup> 『菩提道次第大論』に引用される『入行論』の偈 → D. la. BCA. VI 10(2/2)[15a1], VI 54[18a2], VI 87[18a2], VII 27[21a4-5]

<sup>161</sup> 単語の訳数/全登場数

<sup>162</sup> KB. 3.24b, 4.9b.

1812年	ロサンツェンペル訳『菩提道次第大論』の『入行論』引用文	ülü bayasqu 5/5 <sup>163</sup>
1906 木版 年代	ガルサンジャンバ訳『菩提道次第大論』の『入行論』の引用文	ülü bayasqu 5/5 <sup>164</sup>
20世紀	アギ寺訳『入行論』	ülü bayasqu 5/5
2007年	ボルガン訳『菩提道次第大論』	үл баясах (喜ばない) 1/5 <sup>165</sup> уурлав (腹立つ) 1/5 зовох (苦しむ) 3/5

すなわち、チョイジ・オドセル訳『入行論』は、訳語の統一性に注意していない。テンギユル収録の訳『菩提道次第大論』における『入行論』の引用文にも訳語の統一性が見られない。それに対比して、成立年代が『賢者の源』以降の翻訳であるロサンツェンペル訳『菩提道次第大論』、ガルサンジャンバ訳『菩提道次第大論』、また、アギ寺訳『入行論』は、『賢者の源』に基づく訳語にし、統一をとっている。しかし、現代のボルガン訳『菩提道次第大論』は、意識的な3つの語根で翻訳している。

## 2. zhi gnas<sup>166</sup>

Tib. zhi gnasに関して、チョイジ・オドセル訳『入行論』には amurlingyui (安楽)、テンギユル収録の『菩提道次第大論』における『入行論』引用文には amurlin orusiqui (安楽に定住する) と訳されている<sup>167</sup>。テンギユル収録『菩提道次第大論』は、2種の訳語<sup>168</sup>を利用しているため訳語の統一が見られない。そして、現代訳のボルガン訳『菩提道次第大論』は『賢者の源』の欽定訳 amurlin aqui (安楽に居る) に従わず、チョイジ・オドセル訳『入行論』の訳語と同じ単語

<sup>163</sup> ロサンツェンペル訳『菩提道次第大論』に引用される『入行論』の偈 →BCA.VI 10 (2/2) LMĭ. 300b19-23, B-2/946/6. p. 597], VI 54 [LMĭ. 267b2, B-2/946/6. p.591], VI 87 [LMĭ. 269a8, B-2/946/6. p. 594], VII 27 [LMĭ. 312b8-13, B-2/946/6. p. 621]

<sup>164</sup> ガルサンジャンバ訳『菩提道次第大論』に引用される『入行論』: BCA.VI 10 (2/2)[ GMĭ. 166, Буяндэлгэр Г. (2014) p. 377], VI 54 [GMĭ. 267b2, Буяндэлгэр Г. (2014) p. 373], VI 87 [GMĭ. 269a8, Буяндэлгэр Г. (2014) p. 375], VII 27 [GMĭ. 312b8-13, Буяндэлгэр Г. (2014) p. 390]

<sup>165</sup> BCA VI 10 (2/2) [Булган (2007) p. 120], VI 54 [Булган (2007) p. 116], VI 87[Булган (2007) p. 118], VII 27[Булган (2007) p. 135]

<sup>166</sup> San. Samathah MVPT. 1677, MVP. 1683.

<sup>167</sup> 『菩提道次第大論』の三士説の章で zhi gnas が 30/283 は amurlin aqui と訳され、252/283 は amurlin orusiqui と訳されている。意識は 1/283 である。

<sup>168</sup> 全体の 11%が『賢者の源』の欽定訳 amurlin aqui と同じ訳であるが、残り 89%が amurlin orusiqui と訳されている。

を用いている。それに対して、成立年代が『賢者の源』より後の文献であるロサンツェンペル訳『菩提道次第大論』とアギ寺訳『入行論』は『賢者の源』の欽定訳 amurlin aqui に従っている。ガルサンジャンバ訳『菩提道次第大論』は、三士説の章までのテキストであるため、ここで利用している『入行論』VIII 4abの用例は存在しない。しかし、その他の箇所では、『賢者の源』の欽定訳であるamurlin aquiを利用している。

zhi gnas 表(3)

zhi gnas (止) 『菩提道次第大論』の『入行論』VIII 4ab の引用文で2回 <sup>169</sup> 登場	
チョイジ・オドセル訳『入行論』	amurlingyui 2/2
テンギユル収録『菩提道次第大論』の『入行論』引用文	amurlin orusiqui 2/2
『賢者の源』	amurlin aqui 14/14
ロサンツェンペル訳『菩提道次第大論』の『入行論』引用文	amurlin aqui 2/2
ガルサンジャンバ訳『菩提道次第大論』の『入行論』の引用文	×
アギ寺訳『入行論』	amurlin aqui 2/2
ボルガン訳『菩提道次第大論』	амирлангуй 2/2

### 3. bcom pa

『入行論』における多義語のTib. bcom pa動詞訳に関しては、チョイジ・オドセル訳『入行論』では、異なる10の単語で訳されているが、アギ寺訳『入行論』では1つの単語で訳され統一がとられている<sup>170</sup>。また『菩提道次第大論』の三士説の章で109回登場するが、6つの単語で翻訳しているので、単語の統一が見られない<sup>171</sup>。

#### 第4節 『賢者の源』の欽定訳語の有効性 — 3種の『菩提道次第大論』を通して—

ここまで、モンゴル語訳テンギユル収録の『入行論』と『菩提道次第大論』において、『賢者の源』による訳語の統一が見られないこと、『菩提道次第大論』における『入行論』の引用例に登場する単語を利用して、『賢者の源』より以降に成立したモンゴル語訳『菩提道次第大論』に関しては、『賢者の源』の欽定訳語に一致する単語で訳語を統一させていることを確認

<sup>169</sup> 『入行論』 BCA VIII 4a,c [D 1a.23b1-2]

<sup>170</sup> チョイジ・オドセル訳『入行論』は、daruqu 14/32、ebderekü 5/32、moquyaqu 3/32、γarγaqu 2/32、amurliyuluyüchi 1/32、baraydanam1/32、gegesügei 1/32、arilyan 1/32、samsiyaydayu 1/32、tasulumui 1/32、非訳 2/32の10種の語幹を利用して翻訳していることに対し、アギ寺訳『入行論』は、語幹が daruqu 32/32で通している。

<sup>171</sup> 語幹が daruqu 70/109、ebderekü 35/109、bayuraqu 1/109、alaqu 1/109、ügei bolγaqu 1/109。

した。今回は、テンギユル収録の訳と『賢者の源』より以降成立のロサンツェンペル訳『菩提道次第大論』と現代語のボルガン訳の3種の翻訳を対象に訳語の統一性を検討したい。

特に、『賢者の源』の特徴はゲルク派の学堂における翻訳規定であり、その特徴は特に「増8. 中観の学説に基づく訳」の翻訳規定に現われている。この翻訳規定は、「真実なものとして成立している (Tib. bden par grub pa) [もの]」と「自らの特質によって成立している (Tib. rang gi mtshan nyid kyi grub pa) [もの]」は、中観帰謬派の見解では同義のため、言い換えて翻訳することが可能であるが、中観自立派の見解ではこの二つは同義ではないので、同義に訳してはいけない<sup>172</sup>。良く考察し、それぞれの学派の見解に合わせて訳すという内容である。

中観思想は、一切法の無自性を論証する。無自性と縁起が矛盾することなく同一の基体において成立すると説く。ツォンカパは「単なる存在」と「自性による存在」、「端的な無」と「自性の無」を区別することを重視した。「成立する・存在する」という動詞 grub pa に対する修飾語を形成する格助詞が具格か処格かの違いについては厳格に区別されている<sup>173</sup>。格助詞の付されている名詞の意味が、処格のグループでは「真実、勝義」など存在の様態を示す言葉であるのに対し、具格のグループでは「自性」 (rang bzhin)、「自体」 (rang gi ngo bo)、「自らの特質」 (rang gi mtshan nyid) など、そのものの実態や本質、すなわちそのものの存在根拠を指す言葉である点に相違が見られる。自立論証派は、「真実」などの存在の様態によって限定される存在を否定するが、自性などによって成立しているものは世俗において承認する。それ

<sup>172</sup> Tib. rang gi mtshan nyid kyi grub pa のうち、rang gi mtshan nyid を「自相」と訳さず、「自らの特徴」と訳した理由を説明する。ツォンカパは、以下のように考えているという。福田 (2018) pp. 256-269.

論理学においては、量はその対象に関して錯覚していないことによって人を欺かないものとなる。色声などを対象とする感官知現量は、色声などに、それぞれ自らの特質あるいは自相 (rang mtshan) が存在し、その自らの特徴が存在している通りにそのまま現れ、現れている通りに感官知によって認識されると考える。そのとき、その感官知は対象である色声などの自らの特質に関して人を欺かないが故に「量」であると主張する。しかるに中観帰謬論証派の見解では、色声などの対象に自らの特徴は存在しない (言い換えれば、色声などの対象は自らの特質によって成立したものではない) ので、色声などの自らの特質が現れている知は、現れているものに関して誤った知であり、従って人を欺く知であるので「量」ではないことになる。色声などの言説有 (言説の量によって指定されるもの) は正理知によって否定されず、ただそれらの自性のみが否定される。この場合、「自性」と「自らの特質」とは同義である。しかし、自性は一般的な用語であり、必ずしも否定対象としてだけではなく、単に「属性」という意味で用いられる場合がある。それに対し、rang gi mtshan nyid kyi grub pa (自らの特質によって成立した [もの]) または bden par grub pa (真実として成立した [もの]) は、中観帰謬派の見解では否定対象である。実在論では、実在するもの (有為法) にも実在しないもの (無為法) にもそれぞれの自性が考えられ、量はその自性に対して量となる、と考えられている。中観帰謬派はそれら一切法が自性によって成立するものではない、すなわち自らの特質によって成立しているものではないと主張するのである。このように、「自らの特質」は現量の対象としての「自相」とは別の概念である。

<sup>173</sup> 処格：① don dam par grub pa (勝義において成立しているもの)、② bden par grub pa (真実 [なもの] として成立しているもの)、③ yang dag par grub pa (正しく成立しているもの)、具格：① rang gi mtshan nyid kyi grub pa (自らの特質によって成立しているもの)、② rang bzhin gyis grub pa (自性によって成立しているもの)、③ rang gi ngo bos grub pa (それ自体で成立しているもの)

に対して帰謬論証派は、自性などによって成立しているものであるならば、必ず真実なものとして成立しているはずであるので、これら二つのグループはいずれも否定対象であると主張する<sup>174</sup>。故に、自立論証派の見解では、存在の様態を示す処格のグループを代表する「真実なものとして成立している (Tib. bden par grub pa) [もの]」は、否定対象であり、存在根拠を指す具格のグループを代表する「自らの特質によって<sup>175</sup>成立している (Tib. rang gi mtshan nyid kyis grub pa) [もの]」は世俗において否定されないが、帰謬論証派の見解では、両方が否定対象である。そのような見解の相違に合わせて訳す必要があるというのが、『賢者の源』の著者チャンキャ・ルルペードルジェの注意点である。しかも、それはゲルク派の思想を説いていないその他の宗派の見解に対する考察や翻訳に対する注意点でもあろう。実際に『菩提道次第大論』のモンゴル語訳を見る限り、原文にrang gi mtshan nyid kyis grub pa (Mong. öber-ün belge činar-iyar bütügsen ←MGO) が現れる箇所ではrang gi ngo bos grub pa (Mong. öber-ün mön činar-iyar bütügsen ←MGO) の対訳語が3箇所<sup>176</sup>利用されているが、ünen-dür bütügsen (Tib. bden par grub pa ←KB) がきた箇所にわざわざöber-ün belge činar-iyar bütügsenで言い換えて訳す翻訳者はいない。少なくともチベット語の原文通りの単語で訳されるから、相互に言い換えられる場面が少ないように思われる。

ここでは『賢者の源』の欽定訳語を主題として、「真実として成立したもの」と「自らの特質によって成立したもの」の二つに当てる訳語を検討する。この二つの単語は、止観の章のみに登場しており、ガルサンジャンバ訳『菩提道次第大論』は三士説の章までのテキスト翻訳であり、止観の章を持たないため対象外となる。

bden par grub pa 表(4)

『菩提道次第大論』において bden par grub pa は 4 回登場する			
訳	ZSMĴ (1730 年代後半)	LMĴ (1870)	BMĴ (2007)

<sup>174</sup> 福田 (2018) pp. 228-268.

<sup>175</sup> 福田 (2018) pp. 270-271. rang gi mtshan nyid kyis grub pa の具格は、道具、手段、根拠、理由を表現できる。また「として」という同一性を意味する具格もある。ただ「として」というのはチベット語では処格が使われるので、サンスクリット語の具格をそのままチベット語で具格で訳す場合に限られる。rang gi mtshan nyid kyis grub pa は、『翻訳名義大集』や『二卷本訳語積』などに存在しないし、チベット起源の術語である。

<sup>176</sup> ロサンツェンペル訳『菩提道次第大論』は 2 箇所 (öberün mön činar-iyar bütüg-sen [SMĴ. 460b21, B-2/946/6. p.917], öberün mön činar-iyar bütüg-sen [SMĴ. 463b14, B-2/946/6. p.923])、ボルガン訳『菩提道次第大論』は 1 箇所 (өөрийн мөн чанараар эс бүтсэн [Булган (2007) p. 242]) である。3 箇所とも、帰謬論証派の見解をとく箇所におけるものであったが、3 つとも具格グループに当てはまる述語であるので、自立論証派の見解中においても言い換えが可能な位置であろう。特にボルガン訳『菩提道次第大論』においては、rang gi ngo bos grub pa と rang gi mtshan nyid kyis grub pa の対訳語が言い換えられる箇所が頻繁に見える。

1.	ünen-iyer бүтүгсен [ZSMĴ_ kha. 45b29]	ünen-e бүтүгсен [SMĴ. 457a16- 19, B-2/946/6. p. 910]	ҮНЭНЭЭР БҮТСЭН [Булган (2007) p. 139]
2.	ünen-iyer бүтүгсен [ZSMĴ kha. 163b3]	ünen-e бүтүгсен [SMĴ. 571a6, B-2/946/6. p. 1136]	ҮНЭНЭЭР БҮТСЭН [Булган (2007) p. 264]
3.	ünen бүтүгсен [ZSMĴ kha. 183a40-b1]	ünen-e бүтүгсен [SMĴ. 592b2, B-2/946/6. p. 1179]	ҮНЭХЭЭР БҮТСЭН [Булган (2007) p. 286]
4.	ünen-dür бүтүгсен [ZSMĴ kha. 49a24]	ünen-e бүтүгсен [SMĴ. 459a12, B-2/946/6. p. 918]	ҮНЭХЭЭР БҮТСЭН [Булган (2007) p. 143]
合 計	ünen-iyer бүтүгсен 2/4 ünen-dür бүтүгсен 1/4 ünen бүтүгсен 1/4	ünen-e бүтүгсен 4/4	ҮНЭНЭЭР БҮТСЭН 2/4 ҮНЭХЭЭР БҮТСЭН 2/4

「真実 [なもの] として成立したもの」 (Tib. bden par grub pa) に関して、『賢者の源』において4箇所が登場しているが ün-en-dür бүтүгсен 2/4 (真実において成立した)、ünen-iyer бүтүгсен 2/4 (真実によって成立した) と二様に訳されている。

『菩提道次第大論』においても4回登場する。テンギユル収録『菩提道次第大論』は ün-en-iyer бүтүгсен 2/4 (真実によって成立した)、ünen-dür бүтүгсен 1/4 (真実において成立した) ün-en бүтүгсен 1/4 (真実として成立した) と三様に訳されている。ロサンツェンペル訳『菩提道次第大論』は、ünen-e бүтүгсен 4/4 (真実に成立した) で統一されている。ボルガン訳『菩提道次第大論』は、ҮНЭНЭЭР БҮТСЭН 2/4 (真実 [なもの] によって成立した)、ҮНЭХЭЭР БҮТСЭН 2/4 (真実によって [実際に] 成立した) との二様に翻訳されている。

bden par grub pa は、bden par と grub pa とに分析される。bden pa は「本当の、真の」という意味の形容詞であり、さらにそれが名詞化して「本当のもの」すなわち「真実」という意味にもなるので、格助詞を付けることができる。名詞 bden pa に処格助辞が付き bden par となれば、基本的に副詞になって動詞 grub pa を修飾する。grub pa は完了形であり、形容詞化して名詞を修飾するかまたは名詞化する。

rang gi mtshan nyid kyis grub pa 表(5)

『菩提道次第大論』において rang gi mtshan nyid kyis grub pa は 36 回登場する			
訳	ZSMĴ	LMĴ	BMĴ

1.	öber-ün belges-iyer бүтүгсен [ZSMĴ kha. 45a7]	öber-ün belge ċinar-iyar bütügsen [SMĴ. 459a32, B-2/946/6. p. 914]	өөрийн бэлэг чанараар бүтсэн [Булган (2007) p. 139]
2.	öber-ün belges-iyer ese bütügsen [ZSMĴ kha. 45a34]	öberün belge ċinar-iyar ese bütügsen [SMĴ. 459a32, B-2/946/6. p. 914]	өөрийн бэлэг чанараар бүтээгүй [Булган (2007) p. 139]
3.	öber-ün belges бүтүгсен [ZSMĴ kha. 47b2]	öberün belge ċinar-iyar bütügsen [SMĴ. 459a12, B-2/946/6. p. 914]]	өөрийн бэлэг чанараас бүтсэн [Булган (2007) p. 141]
4.	öber-ün belges-iyer бүтүгсен [ZSMĴ kha. 47b9]	öberün belge ċinar-iyar bütügsen [SMĴ. 459a32, B-2/946/6. p. 914]	өөрийн бэлэг чанараас бүтсэн [Булган (2007) p. 142]
5.	öber-ün belges-iyer бүтүгсен [ZSMĴ kha. 48b19]	öberün mön ċinar-iyar bütügsen [SMĴ. 460b21, B-2/946/6. p.917]	өөрийн бэлэг чанараар бүтсэн [Булган (2007) p. 143]
6.	öber-ün belges-iyer бүтүгсен [ZSMĴ kha. 49a22]	öberün belge ċinar-iyar bütügsen [SMĴ. 459a32, B-2/946/6. p. 917]	өөрийн бэлэг чанараас бүтэх [Булган (2007) p. 143]
7.	öber-ün belges-iyer бүтүгсен [ZSMĴ kha. 51a12]	öberün belge ċinar-iyar bütügsen [SMĴ. 463a2, B- 2/946/6. p.922]	өөрийн бэлэг чанараар бүтсэнээр [Булган (2007) p. 145]
8.	belges-iyer бүтүгсен [ZSMĴ kha. 51a27]	öber-ün belge ċinar-iyar bütügsen [SMĴ. 463a18, B-2/946/6. p.922]	өөрийн бэлэг чанараас бүтсэн [Булган (2007) p. 145]
9.	öber-ün belges-iyer бүтүгсен [ZSMĴ kha. 51b28]	öberün belge ċinar-iyar bütügsen [SMĴ. 463b14, B-2/946/6. p.923]	өөрийн бэлэг чанараар бүтэх [Булган (2007) p. 145]



10.	öber-ün belges-iyer бүтүгсен [ZSMĴ kha. 60b20]	öberün mön ċinar-iyar бүтүг- sen [SMĴ. 463b14, B- 2/946/6. p.923]	өөрийн бэлэг чанараар бүтэн [Булган (2007) p. 154]
11.	öber-ün belges-iyer бүтүгсен [ZSMĴ kha. 77a33]	öberün belge ċinar-iyar бүтүгсен [SMĴ. 485a35, B-2/946/6. p.966]	өөрийн бэлэг чанараар бүтсэн [Булган (2007) p. 172]
12.	öberün belges-iyer бүтүгсен [ZSMĴ kha. 83b30]	öberün belge ċinar-iyar бүтүгсен [SMĴ. 490a32, B-2/946/6. p.976]	өөрийн бэлэг чанараар бүтсэнд [Булган (2007) p. 178]
13.	öberün belges-iyer бүтүгсен [ZSMĴ kha. 83b33]	öberün belge ċinar-iyar бүтүгсен [SMĴ. 490b37, B-2/946/6. p. 976]	өөрийн бэлэг чанараар бүтжээ [Булган (2007) p. 178]
14.	öberün belges бүтүгсен 1/32 [ZSMĴ kha. 84b1]	öberün belge ċinar-iyar бүтүгсен [SMĴ. 490b38, B-2/946/6. p. 977]	өөрийн бэлэг чанараар бүтсэн [Булган (2007) p. 179]
15.	öberün belges-iyer бүтүгсен [ZSMĴ kha. 84b28]	öber-ün belge ċinar-iyar бүтүгсен [SMĴ. 491a13, B-2/946/6. p. 978]	өөрийн бэлэг чанараар бүтсэн [Булган (2007) p. 179]
16.	öber-ün belges бүтүгсен [ZSMĴ kha. 104b40]	öber-ün belge ċinar-iyar бүтүгсен [SMĴ. 508b23, B-2/946/6. p.1013]	өөрийн бэлэг чанараар бүтэх [Булган (2007) p. 198]
17.	öberün belges-iyer бүтүгсен [ZSMĴ kha. 107b28]	öber-ün belge ċinar-iyar бүтүгсен [SMĴ. 511b3, B-2/946/6. p.1019]	өөрийн бэлэг чанараар бүтэхийн [Булган (2007) p. 202]
18.	öber-ün belges-dür бүтүгсен 1/32 [ZSMĴ kha. 114a1]	öber-ün belge ċinar-iyar бүтүгсен [SMĴ. 518a39, B-2/946/6. p.1032]	тэдгээр бэлэг чанараас бүтсэн [Булган (2007) p. 209]

19.	öber-ün belges-iyer бүтүгсен [ZSMĴ kha. 114a27]	öber-ün belge ċinar-iyar bütügsen [SMĴ. 518b31, B-2/946/6. p.1033]	өөрийн бэлэг чанараар бүтжээ [Булган (2007) р. 210]
20.	öberün belges-iyer бүтүгсен [ZSMĴ kha. 114a36]	öberün belge ċinar-iyar bütügsen [SMĴ. 518b40, B-2/946/6. p.1033]	өөрийн бэлэг чанараар бүтсэн [Булган (2007) р. 210]
21	öberün belges-iyer бүтүгсен [ZSMĴ kha. 115b6]	öber-ün belge ċinar-iyar bütügsen [SMĴ. 520a29, B-2/946/6. p.1036]	өөрийн бэлэг чанараар бүтсэн [Булган (2007) р. 211]
22	öber-ün belges-iyer ese bütügsen [ZSMĴ kha. 115b38]	öber-ün belge ċinar-iyar ese bütügsen [SMĴ. 520b25, B-2/946/6. p.1037]	өөрийн бэлэг чанараар эс бүтсэн [Булган (2007) р. 211]
23	öber-ün belges бүтүгсен [ZSMĴ kha. 116a8]	öberün belge ċinar-iyar bütügsen [SMĴ. 520b38, B-2/946/6. p.1037]	өөрийн бэлэг чанараар бүтсэн [Булган (2007) р. 211]
24	öber-ün belges-iyer бүтүгсен [ZSMĴ kha. 116a19]	öber-ün belge ċinar-iyar bütügsen [SMĴ. 521a11, B-2/946/6. p.1038]	өөрийн бэлэг чанараар бүтсэн [Булган (2007) р. 211]
25	öberün belges-iyer бүтүгсен [ZSMĴ kha. 118b15]	öber-ün belge ċinar-iyar bütügsen [SMĴ. 524a10, B-2/946/6. p.1044]	өөрийн бэлэг чанараар бүтэж [Булган (2007) р. 214]
26	öberün belges-iyer бүтүгсен [ZSMĴ kha. 119b29]	öber-ün belge ċinar-iyar bütügsen [SMĴ. 525a39, B-2/946/6. p.1046]	өөрийн бэлэг чанараар бүтсэн [Булган (2007) р. 215]
27	öberün belges-iyer бүтүгсен [ZSMĴ kha. 120a10]	öber-ün belge ċinar-iyar bütügsen [SMĴ. 525b22, B-2/946/6. p.1047]	өөрийн бэлэг чанараар бүтсэн [Булган (2007) р. 215]

28	öberün belges-iyer bürüdügßen[ZSMĴ kha. 123a29]	öber-ün belge ċinar-iyar bürüdügßen [SMĴ. 529a9, B- 2/946/6. p.1054]	өөрийн бэлэг чанараар бүтсэн [Булган (2007) p. 218]
29	öber-ün belges-iyer bürüdügßen[ZSMĴ kha. 131b3]	öber-ün belge ċinar-iyar bürüdügßen [SMĴ. 537b29, B-2/946/6. p.1071]	өөрийн бэлэг чанараар бүтсэн [Булган (2007) p. 229]
30	öberün belges-iyer бүтүжү [ZSMĴ kha. 131b27]	öber-ün belge ċinar-iyar bürüdügßen [SMĴ. 538a23, B-2/946/6. p.1072]	өөрийн бэлэг чанараар (төгөлдөр) бүтсэн [Булган (2007) p. 229]
31	öber-ün belges-iyer бүтүгßen [ZSMĴ kha. 139b18]	öber-ün mön ċinar-iyar bürüdügßen [SMĴ. 546a10, B-2/946/6. p.1088]	өөрийн бэлэг чанараар бүтсэн [Булган (2007) p. 239]
32	öberün belges-iyer бүтүгßen [ZSMĴ kha. 140b24]	öber-ün belge ċinar-iyar bürüdügßen [SMĴ. 547a15, B-2/946/6. p.1090]	өөрийн бэлэг чанараар бүтсэн [Булган (2007) p. 240]
33	öberün belges-iyer ese bürüdügged, [ZSMĴ kha. 142b40]	öber-ün belge ċinar-iyar ese bürüdügßen [SMĴ. 549a32, B-2/946/6. p.1094]	өөрийн мөн чанараар эс бүтсэн [Булган (2007) p. 242]
34	öber-ün belges-iyer ese bürüdügßen [ZSMĴ kha. 143a5]	öber-ün belge ċinar-iyar ese bürüdügßen [SMĴ. 549a38, B-2/946/6. p.1094]	өөрийн бэлэг чанараар бүтсэн [Булган (2007) p. 242]
35	öber-ün belges-iyer бүтүгßen [ZSMĴ kha. 163b10]	öber-ün belge ċinar-iyar bürüdügßen [SMĴ. 571a12, B-2/946/6. p.1136]	өөрийн бэлэг чанараар бүтсэн [Булган (2007) p. 264]
36	öber-ün belges-iyer бүтүгßen [ZSMĴ kha. 163b16]	öber-ün belge ċinar-iyar bürüdügßen [SMĴ. 571a18, B-2/946/6. p.1136]	өөрийн бэлэг чанараар бүтсэн [Булган (2007) p. 264]

öberün/öber-ün という綴りの違いを持つものは、同様に扱い、否定系も入れて数えた。表の内容をまとめると以下のようである。

テンギユル収録の訳『菩提道次第大論』（ZSMĴ）

- ① öber-ün belges-iyer бүтүгсен → 27/36
- ② öber-ün belges бүтүгсен → 4/36
- ③ belges-iyer бүтүгсен → 1/36
- ④ öber-ün belges-dür бүтүгсен → 1/36
- ⑤ öberün belges-iyer бүридүгсен → 1/36
- ⑥ öberün belges-iyer бүтүжү → 1/36
- ⑦ öberün belges-iyer бүтүгед → 1/36

ロサンツェンペル訳『菩提道次第大論』（LMĴ）

- ① öber-ün belge ċinar-iyar бүтүгсен → 34/36
- ② öber-ün mön ċinar-iyar бүтүгсен → 2/36

ボルガン訳『菩提道次第大論』（BMĴ）

- ① өөрийн бэлэг чанараар бүтсэн → 23/36
- ② өөрийн бэлэг чанараас бүтсэн → 4/36
- ③ өөрийн бэлэг чанараар бүтэх → 4/36
- ④ өөрийн бэлэг чанараар бүтэн → 1/36
- ⑤ бэлэг чанараас бүтсэн → 1/36
- ⑥ өөрийн бэлэг чанараар бүтжээ → 2/36
- ⑦ өөрийн мөн чанараар эс бүтсэн → 1/36

rang gi mtshan nyid kyis grub pa（自らの特質によって成立している〔もの〕）が『賢者の源』において6箇所登場しているが、6つとも öber-ün belge ċinar-iyar бүтүгсен（自らの特質によって成立した）という訳語で統一されている。

rang gi mtshan nyid kyis grub pa に関しては、テンギユル収録の訳『菩提道次第大論』においては7つの訳語で翻訳されており、『賢者の源』の欽定訳語である öber-ün belge ċinar-iyar бүтүгсен とは一致しない。その欽定訳語をロサンツェンペル訳とボルガン訳が使用している点では、『賢者の源』の欽定訳語の有効性が認められる。

以上のように『賢者の源』以前の文献に単語の統一が見られず、『賢者の源』以後の訳語は『賢者の源』に準拠して統一されていることから、欽定訳語は、一定の有効性を持つと推測される。

## 小結

1749年、『入行論』をモンゴル語訳テンギェルに編集する際に、チョイジ・オドセル訳を用い、新たに翻訳し直さなかった。それは、旧訳を活かし、新たに別訳を増やさないとするルールが仏典の翻訳者の中にあっただからだと思われる。蔵外文献に関しては、一作に対して複数の翻訳があったことと対照的である。一方、アギ寺訳『入行論』については、旧訳のチョイジ・オドセル訳『入行論』は訳語の不統一などからして、欽定訳語集『賢者の源』の基準を満たせないために新たに翻訳されたと思われる。ロサンツェンペル訳『菩提道次第大論』、ガルサンジャンバ訳『菩提道次第大論』に関しても同様に考えられないことはないが、『菩提道次第大論』に関しては、各地でモンゴル人がそれぞれ自由に翻訳していた様子が見られる。

以上で確認した通り、『賢者の源』の成立以降の時代に翻訳されたロサンツェンペル訳『菩提道次第大論』、ガルサンジャンバ訳『菩提道次第大論』とアギ寺訳『入行論』では、訳語が統一され、しかも『賢者の源』で定められた欽定訳語に一致することから、『賢者の源』の有効性は認められる。しかし、『入行論』と『菩提道次第大論』のテンギェル収録モンゴル語訳に関しては、そうではない。従って、テンギェルの編集の際には『賢者の源』による校訂・訂正の作業が間に合わなかったことが推定される。

## 結論

本論では、ツォンカパ著『菩提道次第大論』の7種のモンゴル語訳および『入行論』の新旧訳を対象として、『賢者の源』による欽定訳語の影響を考察し、蔵蒙欽定訳語集『賢者の源』の有効性の検討を通じて、モンゴルにおけるチベット仏教受容の一端を明らかにした。

第1章において、奥書を持たないために翻訳者を確定することができない『菩提道次第大論』のモンゴル語訳写本と木版を含めて、すべての翻訳が揃う最初の部分である帰敬偈を対比して読解し、写本ないし木版の種類を確定して、『菩提道次第大論』には7種のモンゴル語訳が存在することを確認した。それらの翻訳のお互いの関係に関しては、ガルサンジャンバ訳(1870)は、ロサンツェンペル訳(1812)、テンギェル収録の訳と(1730年代後半)、クンガギャムツォ訳(17世紀)まで遡って、参照されている。つまり、テンギェル収録の訳とロサンツェンペル訳とガルサンジャンバ訳は、クンガギャムツォ訳の影響下にある。一方、アルタンゲレル訳(1655)、ホブド写本の訳、クンガギャムツォ訳(17世紀)、ボルガン訳(2004-2007)は、別々

に成立した単独な翻訳に思われる。帰敬偈においてボルガン訳は、帰敬偈を含むこの最初のテキストに対して、モンゴル語らしく韻を踏んで訳しているところが特殊である。

『菩提道次第大論』は、ツォンカパの代表作なので、言うまでもなく『ツォンカパ全集』の中に収められている。モンゴル語訳『ツォンカパ全集』には、ほぼ同じ時期の二つの版（木版は、北京版モンゴル語訳テンギユル収録『ツォンカパ全集』（1749）と、黒字の『ツォンカパ全集』（1730年代後半）の2つ）が存在するが、それらの版の成立の状況や内容の異同については研究がなかったので、第2章において、モンゴル語訳『ツォンカパ全集』の2つの版について研究を行なった。具体的には、モンゴル語訳『ツォンカパ全集』の2つの版について、それぞれ現存する巻と、3種の目録の比較検討を通して、両者は内容が同一のものであることが分かった。『ツォンカパ全集』の中で、翻訳年代が記載されている第5巻と第18巻の奥書に基づいて、成立年代を推定した。

第3章において、『賢者の源』の特徴を抽出するため、作成目的と性格が類似する先行チベット語文献との比較研究を行った。『賢者の源』と『二巻本訳語釈』は、いずれも欽定訳語集という共通性があり、『賢者の源』において、『二巻本訳語釈』と『翻訳名義大集』が、依拠した典籍として明言されている。『賢者の源』が欽定訳語集として『二巻本訳語釈』の延長線上にあることに焦点を当てて『賢者の源』の成立事情を検討するとともに、その序文で言及されている『賢者の源』の構成を検討した。『二巻本訳語釈』に比べて、翻訳の方法論としては『賢者の源』の方が詳細である。『賢者の源』は、『二巻本訳語釈』をベースにして著作されたものであると言える。成立事情に関しては、『賢者の源』に基づいて、テンギユルの翻訳を改訳したのではなく、モンゴル語訳テンギユル成立をきっかけに『賢者の源』が成立したことを確認した。全体の内容に関しては、『賢者の源』は、仏教用語の意味そのものより、仏教思想におけるカテゴリーの構造を示しており、概念相互の分類やヒエラルキーによる体系を規定している。『賢者の源』における11章の構成から、ゲルク派の学問体系がその構成の基となっていることが分かった。また、増8番の翻訳規則の内容から、『賢者の源』は中観帰謬論証派の見解を頂点に置くゲルク派思想を説く著作である。

第4章において、『賢者の源』の訳語の有効性を明らかにすることを目的とした。『賢者の源』の有効性とは、すでに翻訳された仏典に対して校正マニュアルとして影響力があったこと、

および『賢者の源』成立後に翻訳された仏典に対して翻訳マニュアルとして影響力を発揮することができたことである。1749年、『入行論』をモンゴル語訳テンギユルに入れる際に、チョイジ・オドセル訳を用い、新たに翻訳し直さなかった。それは、旧訳を活かし、新たに別訳を増やさないとするルールが仏典の翻訳者の中にあったからだと思われる。蔵外文献に関しては、一作に対して複数の翻訳があったことと対照的である。テンギユル附属の論書の多くは『賢者の源』成立以前にモンゴル語訳されていた。その代表のチョイジ・オドセル訳『入行論』とテンギユル収録『ツオンカパ全集』所収の訳『菩提道次第大論』の二つの訳に対して、『賢者の源』が校正マニュアルとして機能したか否かを検討した。また、『賢者の源』成立以降のアギ寺訳『入行論』と19世紀の翻訳『菩提道次第大論』における訳語の統一の有無を調べた結果、『賢者の源』の成立以降の時代に翻訳された文献については、訳語が統一され、しかも『賢者の源』で定められた欽定訳語に一致したことから、『賢者の源』の有効性が認められた。しかし、テンギユル収録の『入行論』と『菩提道次第大論』のモンゴル語訳に関しては、そうではない。従って、テンギユルの編集の際には『賢者の源』による校正作業が間に合わなかったことが推定される。

### 今後の課題

テンギユルの編集の際には『賢者の源』による校正作業が間に合わなかったことが推定されると結論づけたが、それはテンギユル全体に対する言及であって、テンギユル収録の論書全てにそれぞれ翻訳の歴史が存在することを忘れてはならない。

『賢者の源』のモンゴル語訳(1742)とモンゴル語訳テンギユルの開版(1749)は、7年ほどしか差がないが、モンゴル語訳テンギユルに『賢者の源』に依拠して翻訳が行われたとの記述がある奥書を持つ論書が少なからず存在している<sup>177</sup>、それらを検討することにより『賢者の源』が翻訳マニュアルとして機能することができたことを確認することは不可能ではない。間違いなく『賢者の源』は翻訳指針として作成され、それは当然翻訳マニュアルとして機能した筈であるが、その研究には時間を掛けた精密な作業が必要である。しかも、仏教論書を一一つ取り扱った文献学的な研究が必要である。

まず、仏典翻訳規則は、『賢者の源』においてまとめられただけで、その規則は『賢者の源』の成立によって新しく生まれたものではないことが、『二卷本訳語釈』から影響されている事

---

<sup>177</sup> Цэрэнсодном Д. (2017) p. 77-123.

実から分かる。従って、仏典翻訳規則の一般論でもって『賢者の源』の有効性を語ることはできない。そのため、『賢者の源』の特徴を明確にしたわけであるが、それだけでモンゴル語訳大蔵経収録の仏経・仏教論書における『賢者の源』の有効性を測ることは困難である。仏典の翻訳に関しては、誰しものが好き勝手に翻訳を増やすことは許されず、大蔵経に収録された形で 1 種の翻訳のみで通用するようになっている傾向にある。その 1 種のみが、モンゴル仏教初期に翻訳されたチョイジ・オドセル『入行論』（1305）と同様な問題を抱えている。つまり、大蔵経収録の仏典はチョイジ・オドセル訳『入行論』のようなかつての翻訳が附属しており、その成立がゲルク派開祖ツォンカパより古いため、ゲルク派の学問に基づいて著わされた『賢者の源』の特徴をもって『賢者の源』の有効性を語るができない場面が多くあるということである。

上述した翻訳マニュアルの問題に対しては本論の研究アプローチでは限界があるが、校正マニュアルとしての『賢者の源』の有効性は、『賢者の源』の訳語による統一の有無で確認できるものであると判断した。繰り返しになるが、校正マニュアルとしての機能は、既に翻訳されている文献において、仏教用語の統一を目的とした校正として現れたはずである。

## 参考文献

### チベット語 一次資料

- D           デルゲ版『テンギユル』
- BCA       『入菩薩行論』 Śāntideva, *Bodhisattvacaryāvatāra*. D vol. 1a, 大谷 No. 3871.
- MVPT      『梵藏漢和四譯對校翻譯名義大集』 (*Mahāyutpatti* San.Tib.) in 榊亮三郎 (1916)
- MVPM      『新訂翻訳名義大集』 (*Mahāyutpatti* San.Tib.Mong.) in 石濱裕美子、福田洋一 (1989)
- GB       『二卷本訳語釈』 *sgra sbyor bam po gnyis pa*. ACIP TD04347(eTB).
- LR       『菩提道次第大論』 *lam rim chen mo*. *tsong kha pa blo bzang grags pa: rje tsong kha pa'i lam rim chen mo'i lung khungs gsal byed nyi ma'i stod cha*. 東北 No. 5392. in ツルティム (2001-2004)
- KB       『賢者の源』 *dag yig mkhas pa'i 'byung gnas*. [著作年 1741] チャンキャ 3 世全集 ca 卷 BDRC No.W23741.

### モンゴル語 一次資料

- DB        チョイジ・オドセル (Chos kyi 'od zer, 13 世紀) 訳『入行論』 *Bodhi satuva nar-un yabudal-dur oruqui*. [翻訳年 1305] MD vol. 114, 2b-52a [50 fols.] テクスト校訂版 in Rachewiltz (1996).



- BT チオイジ・オドセル著『入行論注釈』 *Bodistv-a čari-a avatar-un tayilbur*. [著作年 1312]  
現存するのは『入行論』X章 28-58 偈に対する注釈である。in Cleaves (1954).
- AB アギ寺訳『入行論』 *Bodhisadu-a čari-a avatara orušibai*. [20 世紀初期の翻訳]  
in Отгонбаатар P. (2019)
- DN モンゴル語訳『二卷本訳語釈』 *dagun-u nayiralg-a*. MD vol. 212, 2b-58a.
- MGO モンゴル語訳『賢者の源』 *Merged garaqu-yin oron*. [翻訳年 1742] in Tuyay-a Ü. (2015)
- MD モンゴル語訳北京版『テンギユル (1749) 』 in Ganjuur Danjuur (2014)

モンゴル語訳『菩提道次第大論』 (*yeke bodhi mör-ün jerge* [YBMJ] → *mör-ün jerge*[MJ])

- AMJ アルタンゲレル訳『菩提道次第大論』 *yeke bodhi mör-ün jerge*. [翻訳年 1655] 378  
fols. モンゴル国立図書館所蔵 No.4049/96.
- HMJ ホブド写本『菩提道次第大論』 題名不明、[翻訳年代不明] 233 fols. 最初の数ページ  
のみ PDF によって閲覧可能、ホブド大学図書館に所蔵していたトド文字写本
- KMJ クンガギャムツォ訳『菩提道次第大論』 *lamrimčimu*. [翻訳年代 17 世紀後半] 1457 p.  
内蒙古図書館 No.B/209-1/1~10 (10 冊)
- ZSMJ 『ツォンカパ全集』所収の訳『菩提道次第大論』 *ilaywγsan-u sayin jarliγ bügüde-yin  
onisun-i quriyaγsan γurban törülkiten-iyer angqar-un abaqu-yin jerge bügüde-yig бүрүн-е  
үжүгүлүгсен yeke bodhi mör-ün jerge-yin yabudal yerü-yin surtaqun-ača degegeši kiged,  
duyan-yin mön činar amurlin aqui-dur yambar metü surulčaqu-yin yosun nomlal kemekü*.  
[翻訳年代 1730 年後半] 『ツォンカパ全集』ka (宗一) 巻は、三士説の章 1a-386a (386  
fols)となっており、ka (宗又一) 巻は 止観の章 1a-204a (204 fols) in Ganjuur Danjuur  
(2014) 宗喀巴全集 vol. 2, vol. 3.
- LMJ ロサンツェンペル訳『菩提道次第大論』 *sačalal ügei yeke bzungkha ba ber jokiyaγsan  
yeke bodhi mör-ün jerge orusiba*. [翻訳年 1812] 617 fols. 内蒙古図書館 No.B/946/6,  
No.B-2/946/6
- GMJ ガルサンジャンバ訳『菩提道次第大論』 *yeke bodhi mör-ün jerge*. [1906 年の木版] 三  
士説の章までのテキスト翻訳 BDRC No. W1EE32, in Буяндэлгэр Г. (2014).
- BMJ ボルガン訳『菩提道次第大論』 *Их бодь мөрийн зэрэг*. [翻訳年代 2004-2007] キリル  
文字による現代語訳 in Булган Т. (2004, 2006, 2007)の 3 冊

目録部

- MD Ca. 『モンゴル語訳北京版テンギユル目録』 **Catalogue of Mongolian Danjuur of Peking  
Edition 1739**, in Ganjuur Danjuur (2014)
- 大谷 『北京版チベット大蔵経目録』 Edited by Dr. Daisetz, T. Suzuki. *Catalogue Tibetan*

*Tripitaka Peking Edition.* — Kept in the library of the Otani University, Kyoto. — Reprinted under the supervision of the Otani University. Tokyo: Suzuki Research Foundation, 1962.

大谷蔵外 『大谷所蔵蔵外文献目録』 Otani University Ed. Catalogue of Tibetan Works kept in Otani  
『日本とモンゴル』第 54 巻第 1 号・第 2 号合併号 (139 号・140 号合併号) University  
Library. Kyoto: Otani University Library 1973.

東北 『西藏大蔵経総目録』 Yensho Kanakura Ed. *A catalogue of The Tohoku university  
collection of Tibetan works on Buddhism.* Published by The seminary of Indology Tohoku  
university, 1953.

内蒙 『中国内蒙古文古籍目録』 By the Editorial Board of Catalogue of ancient mongolian  
books and documents of China. *Catalogue of ancient mongolian books and documents of  
China Vol. I, II, III.* Beejing: Beejing Library Press. 1999.

St.P Ca. 『サンクトペテルブルグ大学図書館蔵書モンゴル語資料目録』 Uspensky Vladimir L,  
Osamu Inoue. Edited by Tatsuo Nakami. *Catalogue of the Mongolian Manuscripts and  
Xylographs in the St. Petersburg State University Library.* Tokyo: Institute for the study of  
Languages and Cultural of Asia and Africa, 2001.

BDRC 『公式仏教資料サイト』 Buddhist Digital Resource Center.

#### 参考文献・二次資料

石川美恵 (1993) 『二巻本訳語釈 —和訳と注釈—』 東洋文庫 STUDIA TIBETICA No. 28,  
Materials for Tibetan-Mongolian Dictionaries, Vol. 3. 【Mahāvvyutpatti 難語釈】

石川美恵 (2008) 「dpal brtsegs の *chos kyi rnam grangs kyi brjed byang* について」 印度学佛教学  
研究第 57 巻 第 1 号

石濱裕美子、福田洋一 (1989) *A New Critical Edition of MAHĀVYUTPATTI.*

Sanskrit-Tibetan-Mongolian Dictionary of buddist terminology. 新訂翻訳名義大集

Materials for Tibetan-Mongolian Dictionaries, Vol.1 Tokyo: The Toyo Bunko.

石濱裕美子 (2001) 『チベット仏教世界の歴史的研究』 東方書店

石濱裕美子 (2011) 『清朝とチベット仏教 —菩薩王となった乾隆帝—』 早稲田大学出版部

磯田熙文 (1984) 「The Initial “Phar phyin” Section in the *Dag yig mkhas paḥi ḥbyuñ gnas* of  
Lcañ skya rol paḥi rdo rje (1717-1786)」 密教文化 146, L110-L95.

今枝由郎 (1989) 「チベット大蔵経の編集と開版」 『チベット仏教』 岩波講座東洋思想  
第 11 巻 pp.325-350(R)

岡田英弘 (2009) 『清朝とは何か』 藤原書店

小野田俊蔵 (1989) 「チベットの学問寺」 『チベット仏教』 岩波講座東洋思想 第 11 巻

pp. 351-373

- 金岡秀郎 (1986) 「『メルゲッド・ガルヒン・オロン』研究序説 —清代モンゴルにおける仏典翻訳に関する一資料—」大倉山論集(20), pp. 151-177.
- 金岡秀郎 (1987a) 「清代モンゴル翻訳文献概史 —『メルゲッド・ガルヒン・オロン』成立背景」大倉山論集(21), pp. 195-230.
- 金岡秀郎 (1987b) 「モンゴル語仏典における借用語許容の規範 —『メルゲッド・ガルヒン・オロン』に見える不翻の理論について—」大倉山論集(22), pp.133-152.
- 金岡秀郎 (2005) 『megred Garqu-yin orun (mGo)』序章所載「モンゴル仏典の翻訳論」和訳と註解 —附蒙藏対訳テキスト
- ゲシェー・ラプテン、アラン・ウォレス (1984) 小野田俊蔵訳『チベットの僧院生活』平河出版社
- 酒井眞典 (1942) 「西藏文眞言名目要略和譯」『密教研究』第 80 号 pp. 105-115.
- 榊亮三郎 (1916) 『梵藏漢和四譯對校翻譯名義大集』京都文科大学蔵版
- ツルティム・ケサン (2001-2004) *tsong kha pa blo bzang grags pa: rje tsong kha pa'i lam rim chen mo'i lung khungs gsal byed nyi ma'i stod cha.* (Japanese and Tibetan Buddhist culture Series. VI, VII, Tsultrim kelsang khangkar, ed.) Tibetan Buddhist Culture Association. 『尊者ツォンカパの菩提道次第大論』上下巻、ツルティム・ケサン校訂、日蔵仏教文化叢書 6-7 寿徳寺文庫 第 34 巻、第 38 巻 (Kyt 1/2)
- ツルティム・ケサン、白館戒雲 (2008) 「チベットにおける大蔵経 (カンギュル・テンギュル) 開版の歴史概観 —ナルタンを思い起こすメロディー—」真宗総合研究所研究紀要(27), pp. 39-116.
- 長尾雅人 (1989) 「チベット仏教概観」『チベット仏教』岩波書店 pp. 3-20.
- 長尾雅人 (1992) 『蒙古学問寺』中央公論社
- 西沢史仁 (2011) 『チベット仏教論理学の形成と展開』(博士論文)
- 西沢史仁 (2017) 「吐蕃王朝大蔵経編纂事業考(1) —『二巻本訳語釈』と『翻訳名義大集』—」 *Acta Tibetica et Buddhica* (10), 83-141.
- 西沢史仁 (2020) 「サキヤ派中観思想史研究序説 —師資相承の系譜の分析を中心として—」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第 36 号 pp. 1-75.
- 福田洋一、石濱裕美子 (1986) 『西藏仏教宗義研究 第四巻 : トウカン『一切宗義』モンゴルの章』東洋文庫
- 福田洋一 (2018) 『ツォンカパ中観思想の研究』大東出版社
- A.ボルマー (2019) アリルディー・ボルマー「モンゴル語訳ツォンカパ全集の二つの版」『大谷大学大学院研究紀要』第36号pp. 3-18.

- A.ボルマー (2020) 「チャンキヤ著『正字法・賢者の源』の特徴 — 『二卷本訳語釈』との比較を通じて—」 『日本とモンゴル』第 54 巻第 1 号・第 2 号合併号 (139 号・140 号合併号) pp. 172-189.
- 松川節 (2011) 「清代のチベット語・モンゴル語辞典について」 『国際ワークショップ「モンゴル辞書」』中世モンゴル語研究の統合東北大学東北アジア研究センター「東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット」
- 御牧克巳 (1987) 「チベット語仏典概観」 『チベットの言語と文化』北村甫教授退官記念論文集 pp. 277-315.
- 御牧克巳 (1990) ウパロサル (dBus pa blo gsal) の『新旧語彙集』 (brDa gsar rñiñ gi rnam par dbye ba) 校訂本初稿、 『アジアの言語と一般語学』 (西田龍雄教授還暦記念論集) 三省堂 pp.17-54.
- 山口瑞鳳 (1979) 「『二卷本訳語釈』研究」成田山仏教研究所紀要 通号 4, pp. 1-24.
- 山口瑞鳳 (1988) 『チベット』上・下 東京大学出版会
- Cerensodnom D. & Taube M.(1993) *Die Mongolica der Berliner Turfansammlung*. Berlin: Berliner Turfantexte XIV, Akademie Verlag GmbH.
- Chandra (1974) Lokesh Chandra, ed. *Bodhicaryāvatāra*. 1. *Pre-canonical Mongolian Text*. 2. *Tibetan Commentary by blo bzañ dpal dan*, New Delhi: Śata-piṭaka Series 230
- Chandra (1981) Lokesh Chandra, ed. *Quadrilingual Mahāvvyutpatti*.  
*Sanskrit-Tibetan-Chinese-Mongolian lexicon of Buddhist terms*. New Delhi : International Academy of Indian Culture.
- Cleaves (1954) Francis Woodman Cleaves. *The Bodistw-a čari-a awatar-un tayilbur of 1312*, *HJAS* 17: 1-129, Pl. I - X XIV.
- Γanjuur Danjuur (2014) *Γanjuur Danjuur (1749)-un foto keblel*, Kökeqota: Öber Mongyul-un arad-un keblel-ün qoriy-a. (モンゴル語訳北京版大蔵経 (1749) の複製出版 内蒙古民族出版社)
- Heissig (1976) Walther Heissig romanized ed. *Die mongolischen Handschriften-Reste aus Olon sü Innere Mongolei (16-17. Jhdt.)*, Germany: Otto Harrassowitz Wiesbaden. *Asiat. Forschungen* 46.
- Kesigtoγtoqu Č. (1998) *Mongyol-un erten-ü udq-a jokiyaal-un sin-e sudulul*. Kökeqota: 518 duyar tal-a.  
策·賀西格陶克陶 『蒙古古典文学研究新論』呼和浩特 (内蒙古人民出版社)
- Kesigtoγtoqu Č. (2013) *Č. Kesigtoγtoqu-yin ögüilel-un songyuday*. dumdadu boti, Öbür Mongyul: *Mongyul surbulji bičig-ün sudulul*, Öbür Mongyul-un suryan kümüjil-ün keblel-ün qoriy-a keblegülüntarqayaba Öbür Mongyul-un asida neremjitü suryan kümüjil-ün keblekü bürin busu qariyučalyatu kompani keblebe.

- Ĵamyantübden, Ĵoriyту (1988). *Merged garaqu-yin oron*. Ĵangkiya-Isidanbiromva ĵokiyaba.  
 begejing: ündüsün-ü keblel-ün qoriy-a. 嘉木様圖布丹・卓日格圖『智慧之源』北京
- Ligeti (1970) A propos de quelques textes mongols preclassiques. *Hungarica: Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, Tomus X X III(3), pp. 251-284.
- Qai mi (2011) “*Lubsangčempil-un namtar sudulul*” — *čayan lingqu-a-yin erike-yin orčiγuly-a tayilburi* ba angqan-u sinjilel. töb-ün ündüsüten-ü yeke surγayuli-yin doktor-un ĵerge qamayalaqu ögüel, mongγul kele udq-a ĵokiyal-un salburi, ĵiluyuduyči bayσι Öljeyibayar.
- Rachewiltz (1996) Igor de Rachewiltz. *The Mongolian Tanjur Version of the Bodhicaryāvatāra*. Edited and transcribed, with a Word-Index and a Photo-Reproduction of the Original Text (1748). Wiesbaden: Asiatische Forschungen, Vol. 129.
- Rasisereng G. (2011) *Oyun-i todurquilyüči erdeni erike*. *Tib. blo gsal rin chen phreng ba*. degedu, dooradu debter. Kökeqota: Öber mongγol-un keblel-ün bülüglel Öber mongγol-un soyul-un keblel-ün qoriy-a. 格・拉西色楞『明慧寶鬘』呼和浩特 內蒙古文化出版社
- Ruegg (1973) Ruegg, David Seyfort. “On translating the Buddhist canon” (a dictionary of Indo-Tibetan terminology in Tibetan and Mongolian: the Dag yig mkhas pa'i 'byun gnas of Rol pa'i rdo rje)
- Sainbileg (2016) Sainbileg Byambadorj. “A Philological study on the *Dag-yig-mkhas-pa 'i- 'byung-gnas*” Korea: The Graduate School of Korean Studies The Academy of Korean Studies Seongnam. Dissertation for the Doctor of Philosophy in Buddhist Studies.
- Sarközi (2018) Alice Sarközi, ed. *Sumatiratna Tibetan-Mongolian Explanatory Dictionary with English Equivalents and Index of Mongolian Words*. Ulaanbaatar: Published by the International Association for Mongol Studies, Classical Mongolian Studies- I .
- Sečenbileg S. (2017) “Mongγol «γaнжуур»-un orčiγuly-a ba bar keblel-ün teüken toyimu” *Монгол Ганжуур Олон улсын судалгаа*. Улаанбаатар: Шинжлэх ухааны академи түүх археологийн хүрээлэн. pp. 117-134.
- Sečenbileg S. (2018) “Urad-un mergen Rabĵamba Küngγaĵamsu ba tegün-ü ĵokiyal бүтүгел” *Urad soyul sudulal*. Gün uqayan neyigem-ün sinjilekü uqayan, Bayannaγur qota-yin urad soyul sudulyan-u neyigemlig.
- Suzuki, Dr. Daisetz T. ed. (1962) *Catalogue Tibetan Tripitaka Peking Edition*. — *Kept in the library of the Otani University, Kyoto*. — *Reprinted under the supervision of the Otani University*. Tokyo: Suzuki Research Foundation.
- Tuyay-a Ü. (2010) *Mongγul keblel-ün teüke*. Köke qota: Öbür mongγul-un surγan kümüĵil-ün keblel-ün qoriy-a.

- bstan pa bstan 'dzin (2003) *chos sde chen po dpal ldan 'bras spungs bkra shis sgo mang grwa tshang gi chos 'byung dung gyas su 'khyil ba 'i sgra dbyangs*. mundgod, distt. north kanara karnataka: Publisher dpal ldan 'bras spungs bkra shis sgo mang dpe mdzod khang. Vol.1 / BDRC work No.28810.
- Булган Т. (2004) Зонхава Лувсандагва. *Их бодь мөрийн зэрэг, Бага ба дунд төрөлхтний мөр* I дэвтэр, Улаанбаатар: Монголын Бурхан Шашны Гандан Тэгчэлин хийд  
Өндөр Гэгээн Занабазарын нэрэмжит Монголын Бурхан Шашны Их Сургууль Азийн Буддистуудын Энхтайвны Бага Хурал.
- Булган Т. (2006) Зонхава Лувсандагва. *Их бодь мөрийн зэрэг, Их төрөлхтний мөр* II дэвтэр, Улаанбаатар: Монголын Бурхан Шашны Гандан Тэгчэлин хийд Өндөр Гэгээн Занабазарын нэрэмжит Монголын Бурхан Шашны Их Сургууль Азийн Буддистуудын Энхтайвны Бага Хурал.
- Булган Т. (2007) Зонхава Лувсандагва. *Их бодь мөрийн зэрэг, Амарлингуй оршихуй ба үлэмж үзэхүй ухаан* III дэвтэр, Улаанбаатар: Монголын Бурхан Шашны Гандан Тэгчэлин хийд Өндөр Гэгээн Занабазарын нэрэмжит Монголын Бурхан Шашны Их Сургууль Азийн Буддистуудын Энхтайвны Бага Хурал.
- Буяндэлгэр Г. (2014) *Их бодь мөрийн зэрэг. Гурван төрөлхтний мөрийн зэрэг.* Улаанбаатар: Цогт цагийн хүрдэн төв, Мөнхийн үсэг ХХК-д хэвлэв. (Уг эх нь Буриадын Агийн дацангийн 1906 модон бар)
- Бямбаа Р. (1997) « Зонхавын Ламрим Чен Бо (Лам-Rim-Chen-Po) дахь алдаа мэдгийг Агваанбалдан зассан нь » *Лавайн эгшиг*. Улаанбаатар: Гандан Тэгчэлин хийд. ху. 33-38.
- Владимирцов Б. Я.(1929) *Bodhicaryāvatāra Śāntideva*. Монгольский перевод Чhos-Kyi Нod-Zer'а. Ленинград: Издательство академии наук СССР. Bibliotheca buddhica X XVII Текст I
- Ганзориг Д, Бямбаа Р. (2017) *Монголчуудын Ганжууртай Холбоотой Ном Бүтээлийн Өв* . Арван долоодугаар зууны үеийн Халхын алдартай орчуулагч Алтангэрэл увшийн орчуулсан “Ихэд тонилгогч” хэмээх судар оршивой. Монгол билэг төв.
- Гомбожав С. (2016) *Дармадалай: Их монголын оронд дээдийн ном хэрхэн дэлгэрсэн ёсыг тодорхой өгүүлэгч Цагаан лянхуан эрхис хэмээх оршивой*. Төвд хэлнээс орчуулсан Номч мэргэн, хамба лам гавж С. Гомбожав.
- Дамдинсүрэн Ц. (1968) *Монголын уран зохиолын тойм III дэвтэр*. Улаанбаатар: БНМАУ-ын Шинжлэх ухааны академи хэл зохиолын хүрээлэн. Улсын хэвлэлийн хэрэг эрхлэх хороо.

- Дамдинсүрэн Ц. (1984) *Монголын уран зохиолын өв уламжлалын асуудалд*. Шинжлэх ухааны академийн хэвлэл.
- Канаока Хидэро ( 1992) Монгол хэлний шашны ном дахь орчуулгын онол—онцгойлон “Мэргэд гарахын орон” дахь зээллэг үгэнд холбогдох онолын тухай. Улаанбаатар
- Лувсанбалдан Х. (1975) *Тод үсэг түүний Дурсгалууд*. БНМАУ Шинжлэх ухааны академи хэл зохиолын хүрээлэн.
- Мацукава (2017) Мацукава Такаши. “ Японд хадгалагдаж буй Монгол Ганжуур Данжуурын тухай товч мэдээ” *Монгол Ганжуур Олон улсын судалгаа*. Улаанбаатар: Шинжлэх ухааны академи түүх археологийн хүрээлэн. pp. 151-157.
- Отгонбаатар Р. (2019) *Бодсадвын Явдалд Орохуй. Bodhisadu-a čari-a avatara orušibai. byang chub sems dpa 'i spyod pa la 'jug pa zhes bya ba bzhugs so//* Улаанбаатар: МБШ Төв Гандантэгчэлин хийдийн идгаачойнзинлин дацан «Мянган мутарт» ТББ, Мөнхийн Үсэг ХХК.
- Очир А. (2004) *Монгол Улсын Түүх IV боть*. XVII-XX зууны эхэн, Улаанбаатар: Хоёр дахь хэвлэл.
- Цэрэнсодном Д. (1969) *XIV Зууны Үеийн Яруу Найрагч Чойжи-Одсэр*. Судалгааны ганц сэдэвт зохиол, Редактор Дамдинсүрэн Ц. Улаанбаатар: Шинжлэх ухааны академи хэл зохиолын хүрээлэн.
- Цэрэнсодном Д. (2017) *Монголын Ганжуур, Данжуурын Төгсгөлийн Шүлэг*. Улаанбаатар: Шинжлэх ухааны академи түүх археологийн хүрээлэн.
- Ядамжав Г. (2017) *Бодь мөрийн үе оршивой*. Улаанбаатар: Тод номын гэрэл төв.